

の幼稚園をつくることは出来ない。すなはち問題は如何にして凡ての幼児を幼稚園生活といふものゝ公型に入れるべきかでなくして、如何にして一人々々の幼児に其の適切な幼稚園生活を提供すべきかである。而して此の問題は、新入園児を迎ふる時に於て、最も自然に、また最も痛切に考へられる。又之れを考へるに最も適當な機會なのである。

四

幼稚園が家庭へつながれるものであるならば、其のつながりを最も確實にする爲には、幹たる家庭からも終始幼稚園への聯絡を計らなければならない。そして兩方が不離の關係に於て、活きた協力の實を擧げなければならない。

此のことは家庭の方から見れば、理屈もない自然の要求である。大切な我子を自分の膝下の生活から幼稚園へ送るに、送りつばなしといふ筈はない。出来ることなら毎日でも幼稚園へ来て見て、我子がどんなことをして居るか、されて居るかを見たい筈なのである。ところが此の自然、然るべきことが實は行はれない。我子が幼稚園へ入つてから出る迄、始めと終りにたつた二度しか幼稚園へ来たことのないといふ親は少くない。甚しいのになると我子の幼稚園がど

んな處か知らないのさへある。こんな有様で協力も何もあつたものではない。たゞ呆れるの他はないのである。しかし、之れも、親が我子の教育に不熱心なといふ爲ばかりでもない。矢張り毎日のことに慣れて仕舞ひ、鈍つて仕舞ふのである。其の證據には、我子が初めて幼稚園に入るといふ時、乃至其の當座は可なりの感動を以て、此のことを考へて居るのである。中には、何を着せようか、何を穿かせようか、辨當はどんなのしようかと、こんな類の心配にのみ意を用ひて、もう少し深い意味の教育的配慮のしようも知らない親もある。しかし、假令、着物のこと、穿きものゝことにしかあらはれないにしても、其の心は我子の新しい生活の上に集注して居るのである。殊に平生我子の性癖などに就て、聊かでも憂慮して居る様のある場合には、此の新しい生活に、多大の希望を囑して、どの位の熱心を以て幼稚園、殊に保母に期待して居るか測られない。それが即ち新入園の時の親達の状態である。幼稚園は、親達の此の心を堅く捉へなければならぬ。それを逸せしめ、減却せしめることの無い様に、細心な工夫をしなければならぬ。

幼稚園と家庭との連絡難は、始終起る問題である。幼稚園が家庭の不熱心を嘆ずる聲も屢々

聞く處である。しかし、この問題の解決は、新入園の時から企てられなければならない。親の教育的熱心が最もよく燃焼して居る此の好機會を逸して、再び強めて之れを燃焼させ様としても中々難い。彼の形式的に行はれる保護者會に於て、親が今更の様に我子の教育の大切なことを先生なる他人から説き聽かせられなければならないのは、寧ろ滑稽的なことである。其の効果の極めて少いのも無理のないことである。

新入園の時に於て、あなたは幼児と共に、其の家庭を捉へることを、必ず忘れてはならない。よろしくございます。お引受致しましたと云つた類な軽い調子で、折角く教育的に可なり緊張してゐる親達の心を、うか／＼と弛緩させて仕舞つてはならない。大學の入學には新學生に宣誓をさせる。幼稚園では幼児に入園の宣誓をさせることが出来ない代りに、其の親、少くも母親には、充分嚴重な精神的宣誓をさせるべきである。此の精神的宣誓の實なくして、幼稚園は其の幼児を到底完全に引受けることは出来ない。何も形式的に宣誓式を行つて、判を押させた處で仕様もないが、先づ此の心持を以て、新入園を充分確乎たる教育的出發點としなければならない。

五

歴史的には幼稚園は何時から創まつてゐるにしても、あなたが幼稚園教育に何年従事して居るにしても、幼児の爲には新入園の時から幼稚園が始まるのである。また其の幼児の爲には、あなたも此時から始めて保母になるのである。考へて見れば大いに心を新にせられざるを得ない。

袖振りあはずも多少の縁といふ。受持の先生になり、我が幼児となる。之れが容易な縁であらうか。茲に其の子とあなたとが結ばれたのである。其の子の親とも結ばれたのである。其の子の生涯に重要な關係を持つ教育的出發點があなたの手にとせられたのである。あなたの保母としての意識は、實にこゝに新しい感動を促されるのである。あなたの教育的敏感性は常に激濁として寸時も鈍ることがあつてはならないが、新入園児を迎ふるといふ此の最好機會に於て、更に一新せられざるを得ない。

幼稚園を修了する幼児達に

わが貴重なる幼児達よ。皆さんは此の月の終りには幼稚園の教育を了へらるゝのである。さうして、皆さんが此の頃から楽しみ待つて居る小學校に入らるゝのである。誠によろこばしきことである。

いざ、勇ましく、元氣に、わき目もふらず、良き生徒となられよ。進んでは、中學校高等女學校の生徒としても、一心不亂、前を前を、上を上をとのみ目がけて進まれよ。何ものをも振りかへり見、回顧するの暇をも持たぬ程に進まれよ。されば、幼稚園のことなども、暫く念頭より去らるゝ何の咎めん。たゞ、この後の學校に専念して、その時の先生を尊重し信頼して、一つでも多く、新らしき進歩を怠らぬ様せられよ。而して、皆さんが受けたる總ての教育の全體の結果を以て、眞に立派な人間となられよ。之れ皆さんの親君達の期待なるのみならず、皆さんの爲に二年乃至三年の長き親愛の情を盡されたる幼稚園の先生方の御祈念である。

さて皆さん。眞に皆さんの將來を祈念せらるゝ皆さんの先生方は、皆さんの新しき幸福と進歩

とを希ふにのみ忙しくて、愛する皆さんとのお別れの悲しみを思ふ暇もない程である。況んや皆さんの心の裡に始終記憶として御自分をとめて置き度いといふことさへも、皆さんに向つては別段求められない程である。これは實は先生が愛する皆さんへの切なお望みなのである。聯かの無理もない自然なるお望みなのである。しかし、皆さんの之からの新しい専心のために、それをも望まれないのである。

しかし、私は信じて居る。皆さんは、假りに暫らくの間、幼稚園のことを忘れ、先生方のことを思ひ出すことがないにしても、いつかは、幼稚園と幼稚園で可愛がつて頂いた先生とを、しみんと思ひ浮べ、考へかへす時のあることを信じて居る。それは何時であらうか。或は皆さんが、まだ學生である間にも、事にふれ、時にふれ、さういふことがあるかも知れない。そして、なつかしさに幼稚園を歸り訪はるゝことがあるかも知れない。しかし、私のいふのはそれ等ではない。さういふ感傷的なことをいふのではない、もつと嚴肅に、もつと深酷に、もつと人生的に、幼稚園と其の先生方とを思ふことがあると信ずるのである。

皆さんは、皆さんの人格的成熟の或る時期に於て、自己の人格構成に與つて關係ありと思は

る、諸種の事實を、その時以前の過去の生涯の中に探さるゝことが必ずあるに相違ない。而して、それ等の諸事實の中から、最も重要なものとして、自分の受けた教育を思ひ出し又感謝せらるゝ時が来るであらう。そして、その感謝の対象としての多くの恩人の中に、いろ／＼の學校で教育を受けた諸先生を思ひ浮べらるゝ時が来るであらう、殊に、後の學校の先生から段々前の方の學校の先生方へ追懷を辿つていつて、今之から皆さんがお世話にならうとして居る小學校の先生方を、したはしくも、うれしくも、有り難くも思ひ浮べらるゝであらう、但し、之れは今の皆さんには何のことかよく分るまいが、其の時になれば、よく分ることである。而して、其の時に、然り其の時に、皆さんの感謝の追懷は小學校で止まつて仕舞ないで、もう一つ舊い幼稚園まで遡らなければならぬ。ならないと言へば傍から強ひることのやうに聞えるが、皆さんは必ずさうだと信ずるのである。私が特に今日言つて置き度いのは此の事である。

世の人の多くは、幼稚園時代の追懷を、たゞ夢の様だ霞の様だといふ。その夢の中に處々多少濃く明瞭な處もあり、その霞の中に比較的濃い點はあるにしても、全體として、兎に角漠然たるものだといふ。それも記憶が漠然として居るといふだけでなく、思索して見て、分解して

見て、たゞ樂しかりし夢、美しかりし霞との外、そこに何等實質的な、更に平くいへば、人格構成の上に、之れと云つて、捉ふべき利益のあつたことを見出し得ないといふ。楽しい時期ではあつたが、利益の時期であつたといふことが餘りはつきりしないといふ。従つてそれら等の人々は、生涯に與へられた教育的効果の總和を勘定する時に、往々にして幼稚園をぬきにする。すなはち、なつかしい昔としては思つても、自分にとつて、實に切實なる價值があつたとは考へない。従つて、幼稚園の先生方に對しても、詩の思ひ出の活きた記念としてか、或は、其の先生に於て幼かりし當時の自分を思ひ出して、なつかしく、したはしい方としてか、或は又、幼弱なる當時の我れの愛護者としての、懇なる御厄介を恐縮に思ふとか、先づこれ等に止まつて更に一步を進めないのは何か。すなはち、當時の軟弱微少なる、しかしながら、わが人格構成の第一期として最も貴重なりし時期に於ての教育者として、其の偉いなる恩を思はない。世の人の多くは、こゝまで一步を進めて居ないのである。皆さんも亦同様なことになるのであらうか。

皆さん。將來に於ける無限の期待の負擔者たる皆さん。若し、皆さんも世の人の多くと同じ

ことであるならば、私は、皆さんの今迄居られた幼稚園のために、皆さんの大好きな先生方のために、どんな悲しい、遺憾なことかと思はざるを得ないのである。但し、皆さんの先生方は、別段それで皆さんをおうらみなさりはしない。草の種子を蒔く人や丹精する人は、その草が花を開いた時、花から恩を思はれようとは思つて居ない。少しでも美しい花に咲いて呉れることが、そのことが自分への何よりの酬みだと思つて居る。皆さんの立派な人格の成熟は、それが何よりの事實として、先生方を満足させるのである。先生方は、此の二年三年の御教育が、皆さんの人格構成の諸勢力の中に、與り加つて一個の貴重なる要素をなすことを、確信して居るのである。何人が何といつても、自ら疑ふ處ない確信を有して居らるゝのである。皆さんが、後になつて、それを明かに心つかるゝのである。況んや、更めての感恩の辭などを少しでも望んで居らるゝのではない。そんなものは必要のない程、皆さんの教育者としての自己の價値と尊嚴とを確信して居られるのである。

しかし、私は、先生方には餘計なことかも知れないが、皆さんに注意して置く。皆さんは、將來、可なり遠い將來、各自の人格の成熟の時期に於て顧みて諸種の教育効果を思ふ時に、必

ず、忘るゝことなく、幼稚園教育の効果をもお數へなさい。そして、今、皆さんのお別れせんとして居る先生方の多くの御世話に對する御禮と共に、其の教育の恩を感謝することをお忘れなさるな。そして、美しく咲いた花の様な、その時の立派な皆さんの人格を、先生方の前へお目にかけて、先生を悦ばせてお上げなさい。

私は、皆さんのために、幼稚園のために、幼稚園の先生のために、此の私の希望の實現を切に祈念して已まないものである。

お子さんを初めて幼稚園に送る方へ

充分な心づかひは大切だがくどく言ひかすのは子供に悪い

一

初めて子供を幼稚園におくるについて一番大事でしかもよく間ちがへられてゐることがある。それは明日から幼稚園へ行くのだといふので大層かたくるしい生活に入るものゝやうに子供に説きかせることである。之は小學校の場合も同じ事で、教育といふものを餘り特別な窮屈な心持ちで始めるといふ事は極めてよくない事である。學校と異り幼稚園においては子供の年齢が少いだけなほ更この點が注意すべきことである。餘り事あらたまつたむづかしい生活へ入るといふ事を強くいひかされるために、あの可憐な子供が大人の想像もつかない程緊張した心持ちになつて、其ために健康を害し、殊に神経の上に少からぬ害を與へるゝがしばしばある。或ひは當分の間食欲がへるとか、或ひは體重がへるとか、或ひは睡眠の上にいるく影響を起こしてくることなどもある。晝の間はそれほどに氣がつかないでも、夜寝てから不意に

床の上に取り上つて顔色をかへたり、泣きだしたり、甚しいのは一種のかるい痙攣をさへ起すことがある。それは醫學で夜驚と名づけて、子供の心に激しい刺戟のあつた夜の夜に起るとされてゐるが、かういふ事が幼稚園に初めてはいつた子供におこつたりすることがないとかきらぬ。かういふはなほだしい例は勿論その子が神経的な素質をもつてゐるためであるが、それからおして見ても、普通の子供でも相當の心の激動をうけるものだといふことは考へねばならない。今まで少數の家庭のなかにくらし、あふ人も聞く言葉も見るとも、日ごろなれてゐる氣安いものばかりであつたものが、見知らぬ建物、見知らぬ友だちの世の中に出るのであるから、さなきだにやさしい子供の神経は刺戟をうけてゐる。それを更にそばから餘計なことをいつて、「しつかりしなければいけない」「行儀よくしなければいけない」。「家にゐる時とはちがふから」などといふのは、いふ大人はそれほどのつもりでないにしても、幼な心には非常な緊張を與へるのである。

二

たゞにかういふ身體の上に及ぼしてくる悪い影響ばかりでなく、幼稚園の方から見てもいろ

いろいろの悪い結果をおこす。初めて家庭から受取つた子供を迎へる時に、幼稚園の保母の最大の苦心は「どうしてこの子供と親しくならうか」「いひかへれば」「どうして心と心のへだてない接觸を得やうか」といふことである。このためには勿論いろいろの経験にもとづく態度も方法もあらうし、殊に保母自身の心が如何なるやはらかい子供の心にもすぐ觸れ得られるやうなやはらかさをたゞへてひなければならぬのであるが、それにしても子供の心が子供らしくなく不自然に閉ぢて居る場合には、これを開いてうちとけた心持にかへすことが非常に困難である。元來子供の心は誰れにでもしたしみやすく、へだてのない筈のもので、殊に、こやかに迎かへてくれる姉さんやおばさんのやうな先生方に對しては、この子供の自然の心持がすぐに出てくる筈であるが、時にはさうでないことがある。それは中には神経質のはにかみやといふたぐひの子供もたまにはあるが、寧ろ家庭でこの開かうとする子供の心を無理に閉ぢるやうに、くだらない無用の心得のやうなものをいひ聞かせる爲である場合がおほい。極端に言へば「先生を見たら、こわいものと思へ」「しかられるものと思へ」「鬼だと思へ」とでも言つたやうに嚴格に教へる親もあるやうである。親心としてはさういふやうにしていかなければ教育とい

ふものが受けられないと考へる場合もあらうし、また自分の家のわがまゝものを人さまにお頼みするには、親としてさういふ豫備的注意をしつかりしておかなければ相すまぬといふ、義理がたいとでもいふ心持ちでする人もあらう。

考へ方によつては、それらの親心そのものには無理もない點もあるとも見なければならぬが、これはほんたうの教育をうけさせる必得でもなければ、またほんたうにわが子を、信頼する保母に託する正しい態度でもない。教育は勿論いろいろなことをするけれども、その出發點或ひは土台とでもいふべきものは、子供のあからさまなありのまゝな自然の正直な心持ちからでなければ、何一つほんたうのことはできないといふものである。親の出かけのいひきかせによつて一種の不自然な心持ちをさせて、大切な教育の第一歩に入らせるといふのは非常な間違ひである。幼稚園へ始めて子供をおくるについては、できるだけ「たのしい世界へ、親しみのおほい世界へ、自分を心から信じてくれる人々の世界へ行くのである。」といふ心で出さなければならぬ。しかしこんなことを事あらためていひきかせるだけでも緊張するやうな子供ならば、極く不用意な心持ちで、一寸御隣りのおばさんのところへでも行くやうな樂な氣持ちにさ

せておくのが一番よい。

三

たゞし此の不用意な心持ちといふのは子供の心についていふことで、親の心としては決して不用意であつてはならぬ。幼稚園に子供を送るのには親として非常な用意のいることである。「まあ、うちの子供も幼稚園に行くやうになつて手が楽になつた」といふやうなことは非常な間ちがつた考へである。自分の子を人さまに御願ひするといふ普通の義理からいつても、それには充分な用意もし心づかひもしなければならぬ。たゞ義理や人情からさうなるべきでなく、實際に幼稚園から、どれだけ充分な利益をわが子がうけてくるかどうかといふことも、大いに親の心如何によるのである。幼稚園としては家庭の心がけの如何にかゝはらず、其の子のために最善をつくさうとは希ひねがつてはゐるが、またさうあるべきであるが、同じ遊ぶにしても遊ぶに都合のよい服装をしてる子供と、さうでない子供とは同じ幼稚園から同じく與へられるものをうけながら、大いに違ひのあることはしかたがない。親の心づかひになる心持よい御辨當をたべる子供と、不注意なるお辨當をたべる子供とが、幼稚園生活からうけとる利益が

非常な差があることも争へないことである。要するに幼稚園へわが子を送るについては、親は緊張した心づかひをしなければならず、子供には出来るだけのんびりとした氣樂な、どかな心持ちで幼稚園をたのしませるやうにしなければならぬ。

四

終りに、大事な可愛い御子さんを初めて幼稚園におくる家庭の方に、是非とも特に申し上げておきたいことは、家庭自身が幼稚園と人間的な親しみの關係にならなければ、ほんたうの教育は到底出来ないといふことである。子供を幼稚園におくることは、子供を中にして家庭と幼稚園兩方が相抱く様にして教育して行くことにほかならない。しかるに子供は幼稚園で楽しんでくるが、家庭は幼稚園とあかの他人であるといふやうな冷淡な關係であつては、決して我子のためによい教育の出来るものではないのである。

家庭と幼稚園

いろ／＼の意味に於て、幼稚園から家庭へ希望もし、勧誘もしたい事が澤山ある。其中主なることを二三述べて見度。

(一) 幼稚園の教育は家庭の教育との協力事業であるといふことを忘れない様にして貰ひ度い。世間には其子供を幼稚園へ通はせるやうになれば、その子の教育一切を幼稚園でして呉れるかの様に考へて居る家庭が無いでもない様である。それも幼稚園の教育力を非常に大きく見積つて居られるものであるとも考へれば考へられる。けれどもそれでは家庭の教育力を自ら餘り小さく見て居られると言ふ事にもなる。殊に屢々耳にすることであるが、我家の子は幼稚園へ入れてあるのにちつともよくならない、といふ類の訴へは、當然二人で償ふべき責任を、自分の分は棚へ上げて對手ばかりを責めるといふ形がある。勿論幼稚園の方では、其責任を獨りで償ふ位の覺悟は有して居る。家庭の方からさういふ訴へを聞くことは、寧ろ良薬として甘受し、また或る程度まで深く恐縮するのである。決して、それを不快として返し言をいふの

ではない。しかし、それでは其の子供の爲に却つてよくないと思ふのである。殊に、こんな小言を幼稚園へ訴へる家庭の中には、幼稚園で折角苦心して與へて居る教育を、一日々々と家庭の方で破つてゆく様なのが事實上少くないのである。若しそんなことがあるならば、底なし釣瓶で水を汲むと同じである。幼稚園の努力の無駄になるのも惜しい至りであると共に、子供こそ一番の損を受けるのである。元來子供を幼稚園へ入れるのは、家庭が教育的に無能力なからではない、家庭は家庭として、その充分の教育力を發揮して居る上に尙ほ幼稚園の協力を得ようといふにある。私共では何も出来ません故に、何分よろしくお任せするといふのは、一通りの世間挨拶としてなら兎に角、事實さういふ心持ならば飛んだ誤りである。學校とか幼稚園とかを、信賴するといふことは最も大切なことであるけれども、たより過ぎるといふことは當今の家庭の通弊であるかも知れない。而して學校や家庭の教育が充分効果を發揮し得ない大きな理由の一つであるかも知れない。

(二) 幼稚園に頼り過ぎ、任せ過ぎてはいけないといふのは、幼稚園の教育力を疑ひ侮つていふと云ふことは大に違ふ。然るに、事實上、此の二つが奇怪な矛盾をなして居ることが尠く

ない。幼稚園にまかせ過ぎて居ながら、幼稚園を尊敬して居ないと云ふやうのことがそれである。何たる甚しい矛盾なのであらう。何たる我まゝ勝手のことなのであらう。かういふ有様では愈々子供の教育は効果が擧がらない。のみならず却つて害せられてゆく。

親達に幼稚園を尊重する心がなくて、何で子供の心に幼稚園を尊重せしめ得よう、幼稚園の不完全、保姆の缺點などを子供の前で口外する如き心なしは論外である。大切な我子の教育の協力者として之れを心の底から尊敬するのではなくては駄目である。言ふまでもないことであるが、幼稚園は家庭の命を奉じて子供のお相手をして居る處ではない。保姆の社會的位置は、素人目に高いものでない。中には随分若い保姆もある。しかし、我子の教育を托するに足りないと思ふのなら、始めから頼まない方がよいではないか。勿論社會的一般の問題としては、充分に尊敬を値せられない責が、或部分教育者の方にあると見なければならぬこともあるかもしれない。しかし「我子の先生」と云ふ關係は絶対の關係である。少くも我子にとつては絶対の關係である。結びつけるなら正當に結びつけなければならぬ。然らずんば早く關係を絶つた方がよい。

要するに、家庭は我子の教育の協力者たる幼稚園に對して、全幅の敬意を有しなければならぬ。

(三) 協力者であるからには、たと分擔して居るといふだけではない。すなはち兩方から互に注文が出なければならぬ。相談せられなければならない。さうして其の相談の結果が充分實行せられなければならない。

幼稚園の方でする所謂保護者會は、此の最もよい機會であるが、それが充分利用せられて居ない。第一、眞に相談甲斐のあるお母さんの出席が少い。出席しても何一つ、しみじみした相談をしない。擔任保姆に遇つてお禮を言つて歸る位のことが多い。幼稚園はお禮を言つて貰ふ爲に會を開くのではない。聞いて貰ひ度いこと、聞かせて貰ひ度いことが澤山あるからである。但し今日の保護者會が充分にその効果を發揮し得ないのは、會のしかたの悪いと云ふこともある。第一、全國の保護者を一度に多數招くと云ふのもよろしくない。之れは是非幾度かに分けて、保姆がゆつくり話の出来る程度にしなければならぬ。第二、幼児の保育状態を見せると云ふことは、種々の方面から利益のあることではある。しかし、それが保護者會の主なる目的

になつてはいけない。保育もいろ／＼見せ度い。話も澤山したい。それで半日たかだかといふのでは餘り忙し過ぎる。

兎にかく、保護者會はもつとよく利用せられて協力者の會合といふ意義が發揮せられなければならぬ。しかし必ずしも年幾回の保護者會のみが相談の唯一の機會ではない。家庭の母は、何故もう少し幼稚園を訪問しないのであらう。世には保母の方から訪問して来る筈なども考へてゐる家庭もあるかも知れないが、大いなる心得迷ひである。協力者とは言ひ條、どこ迄も家庭の方が主任者である。我子と云ふ關係からいつても勿論のこと、保母は一人で多勢の子供を引受けて居ると云ふ點から言つても、母の方から幼稚園を訪ふのが當然である。

(四) 幼稚園の方から注意せられて、やつと、家庭の方が氣がつくと云ふやうなことが、先づ以て前後轉倒の至りである。況んや幼稚園からの注意が家庭に於て充分遵守實行せられないといふ様のがあつたら、たゞたゞ意外千萬のこと、言ふ他はない。

朝何時には出園させて下さい。大した理由もなく遅刻したり早過ぎたりする。何時に迎へに來て下さい。いつも／＼その迎へが遅れる。手拭を持たせて下さい。それが又しても忘れられ

る。辨當は飽はんはいけません。相變らずパン屋の袋をそのまま持つて來る。随分世話の焼ける話である。と言ふよりも、何故斯く我子の教育に意を用ひないのか理解せられない話である。

(五) 幼稚園で如何なる教育をして居るのかと、その大體位は家庭でも心得て居なければならぬ。幼稚園では辨當の後に必ずうがひをさせるとする。之が幼稚園に來て居る時だけすればよいのではない。全體の習慣にし度いと考へて居るのである。處が家庭では頓と之れを實行させない。幼稚園で骨を折つて斯ういふ習慣を養ひつゝあるといふことを熟知して居ながらしない。三度の食事に一回だけ幼稚園でうがひしても朝と夕と二回はしない。之れで何の習慣がつかうか。數から言つても差引勘定明瞭な話である。之れは一例であるが、何事も同様である。而して、何か新しいことを始めて、習慣を養ひ度いと思ふ様の中には、幼稚園の方からも必ず家庭へ通知して置くべき筈である。家庭では通知せられたら必ず實行すべきである。是で始めて協力になる。幼稚園と家庭と子供が二様の違つたことをして居るやうなことで、何の教育が出來ようものぞ。

又幼稚園で唱はせる歌などにしても歌詞位は印刷して家庭に通じて置き度い。實は家庭の方で聞きに来て然るべきであるが、多勢のことであるから幼稚園から分けた方が便利であらう。そして、子供が家庭へ歸つてその歌を唱ふ時、思ひ掛けない歌詞の間違ひがあることがある。一寸訂正してやつて欲しいものである。之は前に述べた習慣養成に比べれば小さいことではあるが、之れも協力者たる當然の用意である。その他數へて行けば、あの事にも此の事も、もう少し家庭と幼稚園とが協力者らしくその實を擧げて欲しいことが澤山ある。

幼稚園の朝

幼稚園の朝は大切な時間である。子どもの新鮮な心持を如何に迎へるかは、大きな注意を要する問題である。昔の幼稚園では會集といふことにした。會集そのものゝ問題は別の話として、兎に角、それを教育開始としたものである。會集前は幼稚園のまだ始まつてない時間とした。會集はしないでもさあ之れからとくぎりをつけて教育開始をする風がどこにもある。其のくぎりを鐘するのもある。「皆さんおはいり」でするものもある。いづれにしても、其のくぎりがある以上、その前は軽く扱はれる。子どもは來てゐても、先生は居ても、まだ幼稚園は始まつてゐないことに考へられたりする。それでいゝものであらうか。

くぎりをつけることは、先生にとつては便利なことである。少くもくぎりのいゝことである。殊に性分によつては、そうしなければまどまりのつかない様な氣のする人もあるであらう。しかし、それは、幼稚園を幼稚園としてまどめて考へ、教育を教育としてきまりをつけて考へるために起ることである。つまり、一齋教育主義のためである。ひとり／＼の子供にとつ

て、幼稚園の生活が何のくぎりを要しよう。家から、道路から、幼稚園へ、ひとつづきの生活があるだけである。その生活がそのままつと幼稚園の教育の中へ導かれるのでなければならぬ。遠浅に、する／＼と幼稚園へすべり込むといはうか。爪さき上りに、いつの間にか幼稚園へ登り上るといはうか。その間に、何のしきりもくぎりもいるものではない。不要なるのみか、そういふものは却つて邪魔なのである。

劃一々齊の學級教授を以てする學校では、鐘をならして、いざ之れからといふ様なことも已むを得ないことであらう。のみならず自由なあそびの生活から、特に計畫せられた教育へ移るには、そうしたハッキリした意識のさかひをつけることも、時に或は必要かも知れない。しかも、幼稚園でそれを做ふ要はない。そんなにして、強めて被教育意識をもたせることは、つとめて特殊意識を避ける幼児教育の根本原則に反するものである。

もつと自然な、人間が人間を迎へるあたりまへの態度がいくらもあらうものである。
「お早よう」

子どもが來た時、先生が玄關でなり、銘々のお部屋へなり迎へて下さる。子どもにとつて、

どんなに嬉しいことか分らない。全部の先生が皆整列して居て下さる必要はない。のみならず、それが必ずしも御挨拶のための御挨拶ではない。淡ひながら先生への親しみを以て、いそ／＼として集つて來る子供の心を迎へるために、先生の笑顔ほど大事なものは無い。その貴い笑顔で、子どもの爲めに其の日の幼稚園びらきをして下さるのである。自然御挨拶だけでは終らない。そこから直ぐに個人對話が始まらなければならぬ。

そこへ又他の子どもが來る。

「そう……」

「あなたも……」

「それから……」

楽しい一團の朝の會話が、それが即ち幼稚園の本性の他のものであらうか。——朝の挨拶は挨拶、教育はいづれ後程と思つたりしてはならない。

各のテーブル（幼稚園にはテーブルはあつた。デスクはない）には、それ／＼面白さうなも

のが待ちかまへて居る。一つには畫用紙とクレイヨンが置いてある。一つには粘土が置いてある。一つにはボール紙と鉄と糊と、前日から造りかけたお家とが置いてある。子どもは銘々好むところへ行つて仕事を始める。あそびだかお稽古だか、そんな區別が子供にあるものではない。たゞ面白いから面白いだけのことである。それを、まだ教育が始まらないと誰がいへよう。——子どもが何か始めたところに、其の日の幼稚園は始まるのである。

若しそれがあそびであると言ひたいならば、其のあそびから教育へ、いつの間にか引き入れてゆく處に、幼稚園の先生の手腕がある。さあ積木を始めませうと、開き直らなければ教育が出来ないと思ふ人は、一番幼稚園らしくない先生である。

これはお部屋の中のことに限られない。砂場でも、ブランコでも、スベリ台でも、植込みの傍でも、子どもの興味をひきつけたものから其の日の幼稚園は始められるのである。先生は、そこに教育の機會を見出してゆくだけのことである。だけのこと、いへば容易い様であるが、教育を教育として始めるよりは大に手腕がいる。むづかしいけれど、さうでなければ眞の幼稚園にはならないのである。

斯うして、ひとしきり、みつちりした朝の時間が充實せられるのである。子どもとしても、一番興味の新鮮な自發性に充溢してゐる。神経の落ちついてゐる時間を貴重にせられる程幸なことではない。それを教育のまだ始まらない時間として、先生は職員室に、そしてお室は子供の控室に使はれて居るのでは勿論ない。いゝ加減子どものあそびあつた頃になつて、さあ始りですから集りなさいでは、其の一日の幼稚園が出發點に於て既に誤つてゐるのである。そのあとが、幼稚園として自然味を持ち得ないのは已むを得ないことである。幼稚園を、ほんとうに子どもの生活の自然味の中に置き得るのも置き得ないのも、朝にあると云つてよい。而して、幼稚園の中に子どもの生活を置くか、子供の生活の中に幼稚園を見出すかの、極くこまやかな違ひが一つに懸つて朝にあると云ふべきである。

幼稚園の朝については、餘程こまやかに研究せられる必要がある。

個人對話の教育價值

— 先生と子ども —

おはなしの教育價值に就ては知らないものはない。幼兒教育の方法の中でも、最主要なもの一つとして、誰れでも、之れを重視し、また苦心する。しかも、その所謂おはなしは、先生がして子供が聴くお話である。話し手と聴き手とははじめから分けてあるお話である。そればかりか、そのおはなしは其の話の始まらない前から出來て居るもので、それを先生が子どもの前に持ち出して來るのである。

そこで、どんなものを持ち出してくるか（おはなしの選擇）どういふ風に持ち出すか（おはなしの技術）といふことが大切でもあり六かしくもある問題になる。そして、その兩方がうまく行つた時に、保育の方法としてのおはなしの價值が發揮せられてくる。其の選擇は用意であり、技術は工夫である。つまり、用意と工夫とで、おはなしが子供に與へられるのである。そ

の用意したものを持つて、その工夫した仕かたによつて、いざとばかり、子供の前に立つのが、先生のおはなしである。

ところが、斯うした謂はゞ多少開き直つたお話しの外に、先生と子供とは、いつといふこともなく、何といふこともなく、どちらからといふこともなく、おはなしを交換する。えへんと咳ばらひをして始める譯でもなく、しんとして必ずしも耳をそばだてる譯でもないから、お話をして居るか居ないかも、恐らく多くの場合心づかずに居る位であるが、これがなか／＼教育上意味の多いことである。あの豫め用意を以てせられるおはなしに必ずしも敢て劣らない教育價值をもつものである。そしてまた、なんでもないことの様で相當に六かしいことである。

その細い工夫を以てせられるおはなしの六かしさにも、決してまけない六かしさのものである。さて、この種の會話をなぜ個人對話と云ふか。聴き手話し手が分れないで、徹頭徹尾、あひ對のことだから對話といふのはいゝとして、特に個人といふものは何故か。なにも一人對一人のシングルゲームに限らず、先生對、とりかこむ數人の子ども、先生も亦、數人といふ様な場合がいくらかもある。それを特に個人對話とは何故いふのか。そこには一寸考へて置くに値する

意味がある。

あのおはなしといふのも、聞き手一人と云ふことはいくらかもある。しかし、大抵は多勢に聴かせるのを普通として、さて現に聴いて居るものが多勢でも一人でも、おはなしそのものに大した變りはない。話し方には自然多少の違いがあるけれども、一人に聴かせる桃太郎、多勢に聴かせる桃太郎といふ差別があらう筈はない。之れは、聞き手の數に何の關係がないといふよりも、聞き手の有無さへも、桃太郎のおはなしの存在には無關係のことだと言つた方がいゝのである。つまり桃太郎といふおはなしは、話し手、聞き手の間に取扱はれる前に、一つの童話として存在して居るのである。だから假りに一人の聞き手に話して居る時でも、個人童話などといふことはない。

しかるに、對話の場合に於ては、その相手が一人と一人とである場合は勿論のこととして、人數は多勢が居るにしても、話そのものには個人的のものとして行はれるのである。便利上、皆さん、皆さんは、皆さんの、といふ様な言ひ方のせられる時でも、その話のねらひは一人々々へ向けられ、或は一人々々で受けとめて居るといつていゝのである。さうでないといふと、此の心

持ちが徹底しない。折角の對話が演説になつて仕舞ふ。對話はおはなしとも違ふが、演説とも違ふ。演説は諸君よと、群集に説く。對話は、どこまでも、一人々々へ話しかける。そして、一人々々からの受け答へをまつ。

そんな譯で、個人對話と名をつけることにするが、こんな名をつけたりすると、其の一番大事な特色、即ち純自然的といふことを損じ易い心配もある。此の名はいはゞ、ありとも知らぬものを空氣とよぶ様なもので、平生は忘れて居た方がいゝ。さあ太郎さん、これから個人對話を始めませうなど、言はないことにして下さい。太郎さんが驚くばかりでなく、個人對話そのものが面くらつてしまふから。

二

個人對話の教育價値は、數へて見れば随分澤山あるが、その中で一番中心なものは、人間性教育の意味に於てしたしみの教育の出来ることである。之れは、之れ以上説明を要しない程、わかりいゝことと思ふが、私の茲にいふのは、個人對話によつて其の先生と其の子どもとの親しみが出来るといふことの他に、(此の事自身が非常に有意義なことであるが)人にしたしむ心

そのものを幼時に養ひ得るといふ、一般的教育効果をも考へたいのである。

幼児教育に於て、親しみの心を養ふの必要なることは言ふまでもないが、その方法とでもいふものがあるとするれば、つまり、親しみの経験をさせるといふことにほかならない。勿論親しみは人間の本性の一つで、外から養ふといふべきものではないが、打ち捨て、置いては、内部の本性も十分に育たないことがある。而して、内にあるものを育てるには、之れが適當に外にあらはれて、人性が人生の事實となる機会を與へなければならぬ。この機会が與へられないと、性はあつても、内に閉ぢこもり、時には、多少萎びて仕舞ふことを免れなかつたりする。又時には、折角の美しい強い本性が、適當に外にあらはれて其の自然の満足を得られないために、妙に、こぢれた、いはゞ高踏的のものにならんとも限らない。

勿論 他の方面から云へば、したしみは心の内の事實である。外にあらはるゝ、外からの満足など、云ふことは浅いことに過ぎない。そういふ傾向が多くなると、あらはれ易いが浅いものになると云ふ心配も言はれる。一應理のあることには相違ない。したしみと言つて、栓のぬけた桶の様に、たゞあらはれ易い情の持ち主になることの、誠にくだらぬことは言ふを俟

たぬ。容易には漏れ出でぬが、出づれば澄み透つて居る岩の眞清水の様なしたしみ、が貴いことも言を俟たぬ。しかもたゞ、いたづらに閉じこめて、こじれた心になるかも知れないことは、子どもの心の正しい發達として、何より憂ふべきことである。こゝろいふ意味に於て、したしみの教育の一つの仕事は、心の内の親しみが外にあらはれ、また、外からのしたしみが、つけ入られる公道をつくつてやることである。個人對話は、その心と心との間の道をあける一つの方法である。

次に、もう一つの大きい價値は、此の個人對話によつて、個人的に心のはたらきをすゝめ、促し、導き得ることである。子供の心の口を、あんと上に向かせて、上から物でも押し込む様に教へこむことの、眞に心のはたらきを練る所以でないことは言ふまでもない。と同時に、子どもの心を、自發々と、たゞいなごの様に跳ねさせて、それだけで、心のはたらきの完い養ひの決して出来ないことも言ふまでもない。どちらにしても、子どもの心の教育は、もつと親切なことでなくては出来ない。丁度撃劍の腕を磨くのと同様に、先生が相手をして、撃たせて見たり、受けて見たり、撃ち込んでみたり、受けさせて見たり、その間に、腕のはたらきが進

歩する様にしむけてやるのでなくては出来ない。個人對話は、たとへが少し向きが違ふが、心のはたらきを錬つてやる、心の仕合である。

よく先生のおはなしは聴く子であるが、先生とお話の出来ない子がある。その責大抵は先生の方にあるを常とするが、子どもとしては、心の無情な子どもである。先生には話したが。しかし、自分一人しやべることを知つて居て、人の話をちつと聞くことの出来ない子どもがある。之れ亦、其の責、大凡そ先生にあるが、子どもとしては、心の落ちつかない子どもである。共に、此のまゝでは、心の進歩の上に非常な損なところに居る。直してやらなければならぬ。

勿論、子どもに、直ぐに、あの話好きの隠居さんの様になれといふことは無理だ。無理であるのみならず無用だ。無用であるのみならず時には危険だ。老人のは、時によると、話題の内容には興味はなくて、たゞ、さうした話のやりとりの間に、ハ、ア、ナル程、いやどうもその、ですかね、斯うも考へられますね、つまり言ひ方次第ですな、御尤もくと楽しんで居ることがある。之れは對話を弄して居るのであつて、茶味はあつても人生味はない。子どもは、

そんな不真剣な話はしない。話より事實だ。事實の興味がつゞく限りの對話だ。そこで、老人の様に對話を味つて居る様なことはない。其の問題の事實興味が盡きれば、さつさと中止もすれば、勝手な決論へ飛躍もする。話してる傍へ犬でも來ればすぐ其の方へ飛んで行く。ちつくりと老人同志いつまでも茶をのみ煙管をいぢくつて面白がつて居る様な風の對話を、子どもに要求したら、子どもの眞性を害することになる。おばあさん子が、冬季炬燵大學で仕込まれて、いやに、理屈つばいこまつしやくれた口振りをする小隠居さんになつたりするのは、此の例である。

しかし、之を以て、個人對話の教育價値をすてゝはならない。殊に達道の大師範になれば、廊下や、庭の立話で、電車の中の十分二十分で、すつかり、見事に活きた心のはたらかせ方が養ひ得ないものではない。

園外保育

園外保育は、文字の示す通り、保育の場所及び手段を幼稚園内に限らず園の外にまで擴張するといふ意味である。従つて最も廣義の内容を有するものであつて、斯く斯くすることのみが園外保育であるといふ様に狭く限らるゝものではない。理論の上から言つてもそうであるし、殊に實際上、園外保育の發達の爲に、充分廣く解釋して置く方が利益であると思ふ。そこで念の爲め、その廣い内容を分類して見ると、次の如くなるであらう。先づ其の目的に就て見れば消極的と積極的との二つがある。消極的といふのは、幼稚園の位置、廣さ、設備等の關係から、日光及び新鮮の空氣の充分といふ點に欠けて居るとか、自由の遊戲活動の餘地に乏しいとかいふ缺陷を補ふために、園外適宜の場所へ引卒して行くといふのである。消極的といふ稱呼は何となく當らない様の氣もするが、幼兒教育の主要なる目的の一つを、其の幼稚園内だけでは充分ならしめ得ないから之を行ふといふ意味で、此の場合の園外保育は、園内保育の仕事に附け加へるといふよりも、補ふといふ性質のものである。但し、消極的と呼ぶ故を以て、此の

必要を輕視してはならない。殊に都會幼稚園の大多數に於て、此の必要の無いといはるゝ處が、果して幾つあらうか。

次に積極的といふのは、假りに上述の如き必要を離れて、尙ほ園内保育に附け加へてする場合である。即ち限られたる園内に於ては到底與へることの出来ない、實物接觸の機會を與へることである。其の細かい目的、適用の範圍に於ては、大いに趣を異にするけれども形式に於ては、學校教育の「實地見學」に似たるものである。一例を挙げれば、動物園へ連れてゆく、練兵場へ連れてゆく、又停車場へ連れて行く、殊に、都會幼稚園では郊外田野等に連れてゆく自然との接觸である。或は又斯くの如く大仕掛けでなくとも、近所の神社佛閣とか、乃至金魚屋でも小鳥屋でもよからう。但し斯くすることは必ずしも學校教育の場合の如く幼兒の觀念界を多くするといふ純知的な目的を有するのではない。結果としては自然をういふことになるでもあらうけれども、主とする處は幼兒の興味を刺戟するにある。従つて、其の自發活動の發動を促すにある。狭い園内の、いつも變化のない繪畫類の類や、小數の枯死せる標本や、きまりきつたお話や唱歌の繰り返しでは、折角充溢せる自發活動も、其の發動の機會、形式を限られる

恐れがある。幼児には盛なる自發性があるからといって、其の自發性に形を與へ、材料を與へないでよからうか。幼児は想像力が活潑である工夫が大であるからといって、何の材料をも與へないでよからうか。勿論、設備の完全によつて、園内に於ても、此の目的の幾分を行ふことは出来る。しかし、幼稚園の仕事は幼稚園の門内に限り一步も外に出られないといふものではない。園外保育といふては事々しくも聞えるが、つまり心ある家庭の親が日曜休日を利用して子供を外につれて出ることを幼稚園がするだけのことである。そしてそれが極めて有効なことで又至當なことである。

第二に、園外保育を其の度數によつて分類すれば常時的隨時的の二つに分ち、更に常時的といふのを、其の度數の多少によつて、恒常的、定期的の二つに分けられる。常時的、隨意的の別は、實行者の計畫の趣旨によつて起る譯で、之れを他の保育の事項の如く、幼稚園教育の常時的手段の一つと思惟して行ふものと、隨時的のものとするとの區別である。常時的の中の恒常的と定期的との別は、謂ば度數の差に過ぎないといへるが、恒常的の方は、之れを日々の保育として行ひ、定期的の方は、假令ば學校の運動會とか遠足とかの如く一年の或る時期を定

めて行ふのである。而して此の度數による別は幼稚園の位置によつて大いに支配せられること、假令ば大都市の中央にある幼稚園の如きは種々の困難から恒常的園外保育といふことは中々六かしい。先づ定期的にして其の度數を出来るだけ頻繁にする様に計畫するより外はない。しかし、隨時的でなく定期的にするといふことは、園外保育の必要の認め方によつて起ること、隨時的でも度數が多ければよい様なもの、各保育期に於て度數に甚しい遍頗が起つたり、甚しきは、つい一度も行はないといふ様のもも起り勝ちである。即ち少くとも計畫的に行はるゝことにしたいのである。

第三に、實行の方法から見れば、全園で行ふのと、全園を二つ乃至三つに區分して行ふのと、組毎に行ふのと、組を更に小分して行ふのとに分類せられる。之れは幼児數の多少、保姆の數等によつて生ずる違ひで、極く實際上のことに屬するから、別段論ずる程のこともないが、園外保育といへば全園でしなければならぬ様に、往々考へられて居るのは誤りである。その爲に園外保育の實行をどの位妨げて居るか分らない。しかも、全園で行ふのは寧ろ特別のことであつて、原則ともいふべきは、組毎にするのが最も適宜にして、又効果が多い。尙ほ、

一組の幼児数が餘り多ければ、それでも實際に不便があつて、更に小分した方がよいこともあらう。いづれにしても、學校の遠足や修學旅行の様に考へて、全園擧つて出掛けなければならぬといふものではない。時に、その方法を取るも亦面白いことであるけれども、それは特別な目的によることといふべきである。

茲に、一例として神戸幼稚園の園外保育の參觀記を擧げて見る。

前夜の大雨は今朝はもう止んでは居た。しかし空も曇つて居れば、時々冷い風につれて小さめさへしぶきかけたが、其のうち空も少しは明るくなつて、うす日影もさしてきた。しかし夜上の雨に山の道草はぬれて居るに相違ない。「どうでせう」と望月さんにきくと、「参りませう」といふ答へである。園外保育を常時的恒常的に、しかも全園の半分づつを交替的に毎日何處かへつれてゆくのをきめにしてあるといふ随分六かしい實行は、成程此位の強い態度でなくては出来まいと思つた。

此の日行つたのは口一里山とかいふ可なり遠い處であつた。神戸の町は坂が多い。其の坂道

を山手通へかゝつて、町を抜けると、足つゞきに其山の麓になる、お庭式の人工の加つたやさしい山道ではなくて、浅くこそあれ、ほんとうの山道らしい赤土道がうね／＼と爪先上りになつて居る。少しゆくと急な谷川へかゝつた橋があつて、その傍に馬をつないだ大きな百姓家がある。そこからはいよ／＼山道らしくなつて右は崖、左は谷、道の兩側には雜草も茂つて居れば、道の真中に大きな石も出て居る。坂も増して来る。それに天氣は晴れて来て日があたる。私達は中々えらい坂だと語りあつた。しかも、幼児達は、元氣な顔つき元氣な足どりで、といふよりも寧ろ普通の町の道を歩くと同じ平氣さで、ずん／＼上つてゆく。一人の可愛らしい女兒が、着物の裾を軽くはしよつて「おゝ、しんど」と言つたのを聞いたのは、それから大分上つて行つてからのことであつた。しかも、私が丁度その傍に居たので、耻しそくに笑つて馳けだして行つた。全く一人の疲れたもの、疲れたらしいものもなかつた。

行き着いた目的地は、いはゞ山のはざまと言つた處で、今上つて来た道を隔て、一方はなだらかな草地、一方は射的場として用ゐられるといふ小さな小屋のある平坦地である。私達は、その平坦地の方へ上つて立つて見ると、前面の草地が右左上と、美しい新芽の生え茂る小松原

で囲まれて、心持ちよい斜面を展開し、そここゝに山躑躅が美しい花を飾つて居る。幼児達は思ひ々に其の斜面へ散つた。一人位腰を下ろして憩ふものがあるかと思ふと、そんな困憊なのは一人もない。早速銘々の活潑な自由行動に移つて、草をとるもの、花を集めるもの、小松原の中へと突進してゆくもの、笑ひ興じて馳け廻るもの、それが一幅の畫圖をなしてわれわれの眼に映じて来る、私は始めて斯ういふ光景を見た。しかし、私は之れ迄幾度となく數知れず此の光景を夢みた。時には夢の中で夢とあきらめながら夢みた。今はそれが實現せられて居るのである。私はどの位の間恍惚として居たであらう、森の奥のどこかで鶯の啼いて居るのに氣がついたのも、右手を見れば神戸港の海の青く光つて見えるのに氣がついたのも、實に暫くの時経た後のことであつた。

神戸幼稚園の園外保育は、私の所謂常時的恒常的の最も度数の多いものであつて、園を二つに分けて年長の方と幼年の方と場所の遠近はあるけれども、兎に角隔日毎には武徳殿裏の廣場とか諏訪山公園とか、或は此の口一里山とか、草柔かに風快い處へ出る。そして、其の目的

としては消極的目的殊に健康の増進を主として居るが、積極的目的として活きた自然物に接觸せしむるといふことにも大いなる注意を拂つて居る。其の場所々々の植物の名稱等に就て保姆諸君が豫め専門家に就て正しい知識を貯へて置いて、幼児等の問ひに答へ、又自然に對する興味喚起に意を用ゐて居るのである。

神戸幼稚園の此の園外保育實施は、恐らく他に多く類のない程熱心な恒常的のものである。但し前にも述べた通りそれは幼稚園存在の位置が大に關係を有すること、東京の眞中、大阪の眞中で、此の通りのことが容易に出来ることではない。少くも電車使用といふ甚しい大難事を伴ふことであるし、從て時間の關係にも多くの不都合がある。私の同行參觀した日には、辨當を其の山でたべて一としきり遊んで、寫眞などを幾度も撮つて、ゆつくりして歸つて二時迄に充分の餘裕があつた。こんな都合のよい處は滅多にあるまい。併し、それにしても、毎日實行といふ覺悟は容易のことではない。望月さんの言によると、此の試みは三年前の聯合保育會で、講演の中で一寸言つた私の勧めに發するものだといふことであつたが、若し果してそうだとすれば、私の希望が茲まで大々的に存分に實行せられたことを、うれしく思はず居られな

い。實際をいへば私は是れ迄のことは考へて居なかつたのである。たゞ漠然と、子どものために日光と空氣と自由な遊び場と、而して活きた自然物とを熱望して居たに過ぎない。それが斯く迄充分に且つ組織的に行はれたのは、全く神戸幼稚園の熱心な努力の結果である。

私は此の通りのことを、どこの幼稚園にも望み得べきものだとは思つて居ない。又、此の通りに行はなければならないといふことも少しもない。元來が廣義の意味をもつ園外保育は、どんな方法で行はれてもよい筈のものである。度數は多い方がよいに違ひないけれども、無理をしてまですることは却つてよくあるまい。場所の理想的といふことも同じである。いゝ方がいゝとはいへ、無理なことは企てられない。たゞ園外保育の効果を多少でも認めたと上は、之れを實行することに就て考究すべきである。そして出來得る範圍で、すべての時と、すべての場所とを、幼兒の幸福と利益とに利用すべきである。持つて來ることの出來ない幸福は、出掛けで居つて取るべきである。

砂場の屋根

幼稚園に砂場の必要なることは言ふまでもない。従つてどこの幼稚園でも大抵砂場のない處はない。しかし、時によると其の砂場が、土まぢりのコチ／＼になつて居たり、砂漠の様に乾き過ぎて居たり、殆ど砂場の骸骨とでもいふ様なものがある。それ程でなくとも、折角の設備が余り充分利用せられて居ない所が少くない。

砂場も極く理想的に造るには一通りの研究を要するものである。先づ三尺位は堀り下げて、底とへ底には植木鉢のように水ぬきをつける必要がある。四方の内壁とをセメントかコンクリートで、しつかり固めなければいけない。そうしないと、土が自然に混じて來て、純粹の砂遊びが出來ない。次には椽が是非必要である。之れが無いと矢張り外の土が混じて來る。砂も砂場へ入れる前に充分洗淨して、日光消毒をして、きれいな純粹の砂にしてからでなくてはならぬ。そうしないと、濕氣があり泥質があつて不潔になり易いと共に、悪い微菌などがあつて、時によると破傷風などを生ずることがある。少なくとも年に二度位、暑中休暇とか春休暇とか

には、此の砂洗ひもしなければいけない。

處で斯ういふ具合にして、學理的に理想的な砂場が出来た處で、是非共必要な附屬設備がある。それは他でもない屋根である。砂場のよく使用せられないのは種々の原因もあり得るが、屋根の設備のないといふことも其の一つである。先づ雨の時、折角立派に盛つてある砂を雨ざらしにするといふは亂暴な話である。そんなことをしておく爲に、砂場は雨後數日間使へないといふ様のことになる。甚しいのは砂場變じて大海となつて居るのさへある。雨水が乾いた後は泥のかたまりになる。先づ當分は砂場用ふべからずといふことになる。

雨の反対は日照りであるが、屋根なし砂場は炎天には使へない。帽子を被つた處で、大事な後頂部へは日光が照りつける。そんな處で可愛い幼児を遊ばせて置けるものではない。日に焼けて色が黒くなるなどは却つて結構だが、日射病でも起したら大變である。それに、そんな心配は假りにないとしても、余り砂が乾き過ぎては弄ぶに都合がよろしくない。お團子にもトネルにもならないのみならず、風が吹いて来て目などへ砂が入り易い。斯ういふ譯で折角の砂場が雨に使へず、日照りに使へず、殊に此の頃の暑中には全然使へないといふことになる。

つては、一年三百六十五日、砂場遊びの機會は餘り多くないものになつて仕舞ふ。そこで砂場をほんとうに利用しようとするならば、是非とも屋根がなくてはならないことになる。

砂場の屋根に二種類ある。一種は固着的なものである。ブリュッセルの某公園にある砂場などは立派な屋根の下に砂場が出来て居る。しかし余が茲にお勧めしたいのは、寧ろ、容易く取りはづしの出来る屋根である。

極く簡單になら、峠の茶屋の葦簾張り式でもよい。もう少し念入りならば、中國邊の町通りで、夏になると屋根から屋根へ帆布綿の様なものを張る、例の日よけ式でもよい。要するに紐をひつばつて、その緩急で自由に開閉の出来るようにして、雨の日は勿論密閉して砂のぬれるのを防ぐ。天氣の日は開いて、砂に適當の乾燥と日光消毒を與へる。しかも子供が遊んで居て、日射が強過ぎるといふ様の折には日のさす方向を見て適當に閉さす。

或る人は砂場なんか、そんな費用をかけてといふ人があるかも知れない。そういふ人は御相談にならない。苟も砂場の効用をよく知り其の利用を充分にしようと思はるる方は、是非此の夏から工夫して見て下さい。砂場の位置の關係にもよるが、大した費用のかゝる譯でもな

50
大阪の江戸堀幼稚園で近く砂場の上に新設せられた布張屋根は、私の勧めを容れて作られたのであつたが中々立派に丈夫に出来て居る。同園の膳さんのお話によると、此の布屋根を設けてから、雨の日も自由に砂遊びが出来て都合がいゝ、といふことである。そのほか屋根の効用はいろいろの方面から充分認められ實證せられて居る。

恩物に就て

世の中に分り難い言葉も少くないが、恩物といふ言葉位分り難いのは多くない。幼稚園の経験のあるものは別として、その他の人に恩物などと言つても何のことか通用するものではない。名は實をあらはすなど、古めかしく講釋を初める譯ではないが、物の名は成るべく分りいゝ方がよろしい。勿論何事にもそれ〴〵の道の用語術語があつて、深い意義は誰れにでも直ぐ分るといふ譯にはゆかない。しかし一寸聞いても大體大凡の見當位はつくのが普通である。恩物に至つては見當もつき難い。「はゝあ、殿様から御拜領にでもなりましたもので御座りまするか」位の處が落ちである。斯ういふ六かしい言葉は出来ることなら使はない方がよいと思ふ。

幼稚園教育の歴史を辿つて、フレイベル先生の教育説を攻究するといふ場合には、それは言ふまでもなく原語通り *Gabe* (恩物) を *Gabe* として研究しなければならない。又フレイベル先生の深い思想の籠つて居る此の言葉に對して、適當なる敬意を拂ふことを忘れてはならな

い。しかし、それは昔のものを昔のものとして貴重する研究上のことである。毎日の保育が始終古典によらなければならぬといふことはない。

彼の所謂恩物なるものは、要するに幼児用の玩具である。色のついた毛糸の毬にしても、積木にしても、色板にしても、金輪にしても、箸にしても、いづれか持ちて遊ぶに面白き玩具ならざるである、しかのみならず、之れ等のものは決して必ずしもフレイベル先生によつて、發明せられたものではない。其の以前から何處にでもあつたものである。別に何の本に書いてあるとか、何處の古丘から發掘せられたなど、六かしい論は持ち出さずとも、毬や板や棒切れが子供の玩具に用ゐられたことは、希臘の昔にも埃及の昔にもあつたことに相違ない。文明人ばかりではない。野蠻人の子供でも此の位ゐる玩具は知つて居るだらうと思ふ。それが「フレイベル氏恩物」といふ名稱の下に、如何にも特殊なるものとして取扱はれて居るのは、何故なのであらうか、いふ迄もなく、フレイベル先生が之等の珍らしくもない玩具の中に、見出し而して組織した教育上の理論によるのである。即ち其の理論に對して特殊なる取扱をするのである。是に於て、所謂恩物の恩物たる處は、理論にあつて、物にあるのではないといふことは、

少しく事を分解して考へ得る人には直ぐ分ることである。更に言葉をかへて言へば、恩物とは彼の品々が幼児の玩具として多くの有効なる點を持つといふフレイベル先生の考へから、賞讃的に附けられ得る名稱である。

フレイベル先生の時代には、玩具の教育的價値に就ては、寓意か考案のあるものでなければ、教育的でないものゝ様に思はれて居た。そして、特別に貴い意味でもあるかの様に取扱つたのである。しかも、フレイベル教育説を研究した人の知つて居らるゝ通り、先生には物を六かしく考へ過ぎる論理癖があつた。總てのものに奥の意味を附けようとする象徴癖があつた。之れは先生の偉大なる一面をなしたものであつたが、又確に一つの缺點でもあつた。殊に幼児にとつては、理の勝ち過ぐるといふ極く不似合のものであつた。而して恩物といふ意味深長な（命名者にとつて）名稱も、此の象徴癖から出來たものなのである。

玩具は玩具でよろしいではないか。近世の兒童研究は子供の遊戯の眞意義を闡明して、遊戯といふ言葉の品位を高いものにしたと共に、玩具といふ言葉をも、昔の所謂「もてあそび」とは趣の異つたものたらしめた。推しつめた理屈からいへば、世間でいふ教育的玩具なる言葉が

餘計な語であると言つてよい位の、玩具そのものゝ本來性が教育的なものに理解せられて來たのである。斯くの如く玩具なる語の尊嚴が認められて居る世に、幼稚園で用ゆるからとて、わざわざ別の名をつける必要は少しもない。モンテツツリー女史考案の保育玩具は伊太利の原語では何と呼ぶるか知らないが、英語では Didactic material 即ち「教育用具」と譯されて居る。處が可笑しいことに、「モンテツツリーの恩物」といふ言葉が時々使はれて居る。幼稚園では何もそんなに恩物といふ言葉を用ゐなければならぬものであらうか。今年の三市聯合保育會の研究議題の中に、「二十恩物以外保育材料として現今使用せらるる恩物あらば其の種類並に使用方法を承りたし」といふのがある。此の提出者の意味は充分よく分つても居り、又至極有益な研究題であると思ふが、こゝにも恩物といふ言葉に執着し過ぎて居られる觀がある。

恩物の原語 *Gift* には恵まれたる物、即ち天恵といふころがあるが、若し、そうふ心からいふならば、木の葉、石ころ、すべての自然物程、眞に天恵物であるものはない。そういふ意味で此の言葉を用ふるのならば、極く廣い範圍にあらゆるものが恩物と言はれるであらう。斯ういふと如何にも、言葉の上の揚げ足取りの様であるが、餘り恩物々々といふ言葉を口癖のよ

うに使はるゝのを聞くと、斯ういふ理屈も言つて見度くなる譯である。

余は嘗てフレイベル先生の恩物論を、餘りに抽象的に、又象徴的であるといふ點から、甚だしく批難したことがある。之れ何も余の獨創でもなんでもなく、發生的に幼児教育を行はんとする人の皆一致する論でなければならぬ。余は今日に於ても勿論此の批難を固持して居るものである。併し、余の批難したのは恩物論であつて、木片、棒片、そのものではない。あれは立派な玩具である。殊に單純で、しかも用法の範圍の廣い面白い玩具である。其の教育的（心理的意味に於て）効果も決して尠くないものである。あれを玩具として幼児に自由に持ち遊ばしむることに於て、決して彼之れといふものではない。少くもそれに事々しい長論議をするものではない。たゞどこ迄も玩具である。それへ特別に大人の理屈を付けて、その理屈を以て幼児に強ひんとするのが、實に誤謬だといふのである。積木遊び、板ならべ遊び、紐遊び、其の他何あそび、何あそび、皆幼児に面白い、いゝ遊びである。併し、恩物として取扱はなければ教育的でないといふならば、それは古い誤謬から今も尙脱し得ない間違である。恩物としてならば批難する。玩具としては賛成する。之れが明白なる余の論なのである。

いつそ間違ひの起らないように「恩物」といふ言葉を平常は使はない様にした方がよいかも
知れない。それで、フレイベル先生の偉大さが少しでも傷く譯ではなく、また尊敬すべきフ
レイベル先生も、却つて地下にそれを喜ばるゝことゝ信ずるのである。

幼児の舞踊について

——近來の傾向を痛心す——

近來は、幼稚園で舞踊全盛の觀がある。それについて、いろ／＼の方から屢々質問を受ける
ので、私の考を卒直に述べて見る。

先づ、大體論として、幼児の舞踊そのものについて、私は反對するものではない。幼児に適
するものは何でも幼稚園にとり入れていゝと思ふ見地からして、舞踊も亦これを否定するもの
ではない。殊に或る人達のやうに毛ざらひをしたりするものではない。踊りといへば事々しく
聞えるが、おどりの度いは幼児の本性である。弾力に富んだ運動性の生活、それが幼児生活の大
きい特質であつて、ある意味に於ては、幼児はたえず心と體とを踊らして居るといつていゝ。そ
の潑刺たる幼児達に對して存分におどらせてやり度いとこそ思へ、それを抑えてならないのは
勿論である。自分が幼児といつしよに、幼児達のやうにおどれないことをこそ悲むことはあつ
ても、幼児達のおどる手とおどる足を、しかつめらしく止めやうなどゝ思ふのではない。

しかし、その私として、近來の幼稚園の舞踊全盛の實際に對しては、頗る不安な感を禁じ得ないことがあるのである。

〔一〕、何ごとに限らず、幼稚園が一つのことに偏し過ぎることは、深く警戒しなければならぬことである。幼児の生活は極めて廣範な範圍をもつ。變化と多様とは、幼稚園生活指導の格言でなくてはならない。若し何かの一方に偏り過ぎるならば、そのことがそれ自身として、いくらいふことであつても、幼児生活としては正當を逸するのである。それも、幼児自らが、何かの自分達の理由によつて、或る期間一つのことに凝り偏るといふやうなことならば、強ひて咎むべきではないが、そういふ場合としても適當な多様性を與へてゆくことが、幼児教育者の一つの任務でなくてはならない。況んや、與へる方で一方に偏すことがあつたりしては、其の害甚だ尠からずといふべきである。ところがどうも幼稚園にそういふ傾向があつて困るのである。昔からフレーベル正統派と自稱する幼稚園で、フレーベル恩物の一點張りの教育をしようとしたのもそれである。フレーベル恩物そのものゝ是非は暫く別としても、それに偏して、他の無限に廣い幼児教育手段を忘れたのは、非常な誤りであつたのである。モンテツソリ

一が流行すると、その教具を採用した限り、またもや、それ一點張りになつたりした。これも偏することの弊害をなしたものである。その他何、何と、劇場の藝題でも取りかへられるやうに、幼稚園の中心要項が遷移してゆくのは、またしても行はれた誤りであつた。しかも、それが、その幼稚園の何か特有の主義主張——理論を基礎とした——によるものならば、他人の眞似を許さないことともいへるが、世の流行につれられて移つてゆくのでは、見識のないも甚しいといはなければならぬ。馬鹿の一つ覚えといふ俗諺がある。少々失禮ないひ方であるが、そんな感じをさせられることも無いではない。靜かに考へて見ても、そうした偏した方法で、幼児の全生活の開發が指導出来るものではないのである。

近來の幼稚園の舞踊全盛にも聊か此の趣きがないではあるまいか。甚しいのになると、幼稚園教育即舞踊とでも思つてゐられるのかと見える程、舞踊專一で、その爲に、從來からのいゝ教育法も忘れられ、ましてや、新らしく多種多様のいゝ教育法を發見してゆくことが、全然無くなつて仕舞つたりしてゐる。これでは、舞踊そのものに如何に貴い効果があるにしても、われ等の幼稚園としては許されない偏りである。

殊に、一般の事實として、その流行の要項が、理論的のものである場合よりも、興味的のものである場合に、斯うした傾向が一層容易く、且極端に行はれるやうである。児童劇の流行が近頃のその著しい一つであつた。児童劇が盛に幼稚園で行はれた時、勿論、理論的に之れを採用した人も多くあらうがその興味性が興つて大に力あるは少くも否定出来ない。子ども、面白がり、親達も面白がり、先生にも面白いとあつては、——そして、どこかに理論的背景があり得るとしては——大河を決する様な勢で熱中せられるのも無理はない。無理はないがそれは困るのである。その児童劇は一寸下火になつたようだ——なつて貰はなくは大に困る——が、それに代つて盛になつたのが——少くも社會事實としては——即ち舞踊なのではあるまいか。實際、舞踊は、お話よりも、製作よりも、誰れにでも面白い。少くも派手で楽しい。そこで、その興味が持ち込まれた以上、或る處まで酔ふ様に、それ一方になるのは熱の然らしめる處だらう。しかし、そう偏しては困るのである。舞踊ばかりで幼稚園が濟むものとは、舞踊そのものでも思つては居まい。誤りは人にあるのである。見識なく、靜かな考なく、幼児生活全體の見渡しなく、おどれ／＼で踊りづめる浮いた人の誤りにあるのである。斯うまでされては

舞踊の方でも面くらうかも知れない。況んや、幼児に於ておやである。

〔二〕、分量的に適當な採用をしたとして、次に近來の問題になるのは、舞踊の流派——といつて置く——の餘りにまち／＼なことである。勿論、多くの研究者、否創始者によつて、いろいろ質の違つた舞踊の出来ることは、舞踊そのもの、發達のためにはいゝことである。私のこゝにいふのは、それが幼稚園での行はれ方についてである。

今日、幼児の舞踊について、我國に幾派の別があるかを私は詳しくは知らない。しかし、實際色々の幼稚園で見るところによると、何先生々々の振付けといつて、随分本質の違つた舞踊が、まち／＼といふよりも、ごた／＼に行はれて居る様に思はれる。その一つ／＼の是非は別として、斯うませこせに與へられては、幼児は甚だ迷惑なことであると思ふ。折角一派の主義で慣れたものが、忽ちにして全然違つた主義の振りを與へられる。また直ぐに、他の式のものも與へられる。之れでは、それ／＼の式が、其の式で徹底しようといふ効果が互に消されあつて仕舞ふに相違ない。消されあふだけなら罪はないとして、それ以上妙なことにならぬと
も限らない。

それ／＼の式について、私は批評しようとはしない。たゞ、すべての式を、それ／＼の特質に於て尊敬するとして、それだから、斯うしたごちや／＼の採用のされ方が出来ない筈だと思ふのである。勿論各自の流派に立つ創始者は、それを獨自のものとして主張し、幼稚園にもすゝめられるに相違ない。幼稚園の先生は、その説をよく伺ひ、よく研究して、どれか一つを——少くも或る期間は——続けなければならぬ。他所で用ゐられて居るからとて、一寸真似て見るといふ風のしかたは禁物である。但し、一度始めた式は、やめてはならぬといふのではない。別の式の方に賛成する處が多いならば、それを採り入れるべきは言ふまでもない。たゞ其の時は、その新らしい方一式にすることである。兎に角、舞踊は其の創始者に於て、一定の藝術的根據をもつものである以上、みだりに八宗兼學を幼兒にさせることは甚だよろしくない。

この點が近來随分無茶苦茶の様である。中には、手を動かし足を動かしさへしてゐれば、皆一つのものだと考へて、頭から各流の差別をしてゐない人もあるらしい。幼稚園の先生自身がそんなでためでは、始めからお話にならない譯であるが、兎に角困つたことである。苟も、何先生の式を學び、それを我が幼稚園に採り入れる以上、充分その先生の主張を理論

的根據に於て究めてからでなくてはいけない。大切な我が園の幼兒に與へるものではないか。自分で譯の分らない踊り方などを、たゞ型で覺えて採り入れたりしてならうか。子どもに見せる繪本一冊、あなた方は周到に、神經質に研究し撰擇なさるではないか。幼兒をして踊らせるものを、人の噂や流行の評判位で手あたり次第に採り入れて來ていゝものであらうか。それも先生方が習つて見られるは勿論いゝ。いくらでも習つて見て研究——覺えるのでなく、先づ其の價値を考究するのである——されるがいゝ。しかし、自分が習つて見ることに、幼兒に與へることゝは違ふ、うつかりしたものを與へてはならない。

私は此點を考へる時、なんとなく、ぞつとする様の氣がする。近來の傾向が、幼兒の舞踊に對してたゞ之を用ゐるだけで無考究、無批判でやつてゐる先生方があるはしないかと思ふからである。若い方に殊にそれが多いのは已むを得ないとして、ほかのことでは、よく幼兒教育の本道の分つてゐる経験家で、舞踊だけには、まるで無見識な採用のしかたをしてゐる人があつたりするらしい。舞踊全盛の勢とはいへ痛心にたえぬことである。

兎に角、舞踊については一園一式、一流一園といふことにし度い。ごもくめしダンスは幼

兒の腹をこわすものである。

〔三〕、以上、近來の傾向に對し最も深く感ずる心配の點を遠慮なく言つて見たのである。この二點をよく注意して頂けば、まづ大過なきを得やうと思ふ。しかしまだ、もう少し内容に入りて質問を受けることがあるので、それを簡単に答へて置かう。つまり、幼兒には、どういふ舞踊がいかといふ間に對して、極く大ざつばな標準を立て、見るに過ぎないが。

(イ)、幼兒の舞踊は、藝術には相違ないが、すべての他の幼兒の藝術と同じく、所謂原始藝術に屬するものである。原始藝術は純生命の藝術であり、文化藝術のやうに、美として分化した藝術でもなく、型として洗練された藝術でもない。そこで美ではあるが、美そのものが浮き出てゐるものでもなく、形はあるが型としての嚴しいいきま、りが既成せられてゐるものでもない。殊に舞踊に於て一層それが著しい。心のリズムに踊りはするが、美のために踊つてはゐない。表出の形は持つてゐるが、型の味にまで築かれてはゐない。従つて、幼兒の舞踊は全生活的で自然で、自由なものでなければならぬ。丁度、野蠻人といはれる民族の中にある舞踊に類するものなのであつて、文化の發達した、藝術的に洗練せられた舞踊とは違ふのである。

(ロ)、野の舞踊は運動としては、筋肉の遠心的運動を主とするもので、文化的舞踊のやうに、筋肉の求心的曲折を主とするものではない。手の舞ふ儘、足の躍るまゝ、伸びて／＼伸びてゆく處に、生地^ノ生命の溢れ其のものゝ味が味はれるのである。踊るものにも、看るものにも、そうなのである。といつて亂舞といふ譯ではない。平均と均齊は生命が自然に有して居る法則である。その生命の自然の法則だけを法則とせる舞踊なのである。

殊に此の點に就て一考して置く必要があるのは、我國に於ける古來の舞踊は非常に舞踊藝術として發達してゐるものであつて、藤間にしても花柳にしても、山村にしても其の他にしても、關東と關西と多少の違ひはあるにしても、舞臺のおどりとして、座敷の舞ひとして、洗練の極緻に入つてゐるものである。従つて、我國で昔からいふ舞踊といふ名には、之等の至妙緻細な藝術としての舞踊の意味が附き易い。之れは幼稚園で用ふる幼兒の舞踊の發達のために、却つて差支へたりすることである。同じく踊るのでも、幼兒の踊り度い踊りは、そうした純藝術の味に凝つた踊りではない。技巧の極緻で筋肉運動に味を出す、江戸風の優美な舞踊ではない。勿論、昔でも今日でもあるやうに、子どもの時から踊りを仕込んで置くといふ意味の場合

は、全く別の見地に立つことで茲には其の問題を離れて、今日吾々が幼稚園教育の手段として採り用ふる舞踊は、それとは全く別個の見地に出た、別箇の世界のものなのである。

(ハ)、もう一つ、野の舞踊は、生命の撲素な運動として、ハーモニーよりもリズムを主にする。藝術としては言ふまでもなくハーモニーの方が高級である。しかも、幼児としては音楽に於てそうである如く運動に於てもハーモニーよりもリズムを求め、また、そこに満足してゐる。

進み過ぎたハーモニーは却つて幼児には無理なことになるのである。勿論ハーモニーが少しでも入つてはならぬといふ譯ではない。簡単なハーモニーは、幼児も喜ぶものであるが、ハーモニーを主として發達した舞踊が、幼児にも適するものと見たら、幼児として買ひ被られて迷惑するのである。こゝで、舞踊に於て、幼児のものが、成人や少女のものと大に差別せられる。況んや藝術家の舞踊とは全く別のものである。

英國や米國の幼兒の舞踊は、インヂヤン・ダンスなどを基準とするものが多い。之れ皆リズムの舞踊である。また同時に、野の舞踊である。我國の近來の或る傾向は、之れと全く違つた

方向に向つてはゐまいか。過ぎたるは及ばざる如しとは、こゝに最よく當てはまつた教訓である。

(ニ)、だから、幼兒の舞踊は、要するに撲素、簡單、形は自由、味は野趣、優美よりも潑刺、技巧よりも自然、であり度いのである。そういうものであつていゝといふのでなくして、そういうものでなければならぬといふのである。

〔四〕、尙ほ餘計のことを一言する。幼兒の舞踊は全然、幼兒自身のためである。見物人のための藝ではない。故に、若し、眞に幼兒に舞踊を興へる意味を解するものならば、つとめて、見物人を避けてやらなければならない。

假に、見物人があつても、それは、いつしに踊る見物人でなければならない。入りかはり立かはり、舞ひあひ踊りあふお互同志でなければならない。見てゐる間も、手びようし、足びようし、聲を合せて歌ふ連中でなければならない。見物人としての見物人などは、幼兒の生命の舞踊の神聖に對して、寧ろ怪しからぬ無禮ものである。幼兒のために其の神聖を保護する人々は、そふいう見物人を追つばらつてやらなければならない。曰く、幼兒演藝會、咄々、なんの

ことだと腹立たしくなる。幼稚園の遊戯室に観覧のさじきを造つてゐる處があるとかいふことを耳にしたことがあるが、願はくば、われ等の幼稚園教育界のために、私の耳の聞き誤りであつてもらさ度う。

本 眞 剣

一
我等が子供に向つて希望することの中、何よりも一番大切として居る事は、物事本眞剣な子供、本眞剣になれる子供になつて貰ひ度いといふことである。賢い子にもなつて貰ひ度い。敏捷な子にもなつて貰ひ度い。器用な子にもなつて貰ひ度い。しかしそれらよりもずつと根本的なことで、比較にもならない程大切なことは本眞剣といふことである。

二

本眞剣といふことは、之をむづかしく解釋すれば、いろ／＼の意味が含まれる。しかし、簡単に其の要を捉へて見れば、全心全力を擧げて一定時内唯一つのことに集注して居るといふことになる。之を裏から言へば、浮心でないことである。二た心でないことである。而して、集注するといふからには、其の深さと長さとが考へられる。一方は本眞剣の程度であつて、一方は本眞剣の繼續である。ところで、程度のない繼續もなく、繼續のない程度もない譯であるから、

此の二つの問題を分けて獨立に考へることは出来ない。しかし、茲で我等の主にて考へて居ることとは繼續よりも、先づ程度の方である。本眞劍の長く續いて呉れることは、我等の最も希望するところである。しかも、假りに長さは短くとも、兎に角現在自分のしてゐることに專念没頭して貰ひ度いのである。即ち我等の問題は先づ集注の深さの方を多く意とする。

物事を淺く上滑りしか出来ない子供を、我等は最も憂ひ悲しむのである。

三

集注といふことは、同時に幾つものことに心を割かぬといふことである。あれもこれもと、同時に幾つものことに氣を奪はれぬことである。但し同時に幾つものことを思ふその事が悪いのではない。そうすると自ら一事に淺くならざるを得ぬ處が悪いのである。廣くて深いこともあり得る。それならば差支へない理である。しかし、廣くなれば淺くなり、深くするには狭くするといふが普通であるとして見れば、一時一事を本眞劍の普通の場合と見られる。

ところで一時一事といふのは、一時に甲を思ひ乙を思はぬといふことである。ところが思つて居る事柄は、甲だけであつても、眞の集注、眞の本眞劍と云へないことがある。それは他で

もない。甲を思つて居る我を更に他の我が思つてゐる時である。此の場合、我れは二つに分れる。假令へば花を見る我れと、更にその風流な我を見てゐる我れとなつて居る。前に、同時に甲と乙を思ふ事が、一時一事でないとするならば同時に甲と、甲を見て居る我れとを見るのも、一時一事ではない。寧ろ一層甚しい不集注であり、又不本眞劍である。即ち我等の本眞劍は同時に二つの事を思つたり、又假令一つのことでも、それを見て居る我れを、更に我れが見るといふ様な、そんな餘裕のないことである。全我を擧げて、一事に傾倒し盡すことである。

四

本眞劍は我等が子供に向つて望むところであると共に、子供が自然に具へて居る特性の一つである。子供の心は一時一事、一時一我がその特性である。一寸でも面白いことがあれば、直ぐ他事一切を忘れる。興味の向ふ處直に全我を其の中に没入して躊躇し遲疑する處がない。之れが子供の本性である。

のみならず、成人に難くして子供に容易なる本眞劍の一つは、總ての事に、其の當然の結果の如何さへ忘れ去つて、事その事に没入する大膽さである。之れは時に、或は屢々、子供の愚

さとして見なされる。しかしながら、一時一事、一時一我の本真剣は茲に至つてその極致に達せるものと云はなければならないのである。蓋し我等成人に於て、一時一我の没頭の本真剣を難からしむるもの、之を要するに結果の顧慮に他ならない。即ち、結果に就て多く顧慮するものは、現在目前の事と、而して其の結果と、常に一時一事のならざるを得ないのである。且又結果の顧慮は、つまり或る意味の打算であるから、事そのことに當る我と、結果を打算する我れと二つに分れて、後の我が前の我を監視することになるのである。一時一我の没頭が六かしくなる譯である。

五

扱て、此の子供本来の特性であるべき筈の本真剣が、時に或る子供に於て缺けて居るのは何故に基くものであらう。しかも、それが事實上、可なり多くの子供に於てそうであるのは何故であらう、我等は此の悲しむべき事實に就て先づ考へなければならぬ。

其の原因の一つは遺傳なり、後天の原因なりによる神経の障害から来る性格の薄弱である。つまり性格の生理的基礎に於て、本真剣に成れない者である。蓋し本真剣とは、最も積極的な

精神生活である。その積極力のない程精神の弱い子供は、實に此の上もない氣の毒なことである。若し斯ういふ子供があつたならば營養や、睡眠や、運動や、生理的健康の方から根本的に注意して行かなければならない。けれども之は先づ特別の場合として置いてよからう。

最も普通の原因であつて、而して、それが最も普通であることが遺憾なることは、廣い意味での教育的過失である。

(子供の本性たる本真剣を害ひ失はせる様なことを我等はしては居まいか。)

(子供の本真剣を養ひ育てる爲に我等は如何なる工夫努力をして居るか。)

(幼稚園といふものゝ其の今日の方法及び此の問題との關係は果して如何なるものであらうか。)

(我等自身の本真剣はどうであらう。)

六

教育の最普通なる誤謬は、教育の目的が直に兒童の所意と一致すると考へられることである。しかも教育の目的と兒童の所意とは一般に一致して居るものではない。教育は兒童を賢くしようとする。兒童は決して賢くならうなどゝは思つて居ない。教育は兒童を善人にしようとする。

る。兒童は決してそんな望みを持つて居ない。兒童は遊びの面白からんことを求める。お喋の面白からんことを求める。否、もつと嚴密には面白いと云ふことさへ求めて居ない。面白いと云ふのは結果である。兒童の没頭して居ることは遊びそのものである。傾聴して居るものはお喋そのものである。その他に何も求めても考へても居ない。

つまり、教育の目的は遠い——現在とは離れたことである。それに對して兒童の所意は現在にある。教育の目的は現在が持ち來すべき結果である。間接である。それに對して兒童の所意は現在のこと、それ自身である。直接である。

教育が自分の間接目的を兒童も直に理解する筈だと思ふのは大いなる誤解である。その上に此の間接目的の故を以て、屢々兒童の現在所意を無視するのは教育の甚しき亂暴である。しかも此誤解が常に當然として行はれ、此の亂暴がいつも平氣で行はれる。而して、教育と云ふ恐ろしい名のもとに兒童の現在所意を踏みぢつてしまふ。之れが教育が兒童の本眞剣を失はせる大きな危険の一つである。——

一時一事、一事一我の本眞剣は、たゞ自己の所意に於いてのみなし得る。頼まれて出来るも

のでもなければ、強ひられて出来るものでもない。本眞剣は事に忠なると共に、自己に忠なる事である。その自己の所意を踏みぢられて居る處で、いつ本眞剣を経験し得る機會があらう。

七

教育の間接目的が、尙ほ適切にいへば教育の目的の間接性が、奪ひ去るものは兒童の眞の生活のみではない。同時に教育者からも、其目的の直接性を奪ひ去ることが往々ある。これは教育の亂暴と云ふよりも寧ろ悲劇と云ふものである。

見るからに不熱心な、無生氣な教育者は云はすもがなだ。熱心に見られ、又自らも熱心と意識して居る教育者の中に、案外、眞の意味の本眞剣と云へない人が随分澤山ある。その人は、餘りに結果主義者であつて、現在の爲に現在を貴重することを知らない。又その人は、餘りに醒めたる義務の遂行者であつて、感興にさそはれてゆく眞純なる意氣を有しない。兒童に理解させる技倆は持つて居るが、自らは何等の感興を持ち得ないお話の話し手。兒童にうたはせる事ばかり考へて、自分では唱ふことの嘗てない唱歌の先生、これ等は皆此種類に屬する人々で

ある。否寧ろ大抵の教師と云ふ教師が、多少ともこの種の傾向を持ち易い。

扱此傾向は、教育者にとつて悲しい不幸であることはいふまでもない。しかも、其の不幸は斯かる教師に始終接觸し、教導せられて居る兒童に對し必ず悪い影響を與へずには居ない。すなはち、兒童はかういふ教育者から知識を教へられ、業を課せられると共に、恐ろしい不眞剣を見せつけられ、又傳染させられる。中に目ざとい兒童は教育者の此の不眞剣を見ぬいて、輕侮の感を懷く。またおとなしい兒童は、無意識の中に、自分を此不眞剣に順應させる。どちらにしても、いつの間にか不眞剣な兒童にさせられることは一つである。

八

兒童の現在所意を無視すると云ふ亂暴も、教師が教科に没頭的興味を有し得ないと云ふことも、兒童の年少なる爲に、教科のたわいなき爲に、幼兒教育に於て一層起り易いことである。由來、幼兒は間接的目的といふ様のことについては到底理解することが出来ない程に直接的興味の子である。しかもその精神の幼弱なために、容易に自分以外の勢力に抑へられ又引づられる。そこに幼兒の本眞剣を害ひ易い大きな危険があるのである。一層踏みにじり易きものに對

しては一層注意しなければならない。

九

ところで、幼稚園に於ける幼兒の周圍が多過ぎることがある。朝の鈴が鳴る。それを第一の驚きとして、次から次へと、不秩序な——教育者は勝手に秩序正しいと獨りぎめをして居るが、幼兒には何の秩序も感じられない——仕事、或は遊戯と名づけられる仕事と與へられる。まるで後から／＼追かけられて居る様である。その上に友だちからの氣まぐれな刺戟が、氣忙しい誘惑を與へて、心をあれから之へと、これからあれへと引ばつて行く。かういふ幼稚園に於て、一時一事の本眞剣に入ること殆んど六かしいこと、云はざるを得ない。

またその上に幼兒の監視が利き過ぎる。先生の目が、園長さんの目が、幼稚園と云ふ場所それ自身の大きな目が、幼兒にとつては始終自分を見て居る目である。自分を見て居る目には自分を見せたくなる。人に自分を見せる時には、先づ自分で自分を見る。時には自分を見る目に、自分を隠そうとすることもあるが、しかも、自分を人に隠して居る時には却つて自分で自分をよく見て居るのである。かういふ幼稚園では、一事一我の本眞剣が保存されることは誠に

難いといはなければならない。

しかも我等は、どうしても、何を置いても、幼児の本真剣を保護し、又發達させることに深く工夫しなければならない。

斯く育てたしと思ふこと

此處に掲げた「斯くの如く子供を育てたしと思ふ」といふ題は、私が自分で出して置いて申上るのも可笑しいわけですが、多分皆さんの興味をひく問題であると思ひます。今日は家庭の方々もお見えになつて居る様ですが、子供をお持ちの方々、又幼稚園教育者として「如何に子供を育てるべきか」といふ事は、極めて大切な又緊急な問題です。處が又考へて見ると、かゝる題ほど一場の演題として不適當なものではありません。即ち「子供をどう育てるか」といへば誰れでも立派な人間、完全な人間、圓滿な人間にしたい。要するに、彼方も此方も、一つの落度も偏よる處もない様に、完全無缺に育てたいと思ふ他はないので、其の中の特に一つ二つをぬいて「これこれだけ」といふ事は出来ません。例へば「からだを丈夫に」といふ。それでは心はどうでもよいかときけば勿論心も立派にといふ。伶俐にしたい。——それぢや伶俐だけでよいかといへば、いゝえそれだけでは困るといふ。人間は兎角慾張りなものです。其の中でも親とか教育者とか云ふ人々の持つ教育目的位、慾張るものはありません。斯ういふ

わけで、そのあれもこれもの中から「斯くの如く……」といふ一つを示して考へる事は面白い様で其の實六つかしい。殊に一方に偏するものになりやすい。假りに一つ二つを云つたとて「それだけでよいか」と云はれれば勿論そうでない。今日私が「かくありたい」と申上げるのも、それだけでよと思ふものではありません。それだけが教育の目的であると、誤解して頂かない様に願ひます。つまり今日のお話は、この頃私の特に心に浮べて考へて居ることを隨感的に申上げるので、幼兒教育の目的論を理論的に整理して申上げるではありません。之れは豫めお含み願つて置きます。

そこで、勿論此處で申上げますのは幼稚園期の子供——學齡期前——を主としてあります。従つて大體に於て智慧をつけるといふことよりも、訓育といふ方面になるのでありますが、此の時期の子供の訓育上最も願ひしいことは、是非心すべきことは、子供に道德の意識を持たせたくないと思ふことでもあります。之れは一寸妙なことを申す様ですが私は切實にさう思ひます。例へば子供が正直な事をするにしても「かくく」の事が正直である」と知つたり、或は

「自分が今、正直をして居る」と氣がつく事のない様にしたいものだと思ふのであります。つまり道德を出来るだけ意識的にさせない様にしたいのであります。

處が従來の所謂道德教育では、道德の意識といふことが主になり過ぎて居る様に思ふ。換言すれば、子供に餘り早くから道德の名稱を教へ過ぎると思はれるのです。これが正直これが勤勉などいふ風に、自分や他人の爲て居る事を道德的名稱に於いて意識させ過ぎるのです。しかも私の望む所はなるべくこの名をつける事を避けたいのです。假りに實際問題を捉へて申しますならば、此處に先生が「親切」についてお話をなさるのを聞いて居ると、斯ふいふ風に話される。——雪の日に坂を車をひいてのぼつて行く人がある。後から太郎さんが車を押して上げてゐる。太郎さんは何をして居るのでせう。——先生がかうお尋ねになると一人の子供が「それは太郎さんが車を押して上げて居るのです」と答へる。すると先生は「そうではない」とは申されませんが、何だか他足らぬ顔つきで「もつと何か外の事をしては居ませんか」と云はれる。すると組の中でも特に精巧な評判のある子供が「先生、それは親切をして居る所です」と答へる。是に至つて先生は出かしたりとばかり「そうです、そうです。これは親切とい

ふことをして居る所なのです。さあ皆様一所に云つて見ませう。親切！子供も一緒に口を揃へ「親切！」、そこで先生は得意顔で「そうです、わかりましたネ。親切といふことを忘れてはいけませんよ。皆も親切をしなければいけませんよ」と。それから二三日たつて、又先生が「先日は何のお話をしましたか」と聞く。大抵の子は忘れてしまつて居るが級の中でも記憶のよい子供が「先生、親切のお話」と答へる。先生は「そうです、よく覚えて居ました」とほめる。又、他の例をとれば、此處に一人の子供が何か過ちをしたとする。先生が咎めると其の子は無邪氣に有りのまゝを答へる。すると先生はその子を皆の前につれて行つて、太郎さんは實にえらいです。皆さん何處がえらいかわかつて居ますか、知つて居る人は手をお上げなさい。すると一兒が「太郎さんは正直です」先生はニコ／＼して「そうです、太郎さんは正直者です。皆も太郎さんの様に正直者にならなければなりません」といふ。これ等は、一例に過ぎませんが、皆さんは斯ういふ道德教育なるものを何とお考へになりますか。

我々の心の中にある事、身に體せる事を何とかして言葉でまとめてしまひたいのは人間の一つの欲望です。そしてこれとこれは親切であるとか、いやこれは勤勉の部に屬するとか云つて

居る。之れは知的生活としては、己むを得ぬことですが、併し、これが道德教育の上に於ては實に有害であると思ふのです。無駄な事ならまだしも我慢も出来ませんが有害であると私は思ふのであります。私は何人も人のして居るのを批難するわけではありませんが、近來いろ／＼の所で子供の徳性の研究を試みられるのに、いつも道德意識を調査する。其方法は大きな兒には何か書いたものにより、幼兒には話をして問答するので、例へば「一番よいと思ふ徳は何か」と問ひ、これに對する答を集めて、忠と答へたものが何人、親切と答へたものが何人、孝と答へたものが何人、思ふ事を爲しとげる事と答へたものが何人、など、統計をとるのであります。之を逆にして云へば「正直とは何ぞ」「親切とは何ぞ」「忠とは何ぞ」……など、道德の定義を答へさせて、其結果を調査し、何歳では如何なる道德意識があり、年齢と共に進歩の状態はどうであるかといふ類の事を見るのであります。この道德意識は單に心理的に兒童の觀念内容の調査といふことならばそれでよいでせうが、言葉をいくつ知つて居るといふことで、兒童の道德生活の實際を知らうとするのなら大間違ひです。山の名をいくつ知つて居るか、河の名をいくつ知つて居るかといふ事と同様に、道德の名をいくつ知つて居るかといふことを調べるのは

一種の觀念内容の調査としては面白い事でせうが、それと道德教育の効果といふ事とはどうしても混同することは出来ません。出来るだけ道德意識を興へないで子供を育て、彼等の世界から全く道德といふものをとり去る事は出来ないであらうか。もし之が出来たとすれば、かゝる間に育つた子供が成長してつくる社會——大人の世界——はどんなものであらうか。私は道德の言葉、その觀念、其意識のない處に、或る大きな生活がありはしまいかとも考へるのです。それ故に、殊に學齡前の子供には、出来るだけ其道德生活を意識の上へのぼせない様にしたいと思ふのです。これが私の一つの希望なのです。

道德上の言葉を教へるといふ事は單につまらない事であるといふ計りではありません。教へると反つて道德教育の害になるのです。皆さんも常に考へていらつしやる事でせうが、私共はよく頭で考へた道德ではいけない。體驗しなければならぬ」といふ警告を聞きます。然るにこの「體驗」する事が實に難しいので、道德上の言葉はいふ事も考へる事も出来、行ふ事も亦必ずしもそんなに難しくなければ共、體驗する、知らず／＼に其の氣持にはいつて居て思はず善いことをする程、自己が道德的になつて居るといふ事は誠に困難な事であります。之は何故で

せうか。この原因については私は私の幼年期を教育して呉れた人々に對して怨みがあると思ひます。我々は小さい時分から、よい事を云つたり行つたり考へたりする様のみ教へられました。私共が自分でも何とも意識せずウツカリして居る事を、オセツカイな教育者は「お前のしてゐる其の事それが正直といふことだ、徳といふことだ」などと教へてくれました。誠に自然にしておけばウツカリとよい事をして居るのに、それを一々意識にのぼる様に取扱つては、其の度に折角の自然の體驗を壊してしまつたのです。つまり道德を餘り意識にのぼせつけたことが害になつて今となつて體驗の困難を感じるのです。

二

そこでお話が少し飛びますが、次には道德の名稱にもよらず意識にものぼらせないでどういふ事を訓育の目的にするかといふことであります。今日のお話は寧ろ此點を主にしたいですが扱てこゝが困難の點であります。私自身もこれより先はまだ分らないことが多いのですが、長くいろ／＼迷つて居る中にも今日到達して居る一つの點を申し上げますならば、それは「人の好意を感じる性情」といふ處にありはせぬかと思ふのです。もつと適切に云へば人の好意を受く

るに敏感であるといふこと、この心持が道德生活の基本で幼児の訓育の目的標準もこゝにあると思ふのです。子供は何と云つても子供ですから、例へば清潔にせよと教へられ、其言葉もよく承知して居ながら實際弱き爲に出来ぬ事がある。又「人に對して親切なれ」と云つたとて何處迄彼等が之を守る事が出来るでありませうか。子供が眞に體驗し得る道德生活を要求することは中々困難な事であるが、しかし他人の好意を感受すといふことだけは、これは是非子供に持たせ得る、又持たせたいことと思ふのであります。

この私の云はんとする心持に極く適當した言葉が見當らないのですが、言葉はまづどうでもよいとして、實際上子供を教育するに他の道德に關する事は随分いたしますけれども、他人の好意を素直に受取つて之を感じさせるといふ事は、誠に簡単なことでありながら却つて出来て居りません。

我々大人の道德修養に於いても、例へば一ヶ月間の實際を取つて見れば、のつびきならぬ時には嘘もいふでせうし、つい不親切なこともするでせうが、大體を通じて我々はそんなに鬼の様に故意な悪者でもなく不正直者でもないと思ふ。しかも我々に最缺けて居るものは人の好意を

敏感に受入れるといふ事ではありますまいか。しかもこの根本的のものなしに道德を築き上げる事は全く無意味な事となりますまいか。正直のための正直、勤勉のための勤勉、親切のための親切、などよくいふけれども、理窟の上では兎も角くも、實際人間は純粹に道德のために道德を實行し得るものでせうか。それよりも、我々人間のなし得ること、又爲さねばならぬと教へられる事も、之をその源に溯れば、先づ他人の好意を受取り得るに始まるもので、これがなければ、何の徳も本當に身に體した力あるものとなる筈がないと思ひます。繰り返して申せば、今日我々自身の行爲を假りに表に作つてあらはして見ますならば、正直もして居ます。親切もして居ます。決して所謂不道德の事が多いとばかりはいへません。しかしその正直なり親切なりの行爲が、自分の何處から發して居るかと考へると其根底が頗る弱いと思ふ。我々は何故道德的行爲をするかと一歩溯つて考へ見ますと「道德だからする」「しなければならぬからする」といふ處に歸着しやすいことが——即ち道德なるが故にといふ出發點が——我々の行爲を眞の力のないものにしてゐる所以であると思ひます。だからもし人が捨鉢になれば、道德を羽織をぬぐ位に容易くぬぎ捨てることがある。世の中から退け者になつて悪人になつてもかまはない

といふ度胸さへあれば、さつさと道德を捨てる事もあるかも知れない。

斯うなると私は再び「我々の道德生活の根底は何處であるか」と尋ねたい。「良心の命令である」とかいろ／＼答も出ませうが、「道德が自己の本眞劍の生活の何處に位して居るか」とかう考へるならば、或る場合には羽織であるかも知れぬ、或る場合には帽子の様なものかも知れぬ。又帽子の先に一寸ついてゐる飾の様なものに過ぎぬものかも知れません。かうして見ると實に危い人だらけでせう。我々はよくお互に道德上の煩悶を語りあひます。殊に學問をした青年男女からよくかゝる話を聞くのですが、其の發表の仕方は何れにせよ、極く奥の一番の根本問題は「我々は何故道德を守らねばならぬか?」「何故道德が眞理であるか」といふことに落ちて来る。つまり根底にこの問題の解決に苦しんで居るので、色々の反對の思想が無遠慮に彼等青年を襲ふ。そこで例へば一人の人が何とか説明し解決を與へるとしても、其時は兎に角として、この青年が他日一層頭の進んだ先輩に出會へば又違つた「道德の解釋」をうける。かくして常にぐらつくのでありませう。一體道德はいくら説明がついても立派に解釋

しても、それは頭の仕事意識の上の事で、教へられた事と實際の自分との間に結びつきがなければ何の役にも立たない事です。

扱て是等の結論解決として私は又始の問題にかへりますが、他人の好意を感受するといふ事に於いても其好意の結果を感ずる事はまづ容易な事です。一飯を恵まれたとか或人から幸福を受けたとして、それを後々までも忘れないといふ事は誰でも出来ます。しかし好意其ものを本當に感ずる事こゝになると余程我々の心は鈍くなつて居ると思ふのです。そこで「人の好意を感ずる」といふ事を押しひろめて考へると、道德といふことは、今此の言葉を出して居るから、今此の行をしてゐるから、それだから道德であるといふのでなく、其の人の生活全體が道德になつて居るのでなければならぬ。云ひかへれば、人が何日の何時に私にかく／＼の事をしてくれたから私はあの人の好意を感ずるとか、誰れか私に好意をもつてくれるものはないか、どこかに私の爲にしてくれる人が居ないかと、探しまはるといふ様な性質のものではない。丁度春がくると何處の水でも暖かくなるのを感じ得る様なものです。特に意識して「春が來た何處の水はあたゝかくなつたであろうが、此處のは暖かくならぬに違ひない」など、えりさだめ

するものではありません。たゞ常住始終一種の好意に感ずる性能を持つて居るので、これを彼の物理學者が物質をわけて電氣の良導體不良導體の二つにして居るのに譬へれば、良導體の様なものだと云へませう。即ち金屬は電氣が来て之れに感じたその時だけが良導體で、電氣が来ない時はそうでないとは云はない。電氣が来て来なくても「金屬は電氣の良導體である」と物理學者はきめて居るので。之れと同じく人間も好意の良導體となれば、今好意をうけてゐるから居ないからと云つて其の性能のはるものでない。又其の金屬は電氣が通つて居ても通つて居なくとも何とも思つて居ないでせう。もし鐵に「もしく鐵さん今電氣が通つてゐますがどんなにお感じですか」と聞いたなら、或は「少し緊張した様です」とか「何だかくすぐつたい様です」とか答へるかも知れないが、まあ恐らく何とも意識して居ないでせう。

扱人間は、もし好意の不良導體から良導體に變つた時どうであらうか。必ずその内の生活に變化を來すと思ふ。良導體に變れば實に好意をいつも受けて居る様な感を持つようになる。特に何日の何時にこれ／＼の事をしてもらつたといふのでなくて、何となく嬉しい有りがたいといふ感じ、それがその人の基調になる。生活の基調になる。雪を見ても、水を見ても、たゞ何

となくうれしい。取りあへず好意をうけて居る様な氣分になる。それがその人の性格の基本となるでせう。私はこの事なしでは眞の道德生活といふものを考へられないのであります。道德は道德として平常は棚に上げておいて、扱今日は病人の處に見舞に行くのだが何を持つて行かうか、そうだ、親切がよからうと、其時に「親切」を棚から下ろして風呂敷につむ。今日は悪友の處に行くのであるから柔順ではいけない勇氣を持つて行かう。こんな風ではとても道德生活に落つく筈がありません。必要に応じて一々準備するのでなしに、全くから手でブラリと出て行つて、或所に行けば勇氣となり、或所に行けば親切となるといふ、其根本となるものがある筈と思ふ。この根本を私は「好意に感ずる性質」といふ事にあると申したいのです。たゞ何となく絶えず嬉しいといふ氣持をもつて居たいのです。私は先月來長く病床にありました時、其間に特に親鸞上人の事を考へて居ましたが、親鸞の宗教的根本信念も此處にあると思ひます。淨土に行けるといふ事は道德的行爲によるのだといふ聖道淨土の信仰に對して、信鸞のは全然信仰往生を唱へました。親鸞の先生の法然上人は道德に由つて救はれる事を非として念佛によつて救はれるといふ事をいひ出しましたのを、親鸞は更に信仰往生を唱へたのです。

私は常に親鸞が妻帯肉食した事を豪いと思つて居ります。今日の時代ならば何の不思議もありませんが、あの時代に、殊に法然の一番弟子の身で妻帯し、肉食し、子供もあり、家庭もち、毎日寺に通ふたといふ事は大變な事であつたに違ひない。實に親鸞はよく思ひ切つて生活の形によつて救はれることを非とし、信仰往生に進んだのであります。つまり道德から今一步進んで何處かに歸着點を見出したとした時に、親鸞は自力から純他力に移つたのであります。他力とは何であるか、即ち人間が道德を守るといふ誇り迄も捨てることで、全くの、他力によつて信仰往生に入るといふ事は實に他力の極といへませう。さてそれを主觀的に見れば、つまり嬉しい、有りがたいといふ一念に歸着するものではありませんまいか。

かゝることを考へながら病中私は親鸞の書物を枕元においてあれこれとよみあさりましたが、要するに今日の我々の上になる種々の問題は此處に根底を置くと思ひます。我々は果して嬉しいかの良導體であるか、人の好意に對する嬉しさと感謝性を持つて居るか、これを理論の上で押しつめて行けば、宇宙に對し自然に對し、神に對する感謝の心となりませうが、其處迄進まず、人間の問題はやはり人間の間だけで考へるとして、人間はやはり人間に生活するのですか

ら、たとひ如何に神のありがたさを感じても、人間の好意を受けられず感受出來ない人は、寂しい人、氣の毒な人であると云ひたい。兎に角く私は人間世界の好意を感じ得る人となりたい。又子供をそう育てたいと希ふのであります。

三

しからは實際上どうすれば子供をこの希望にかなふ様に育て得るか。こゝになると又餘程注意を要します。たゞ感傷的センチメンタルになつては困る。何でも感謝するのがよいと云つて之をまた意識の上へのぼらせてならぬ。感謝も意識してしまへば私が初めに他の道德意識について申しましたのと殆ど同じ結果となつてしまひます。「宅の子は此の頃になつてからお辭儀を五十度する様になつた」とか「此頃はいやに黄色い聲を出して日に何度か嬉しいといひます」とか又は「身振を盛にして有りがたがる」とかいふ様になつては、既に出發點に於いて誤つて居るのであります。實に一步をあやまれば、意識なしに持たせたいと思ふ此の感謝性も、嬉し喜さの性も、反つていやに感傷性なものになりますので、十分注意しなければなりません。どうか感謝をわざとらしくさせるのではなく、矢張り無意識の中に其本來の美しい性を持たせたい。「好意の感受

性」を意識させる位ならば寧ろ正直とか、親切とかいふ徳目を意識させた方が淡白で誤りが少ない。それ故子供に、この望むやうな性格を眞實に與へるにはどうすればよいかといふ事が六かしい問題になります。子供に向つてありがたがる、お稽古やお禮の練習や「感謝ごっこ」などをさせては、それこそ反つてしどい害を來しませう。

そこで先づ私の考へて居る處を申しますと、第一に子供が好意を表する時に――假令、それが如何に小さな事であるにせよ、又其結果は反つて此方には迷惑な事になるにせよ、――取敢へず敏感にこれを受取つてやりたいといふ事でありませう。よく「子供が質問する時には一々親切に答へてやらなければならぬ」と申しますが、それよりも尙必要なこととして子供の好意は一つ残らず受取つてやりたい。質問に一度答へなくても子供は又其智識を得る機會はありませう。しかし好意は一つ之を逃して受取らずに、突きはなせば、もうとりかへしがつかない。それだけ子供自身の感受性をそこなふものです。さりとて、其受けとり方をどうするかは問題で、「やあよく好意を表した、うれしい」などと涙をふるつても困る。形にあらはすといふ事は必要の事ではない。子供に對していつも好意をうけてやりたいといふ心さへあれば、其處に無言の

中に眼の光にも顔の色にも子供に満足をかへす事は出來ませう。殊に子供は好意をあらはす時に發表の仕方が間違ふことがあります。例へばお母さんが仕事をしながら頻りに鉄を探して居る、側に居た子供は之を見て「お母さんは何か探していらつしやる、きつと物尺が御入用なのだろう」と思つて物尺をもつて行く、すると母親は今鉄がなくつて気がいら／＼して居る處とで「何だね、物尺ぢやない、鉄がいるのぢやないか」と怒鳴る。この時子供のやさしい心はもぎ折れて「しくちつたな」と引込でしまふ。もし子供が理窟屋ならば「何だ間違は間違ひ、好意は好意ぢやないか」いふ所でせうが、子供はそんなとは云はない。黙つて引込でしまふ。とかく大人の生活は結果を主として居て好意そのものを感じない。世の中が忙しくなればなる程斯かる傾向になりませう。私共はまづ子供のやさしい心を受取てやりたい。随分迷惑な事でも取敢ずその好意を受取りたい。大人同士の間ですと義理もあるので、外面的にあまり好意をしりぞけない様に見せかけては居りますが、強者が弱者に對した時即ち大人が子供に對し、或は大人の間でも主人が召使に對した時などは、好意をすげなく退けるといふ事を平氣するのであります。これがどれ位子供「好意の感受性」の發達を妨げるかわかりませぬ。子供が好意を

發表する度に受取られるのは彼等にとつてどれ位愉快なことでせう。いつも誰かゞ直ぐ受けてくれると云ふ事は實に彼等を幸福にします。一體に神経組織の繊弱な子供にとつて受け入れられざる好意がどれ位彼等を害するかわかりません。彼等の胸に一つの空虚をつくつてしまふ。これが子供をすぐに悪くするとはゆかずとも害する事は慥です。此點は母親も我々も餘程注意しなければならぬと思ひます。勿論我々人間の事ですから何時も子供を満足させて置く事は出来ないでせう。時には彼等を失望させる——例へば十分玩具が買つてやれないとか、忙しくて質問に答へられないなど——事はやむを得ないので、しかし彼等がポツリ／＼と時々表はして来る好意だけは必ず受けて、彼等を失望させる事があつてはなりません。これは母親自身、又保母自身が細心の注意を拂はなければならぬ事です。「今忙しいから、面倒くさいから、腹がたつて居るから好意など受けて居られぬ」といふことは許されません。忙しければ忙しいなりに子供の好意を受け取る方法はありません。必ずしも一々形にはあらはさずとも十分受け取る事は出来るものです。

四

今一つの方法的實際問題は「容赦」といふ事であり、一體是迄よくいはれて居る子供の教育方法としては、訓戒する事、罪する事、賞讃する事、の三つが主なるものになつて居ります。近頃又此問題をやかましく云つて賞を興へるのは危険であるとか、罰はいけなやか種々申しますが、要はやはりこの三つであります。しかし私は我々の子供に對する態度の中に一つもつと大切な事があると思ふ。それは容赦といふ事です。之れ迄とても容赦は考へられないではありませんが、それは罰の後始末としてしか考へられて居ない。「容赦」自身の教育効果はあまり考へられてゐません。しかし私は罰の始末でなしの「容赦」が子供の心に如何に響くかを思はず居られません。叱つたあとに赦されても勿論子供は嬉しいと思ふでせう、赦されなによりは嬉しいに違ひない。しかしこれは赦された事が嬉しいよりも罰を免れた事が嬉しいので、丁度借りた金を返して證文を破つた時の嬉しさと同じでせう。赦された爲に其の時のがれ得る苦しさはそれは罰の苦しきであります。どうせ赦すなら始から罰なしに赦す事は出来まいか。先づ罰を與へて「今から三分たつたら赦してやるぞ、どうせ赦すのだから虐め序でにどし／＼いちめて置かう、そしてなるだけ赦しの有り難さを感じさせ様」といふ方法がなかな

か多いのであります。けれども容赦の教育効果は罰の結果としてなく、始めから赦してやる
といふところに真にあるのです。例へば遊戯室で子供が遊んで居るとピアノが弾きたくなつて
弾いた。丁度其處へ先生が何気なしにはいつて来た。子供はハツと思つてピアノを弾くのや
めて先生を見る。「許可なくピアノを弾いてはいけないもの」といふ事をその子はよく承知して
居るのであります。この時の子供の表情は實に醜いもので、叱り手が来たといふ目で先生を
見るのでせう。この時先生が「いけないねえ、今はゆるしてはやるが、しかしいけない事をし
た」といはず、黙つてニコリと始めから赦してやつたらどうでせう。その時子供はボカリと聞
が抜けてそこに美しいある物が湧き出るので。叱られると思つて緊張して居た心がフツと
ゆるむ時に、そこに何ともいへぬ美しさが湧き出るので。また例令へば子供が鉄を弄んで居
る。「切つてはいけない」といふ事は知つて居たがフット着物を切つた。この時に子供は其の
切れた處をみつめないで、すぐ母さんの方を見つめる。其母を見るといふ心は實に可愛想なも
ので、もうこの心持だけで、何も云はなくても澤山なのです。この時に母親が「だから云はな
い事ぢやない」など、云はずに「オヤ、切つたの」とせめて、ただこれだけを云つて「サア縫

つてあげませう」と云へば其時にこの子供の心にはどんな美しいものが現はれてくるでせう。
罰があるから「容赦」があるといふのは之れは古いユダヤ思想です。釋迦の生れる前の思想で
す。初めから容赦、途中も容赦、終りも容赦でありたい。容赦の中に生きて漂ふてゐる感こそ
實にそこに大きな教育効果があるのです。悪いことをして罰なしに許されたその感じは實に尊
いものであります。この経験を子供に幾度も與へると、子供は何時となく嬉しい感じを性格に
なつて、先程から申上てゐる所の私の望む氣持に子供を近づけることが出来ませう。

餘りに道徳教育に熱心な人の間に育てられると人間はいちけてしまふ。此處にも道徳が待ち
伏せては居らぬか、彼方から道徳が追ひかけては來ぬかと、何時もビク／＼して少しものんび
りとした所がなくなつてしまふ。凡ての人が自分に好意をもつて呉れるもの、容赦の世界に抱
き包まれて居るものだといふ事が、意識なしに自然に子供の性格の中に與へられれば、子供は
實にのんびりと育つて行きませう。

「かく育てたしと思ふこと」の一つとして、私はやつと今此處に落付いて來たのであります。
扱て、かくの如く何となくうれしい、有り難いといふ氣持を持つて育つ子供の行末は果してどう

なるでありませうか。必ずしもこの好意の感受性の有無で出世の道や社会的の地位がきめられるわけではありません。謂ゆる成功者になるか否かは請合ひませぬ。併し幸福な人間になる事はたしかです。もとより好意と容赦ユルシの間に保護されてゐる世界から、この荒い實際の社會に乗り出せば、好意を退け罰を與へる多くの敵が到る處に狼狽して居るでありませう。しかしその人の性格の根底にすでに好意の感受性が養はれて居れば、失望しながらも、一寸不平は起りながらも、うれしさの感じは決して消えるものではありません。實に私はこの育て方が人を眞に幸福にする根本であると思ふのであります。

教育問答

——幼稚園の必要——

客、幼稚園は必要だと云ふ説もあり、必要でないといふ説もあり、時とすると、有害だといふ様なことを聞くこともあります。どんなものでせうね。

主 一寸伺ひますが あなたは御子さんがおありですか。

客、ありますよ、丁度今年四才です。だが、なぜそんなことをお尋ねになりますか。

主、丁度四才におなりですつて、それは御話に大層都合がいゝ。いゝえ何ね、子どものことを知らない方は教育の御話がしにくいものでしてね、お丈夫ですかね。

客、はい有り難う、お蔭でまあ、普通の方ですが、でも時々病氣をして困ります。此頃も腹を毀して居るんです。何しろ、喧しくいつても間食が多いものですからね。

主、どこの子どもと同じですよ。しかし、間食なんか、嚴重になさつたらいゝちやありませんか。

客、ところがあなた、始終家にばかり居るんでせう。まだ遊び友達はなし、家のものも、そう、しよつちう相手ばかりもして居られず、ついね。

主、ひとりでお遊びになりませんか。

客、それは無理です、庭もあまりありませんしね。都會としては、まあ地面のある方が、祖父が盆栽が好きで、秘藏の鉢ものが澤山置いてあつたりして。

主、子供の遊び部屋は。

客、いやさ、それが可笑しいんですよ。實はね、子どもが生れると直ぐ、或る人に相談して——その人は女學校で家事科の先生をして居らつしやる方ですがね、家内の學校友達で、その道の専門の人だといふので、其の意見に従つて、児童室を拵へたんですよ。光線を充分採るために、他の室と少し離して、壁の色なんかも西洋の建築雑誌からとつたりして。

主、それは理想的ですね。

客、いゝえ、ところがです。極く赤ん坊の間は、そこで暮しましたがね、少し大きくなると、奴さん、その中にちつとして居ませんよ、始終われ／＼の部屋の方へ來つきりなんです。

主、足がありますからね。

客、ハハ、そんなんですよ。十畳の理想的児童室が今では毎日空き家なんです。

主、御座敷の方では。

客、子どもといふものは、よく散らかすものですね。なに私共は若いものですし、どうせ平氣なんです、祖母がきれい好きでしてね、人一倍。子どもの後から後から片づけるんですが、なか／＼おつきませんや。孫のことゝいふと目もない癖に、散らかされるのだけは、たまらないんだと見えます。それに、ものを散らさない躰もして置かなければならないといふ調子でせう。

主、御庭では御秘藏の盆栽、御座敷では、潔癖と整頓教育じや、お子さんも、足が伸ばせませぬね。

客、全くです。そうしちや、鼻をならすんでせう。ウエーファーだつて、あんなに、たてつゞけに食べては、腹にたまりませぬ。

主、實際、家にばかり居るとそうなり易いもんです。

客、おや、だから幼稚園が必要だと、言ふ譯ですか。

主、よくそういふ方がありますよ。

客、あなたは。

主、まあ、そんなところにも都合がいゝでせう。併し、幼稚園の必要を、間食防禦策で片づけ
て仕舞ふのは、少々浅薄すぎますね。

客、では、何か、もつと深刻な理由があるんですか。

主、深刻も可笑しいですがね、もう少し積端的な。

客、そうでせうね、まさか、間食防禦だけではね。

主、お子さんは何をして遊んでいらつしやいます。

客、そうですね、何といつて、きまりありませんがね、繪なんか好きで、よく描いて居るよ
うですよ。

主、美術家の天才がおありなんでせう。

客、どうして、それだといゝのですがね、随分變つたものばかり描いて居るんですよ、私達の

子供の時の方がもつと、まとまつたものを描いたと思ふんですがね。

主、あなたは、よつぽどおやりでしたか。

客、いゝえ、いゝえ、今ちや、まるつきり駄目なんですがね。子供の時分は、よく、あんなも
のが描けたと思ふんです。此の間も、古い用筆筒の引出しから、私の子どもの時の繪が出ま
してね、母がたんねんなものですから。

主、御立派なものでしたか。

客、どうせ、子ども繪ですがね、それでも、お父さんの繪になつて居る。坊やのは、めちや
くちやだ、なんて、母が子どもに見せたりして居ました。

主、へえ。

客、一つは、松の日の出に鶴、それから、もう一つは、猫に鼠に、犬に獵人の一筆描き、そい
つがなか／＼功者に繪らしくなつて居るんです。

主、結構ですね、お子さんは、それを見て、何と言つておゐでしした。

客、だまつて居ましたよ、何か言ひかけたようでしたがね。坊やには、とても、こんなうまい

繪は描けないでせう。いくら言っても御手本を見て描かないんですものと、言ひましたので、叱られたとでも思つたのでせう。だまつて仕舞ひましたよ。

主、どんな御手本をお上げなんです。

客、私は、よく知りませんがね、なんでも、いつか、出入りの經師屋が、坊ちゃんについて、五六枚描いて呉れたとか言つてました。

主、松の日の出に鶴ですか。

客、そうじやありますまい。父の時から出入りの、一寸きような老人なんですがね、一枚はたしか、略描きの七福神でした。

主、これは驚きましたね。

客、え……

主、それは、あんまり、おかわいそうですよ。

客、だれが……

主、お子さんがです。

客、なに、家内だつて、そればかり描かせるんではありますまいがね。しかし、何か手本がなくちやあいけないでせう。

主、手本なんか、いりませんよ。

客、畫に……

主、えい。——何でお描きです。

客、クレイオンで。

主、それは結構です。

客、ところが、それで落書きをして困るんです。

主、どこへ。

客、昨日は勝手の唐紙に。

主、はゝゝゝ達筆で。

客、それは、まあいゝんですがね。其の前には珍らしく、兒童室には入つて、おとなしくして居ると思つたら、折角ピンクに塗つてやつて置いた壁一面に、青のクレイオンを横なぞに塗

つて仕舞つたものです。

主、痛快でしたね、海のおつもりなんでせう。

客、そうですつて、いやなか／＼思ひ切つて大きく描いて居ましたよ。

主、そうですせう。

客、私はね、いつもの小さい落書と違つて、これはなか／＼面白いと思ひましたがね。母だの、家内だのには、大分叱られて居ましたよ。自分の部屋だつて、こんな事をしてはいけませんてね。

主、泣きましたらう。

客、それでも泣きませんでしたね。しかし、また、こんないたづらをするといけないから、クレイオンを取り上げると言はれたら、わあ／＼泣き出しました。

客、それから四五日して、もう、よからうと思つてクレイオンを出してやつたら、直ぐ勝手の唐紙なんです。始めは小さく隅の方へ描いたんでせうが、ついうかうかと描いて仕舞つたの

でせう。おかしな人間の顔を十ばかり並べて描いて居りました。

主、クレイオンをお上げなさつた時、何枚紙をお上げになりました。

客、その時は、私も傍に居ましたが、生憎畫用紙がなかつたので、紙は今度買つて上げますよ、今日は、クレイオンだけ上げませうと、家内が言つて居ましたから、紙はやらなかつたのでせう。

主、あなたは、御子さんの昨日の落書を無理とお思ひですか。

客、さあ、多少無理もないと思ふんです。何しろ、久しぶりで、大好きなクレイオンが手に歸つたのですからね。

主、私も、そう思ひます。

客、しかし、勝手なんかで、かくれて描いたりするのはいけませんね。

主、かくれなければ、どこで描きます。

客、……………

主、子ども部屋のは、お消しになりましたか。

客、いいえ、まだ。

主、今度、いつか、お邪魔して拜見させて頂き度い位ですね。

客、どうぞ、なかに、つまらないものですがね、青を一面に塗つただけで、海の気分が出てるところは妙ですよ。

主、波だけですか。

客、右手の方に、白で、鳥の様なものが描いてあります。そばで見ると、一寸何だか分りませんが、少し離れて見ると、たしかに、波の上の鷗に見えるなんかも、子どもの癖に面白いものですね。

主、それだけですか。

客、その鷗を、もう一羽描こうとして居る時、めつかつたのです。

主、その頃、どこか海岸へでも御連れでしたか。

客、はあ、鎌倉へ連れて行きました。

主、その時の記憶を描いたのでせう。

客、そうかも知れません。よく、見たものを描きますからね。いや、どうして、めちやくちやの様な中に、なか／＼、そう見えるものを描くんですよ、我子ながら感心させられることもあるんです。

主、海の大きい印象は、畫用紙より、壁の方が出ませうね。

客、なるほど……

主、達筆に、クレイオンを塗るのは愉快ですからね。

客、幼稚園でもクレイオンを御使ひですか。

主、はあ。

客、落書はしませんか。

主、あんまり。

客、壁か何かへ大きな印象を描きたいこともあるでせうね。

主、壁に黒板をはめて置きます。

客、へえ……

主、そこへ、色々のチョークを澤山出して置きます。
客、へえ……

主、今度、いつか、幼稚園に見にいらつしやいませんか。壁黑板に随分思ひ切つた傑作が始終
出来ます。

客、畫用紙も、お使いですか

主、はあ。

客、手本は……

主、與へません。

客、何を描きます。

主、いろ／＼のものを描きますよ。一枚一枚自分の畫を描きますよ。

客、それでいゝのですか。

主、幼稚園の子どもに畫を描かせるのは、繪のけい古をさせるんはでなく、心にあるものを、
存分に表はさせるのですから。

客、なるほど。

主、御宅で、經師屋のお手本は、およしなさいよ。

客、そうですね。しかし、手本だけやめればいゝのですか。

主、それからさきは、一寸御話が面倒です。

客、何がです……

主、どうして、子どもに、ほんとうに自分の繪を描せるかは。

客、そうですね。

主、幼稚園の先生は、その秘訣を知つて居るんです、まあ、一度、實際を御覽下さいません
か。

客、宅では、手本の通り描かせて、よく似て居ないと言つては、描き直させたりしてますが、
それは、いけないのでせうか。

主、松の日の出に鶴を描かせるには、そうしなければなりませんね。

客、こいつは、恐れ入りました。

主、冗談は別ですがね、子どもが自分で描き度いと思ふものをほんとうに、自分の畫として描かせるだけのことも、やさしい様で、どこの家でもきつと出来るといふものではありませんね。

客、實際 そう伺ふと、ほんとうにそうです。

主、それは繪だけの御話ですがね。子どもの生活全體に同じ問題がありますね。

客、分つたと申してい、か、どうか知りませんが、お言葉だけの意味は分りました。

主、いゝ保姆の居る幼稚園は、そういふ處に、子どもの心を活かして育て、行きますね。

客、いや、大分わかりました。もつとよく私も自分で考へさせて頂きます。

主、これで幼稚園の必要の理由の全部を申上げたわけではありませんよ。自分の子どもをもつて居るものは、場所の點からも、親の力の點からも、家庭だけでは、充分でないことを思ふのですがね。

客、實際です。

主、實際の話です。そこで、いゝ幼稚園が、我子のために、ほしくなるのです。

客、どうも、大層長くお邪魔しました。今日は之れで御免蒙りませう。

主、さようですか、是非一度、幼稚園の實際を見においで下さい。

客、有り難う御座います、きつと近日に伺ひます、ではさようなら。

主、さようなら。

幼
兒
の
教
育
者

1
あ

幼稚園保母

保母に關する二様の見解

まるく〜と肥えて、林檎の様につややかな頬。深紅のリボンを蝶々に結んだ、ふさ〜とした垂髪。鈴の様につぶらに、睫の長い黒目勝ちの、朝の露にも似た清い眼、もの言へば指でついた様なえくぼが出来て、眞珠を植えた可愛らしい齒並のこぼれ出る、乙女椿の蕾にも似た口もと。英吉利風の幅廣なカラーに、きちんとした蝶結びのネクタイに、蒲酒に取りすました小公子。ゆつたりとした白エプロンの下は、目のさめる様なメリンス友禪の元祿袖に、とき色のへこ帯がよく似合ふ快活な小公女。……斯うした可愛らしい幼児達を相手にして、別に定まつた課業があるではなし、浮き立つようなマーチの曲に、可愛らしいスキツピングの調子をあはせて、蝶々の眞似をして見たり、鳩に豆をやる眞似をして見たり、遊園のお山登り、池めぐりがあきて來れば、昔々のお伽噺、一番むづかしい事といふのが折紙、粘土細工位のもので、要するに玩具と歌と遊びとで子供と一しよに笑つてさへ居ればよいのである。世の中に保

姆ほど氣樂な面白い一方の仕事はないと言ふ人がある。

そうかと思ふとまた一方には之れと正反對に、いやだ、年が年中子供のお守りばかりして、あんな世話のやける、小面倒な、うるさい仕事は、死んでもいやだといふ人がある。そういふ人から見た保姆の仕事は、世にも一番骨が折れて、氣が疲れて、而して要するにくだらない苦勞一方の仕事なのである。

どちらにしても、實際に就てよく考へて見なければ分らない。

保姆の苦勞

保姆その人に訊ねて見たらば、其の仕事をつらいものいやなものだと言ふ人は一人も無い。そんな人のある筈は無いのである。しかし、保姆の仕事は局外の人が表面から見ると、氣樂一方、面白一方のものでは決してない。

ほんとうの理屈からいへば、子供と遊ぶといふことが、實は非常に六かしい深い心づくしを要することなのであるが、それは先づ暫く別問題として置いて、たゞあゝやつて、毎日々々子供と楽しく遊んで居るといふ事だけが、それ自身容易の業でないのである。一日半日ならば一

生懸命子供の相手は誰れにも面白いものである。しかし其れが毎日である。日々／＼繰り返されて居るのである。退屈まぎれにたゞ一寸子供と遊ぶ時の面白さを以て、保姆の仕事としての遊びを律し得る譯のものではない。永い間には、氣分の悪い日もあらう。胸に一身上の心配のあることもあらう。出来ることならば一日何もしないで考へて居たいようなこともあらう。殊に保姆は物思ひ易い若い年頃の人が多い。何彼につけて心に動搖の起り勝ちな年頃である。しかも毎日同じ様に機嫌よく子供と遊んで居なければならぬのである。そんなことは保姆の仕事に限つたことではない。總ての勤務に伴ふものだといふ人もあるかも知れない。誠にそうに相違ない。併し保姆の仕事が外面如何にも氣樂千萬に見える爲か、保姆の苦勞を之れだけに察して居て呉れない人がある。實際毎日あゝやつて子供と楽しく遊んで居るといふことは、誰にでも出来る容易のことではない。

一體人は結果さへ得られるならば、途中は容易く忍び得るものである。尙ほ又結果があるといふ手答さへあるものなら、それだけでも途中の苦勞を慰めもされ、忘れられもするものである。然るに保姆の仕事は此の「手答へ」なるものに於て最も弱い性質のものである。理論上の

結論や、經驗上の自信は兎に角くも、日々その時々、之れだけ遊んだから、子供に之れだけの利益があつたといふ風の手答へは全くないのである。之れが學校の教育となれば、如何に下級であるとしても、讀本を一枚教へた、九九を一つ覚えさせた處に、目に見えた結果が現れて居る。保育の仕事では、それさへ少しも得られないのである。極端にいへば、こうやつて毎日々々して居ることが、果して如何に効驗のあることか、疑ひ出したら分らなくなるものである。自分の仕事に手答へのほしいのは誰れでも同じであるが、若い者には殊にそれが強い。それも仕事に無責任な呑氣家なら兎に角く、熱心家誠實家であるだけ、仕事に手答へがほしいものである。身を碎いても手答へのあることがし度いといふが熱心家の心理である。それが毎日同じように、積木を積んで崩し、崩しては積んで居るのでは、結果を急ぐ血氣の若い者には、如何にもまだるこしいことである。しかも保育といふことが本來斯ういふ性質のものであるとすれば、疑はず惑はず、急がず焦らず、一貫した努力を以て、毎日の「遊び」をつゞけて居なければならぬ。これがなか／＼以て容易なことでないのである。

立つて居る時間の多い爲めに、身體の疲勞の大なることや、其の爲に被むる生理上の被害や

幼児の世話のこま／＼と手のかゝることや、一刻も頭の安まらぬ氣苦勞や、之れ等のことは敢て言はない。それは外からも分ることである。たゞ局外から見ただけでは分らない保母の苦勞の中には右に述べたやうな、人の知らない大苦勞があるのである。心に悲しいこと、つらいことがあつても三百六十五日機嫌よく子供といつしよに笑つて居なければならぬ、教育と言つても、其日其日には殆ど何の手答へのない様のこと、しかも熱心に一生懸命で子供と遊んで居なければならぬ、此の孰れかで、保母の心は人知れぬ苦惱になやむことが時々ある。

保母の慰勞

何事も眞の苦勞は局外からは分らないが、眞の慰勞も局外からは測られぬものである。局外から分る様な苦勞はらかな方の苦勞である。局外から測り得られる様な慰勞は、淺い慰勞に過ぎぬことが多い。眞の慰勞は常に我が個中のものでなければならぬ。

又、世にいふ大抵の慰勞なるものは、其の仕事から見て間接のものであることが多い。御苦勞でした、先づ御茶を一つといふ類のことを、慰勞々々といはれて居る。勿論それも確に一つの大きな慰勞である。慰勞する方の眞心から云つても、慰勞される方の感じから云つても、確に

一つの慰勞である。併し、すべての眞剣な仕事は、そんな間接的のこのみで慰勞せられるものでない。寧ろそういふ間接的のことは全く無關係に、仕事そのものから直接的の慰勞を與へられるものである。而して教育者の慰勞は皆此の種のものである。その勞力、苦勞に對して、如何なる多大の間接的慰勞と雖も、到底之れに充分に報ふるに足るものではないのである。教育そのことから生ずる直接的慰勞ほど、眞に教育者を慰勞し得るものは無いのである。

人知れぬ大苦勞のある保母の仕事も、此直接的な人知れぬ大慰勞を有して居る。それは他でもない。人間の中心から一番清淨無垢な幼兒の心から、清淨無垢の愛をば受取り得ることである。そういふ幼兒達から信用と尊敬とを以て深く親しみ慕はれることである。實に此の人知れぬ慰勞に保母は其の總ての苦勞を忘れるのである。其の勞力の大きいことに於て、其の間接的慰勞の途の甚だ薄きことに於て、保母は決して割のよい仕事でもなく、羨むべき位置でもない。少くとも現在に於ては、世に最も慰勞少なき仕事の一つである。しかし、一度よく、自ら個中の眞味を味ふことの出來た人に於ては、之れ程楽しい、之れ程幸福な、之れ程慰勞多き仕事は無いと謂はれて居る。あゝ、實に愉快です、幸福ですとは、尊敬すべき熱心なる保母

諸君の口から、屢々漏れる自白である。而して此の慰勞を得ることなくして保母の業に従ふて居る人があつたら、恐らく其の業に堪えぬことであると思ふ。

保母の歡喜

毎日々の保母の慰勞は、即ち兒童に直接し、幼兒と相親しむことから自然に得られて居るのである。しかも保母の仕事は、此の日常の慰勞の外に、時あつて大いなる特別の歡喜に遇ひ得るものである。即ち保育上何か特別に困難なる幼兒があつて、特別の苦心、特別の勞力を盡した末、多少なりとも其の結果の得られた時、初め其の幼兒の爲に注いだ悲しみの涙は、茲に非常の大歡喜と變じて、保母の胸は喜悅の大濤に濤立ち轟く思がするのである。素より困難の程度に従つて歡喜の程度もいろ／＼に違ふものであるけれども、此の純粹なる保育上の喜びによつて、保母は其の仕事を天下何ものにも替へ難きものに思ふ様になるのである。

但しその「結果」なるものは、外から見決して大いなる結果、美事なる成功に限つたことではない。前にも一寸述べた通り、他の多くの仕事に比べて、一つ／＼手答へもなく、著しい目の前の結果もないのが幼兒教育の一つの持前である。もし手答へと常に目ざましい成功とをのみ

期待する人は、失望するか無理な結果を作るかの二つに終らざるを得ないのである。そういう期待の強い人は神童だけを集めて教育するか、乃至は猿か山雀にでも藝を仕込んで、見物人を驚かすがよい。普通の幼児教育は元來がそういふ譯のものでない。そこで保姆が非常の歡喜として居ることも、局外者から見たら何でもないことであることもある。時には幼児の心に一分の進歩一厘の發達がほの見えたとして、保姆は嬉し涙に泣く事がある。戦勝の純忠將軍が凱旋門をくぐる時と同じような眞摯の感激に胸ふたがる思ひをすることがある。蓋し結果の大小が此の歡喜を生むのではなくして、保姆の熱誠努力そのものが、之れを生むのであるからである。大きい努力から些少の結果を得て、そこに大歡喜を生むることに於いて最も強甚なものは彼の白痴教育であらう。教育の結果に於て、其の期待最も僅少なざるを得ざる此の教育は、局外者の目よりすれば、殆ど常に無効なる努力を爲して居るものゝ如く見ゆるものである。若し結果の大を以て人若しくは自己に誇らんとする心から此の教育をするものがあつたら、其の人は失望とならざるを得ないのが常である。其の大努力小結果の點に於て、保姆の仕事よりも實に一層なるものと言ふべきである。即ち此の白痴教育家が其の仕事から其の慰勞と歡喜とを得

るの狀は保姆の眞の歡喜が如何なる性質のものなるべきかを語るに最も適當なるものである。誰かいふ。我結果は我が勞に酬むないと。教育は骨ばかり折れる苦業だと。其の人は此の大歡喜の寶庫へ入りながら、取り得べきものを自ら取らずして不平ばかり云つて居る人である。普通の幼児教育は白痴教育よりらかな丈け、白痴教育ほどの大歡喜は得られないかも知れないけれど、他の年長兒童の教育よりも一層世話がやけ餘計に骨が折れるだけに、それだけ他の教育よりも、必ず大い歡喜が得らるべき筈なのである。白痴兒教育者程の同情と忍耐と努力とを以つてすれば、どんな幼兒に對しても歡喜すべき何かの結果が得らるべき筈なのである。

保姆の第一資格

保姆の資格を論じたならば、見方によつて色々と言へるであらう。また種々のことが其の必要の條件内に數へられるであらう。しかし、保姆の苦勞に堪え得る人、保姆の慰勞に満足する人、保姆の歡喜を第一の歡喜とする人、之れこそ保姆になれる資格のある人と云ふべきだと思ふのである。

眞によく之れ等の三條件を具ふる人は、即ち眞によく、幼兒教育に適し得る人である。何が

何でも此の三條件に缺くる人は、到底幼児教育者には適しない人である。幼児教育の學問上の研究者、幼児教育の事務上の管理者、幼児教育の思想上の鼓吹者、さういふ人々の資格には必ずしも此の三條件が絶対の必要ではないかも知れないが、併し實際に幼児に接して、直接に其教育の任にあたる人には、之れが何よりも缺くべからざる資格である。資格などいふ窮屈な言葉を用ひないでも、之れなくして保母になることは其の人の苦痛であつて、之れあつて、保母になる時、其の人は最幸福な人なのである。

但し、斯ういふ心を持つて居るだけで、保母の任務が完全に盡し得るといふ譯ではない。それには保母の素養も要る。保母の練習も要る、保母の経験も要る。併しそれは保母のハタラキに屬する要件である。いくら此方の條件が具つても其の人が保母になれる人柄でないならば、矢張りほんとうの保母にはなれないのである。即ち之れを保母の第一資格と名づけた譯である。以下保母の第二資格、第三資格は又別に考へを續けなければならぬ。

保母その人

教育は綜合作用である。幼稚園教育も亦極めて複雑なる諸方面の作用の協同合致によつて、始めてよく其の効果をあらはし得べきものである。吾人は時にその一面を擧げ、一作用を捉へて、その大切なるを説く。或は制度に重きを置いて論ずることもある。或は方法の研究の要を説くに専らなることもある。特に幼稚園教育に於て、設備の貴重なる所以を極論することもある。幼児等自身の相互作用の如何に教育的價値に富むかを見て、頗る之れを尊重するの論をなすこともある。其の他曰く何、曰く何、苟も幼稚園教育の問題として數へらるべきもの、其の大小を問はず、何れも皆、幼稚園教育をして其の完き効果を實現せしむるに欠くべからざるものである。その最も小なる如く見ゆる事項と雖も、之れを忽にして可なるものはない。又其の一つ／＼を如何に尊重し、將た過重するも亦、恐らく其の必要を認むるに於て過ぐることはないであらう。

しかし、之等の綜合作用の中にあつて、最も基本的喫子的要約的作用をなすものは——之れ

あるが故に、他の諸作用が始めて教育的に生きて来るものは——之れ無ければ、他の諸作用のすべてが、教育的に死するものは——更めていふ迄もなく、保姆その人である。保姆その人、實に實に保姆その人に、幼稚園教育の究極の解決がある。此の意味に於て、教育は綜合作用である前に、それよりも尙基本的意義に於て人の作用である。

人の作用であれば、その人以上のことは出来ない。他の多くの作用は、此の一人の作用をいばい發揮せしめ、完成せしむべく、参加するものに過ぎない。人を外にして、其の他の條件で教育を完うして行かうとするのは、射手のない弓で鳥を射んとし、弾き手なしの琴から、音楽を聴こうとするよりも無理なことである。なくてはならぬものは人である。保姆その人である。

幼稚園の教育に於ては幼児を尊重するといふ。しかも此のことは、たゞに幼児に自由を許すといふだけでは出来ない。保姆その人が自由の人でなければならぬ。而して自由の人とは、自由主義の理解者といふだけではない。又自由を愛する人といふだけではない。彼自ら（人格の）自由を有しないで、知識的に自由を理解し得る人もある。或は又、彼自らの性情の反動として、自由を憧憬し又之れを愛好する場合もある。そういう人は自分では自由を與へる積りで

も、幼児は決して眞の自由を與へられない。却つて、その人の有せる不自由或は假りの自由を受け取る。人に眞に自由を與へ得る人は、彼自らが眞の自由を持つ人でなければならぬ。

幼稚園教育は個性を尊重しなければならぬといふ。しかも、個性尊重は、個性の心理學的理解ではない。また、個性の放任でもない。個性尊重は尊重であつて、他人の個性を尊重し得るものは、彼自らが、先づ、自分の個性を尊重し得て居るものでなければならぬ。少くとも、自己の個性の充分なる意識を持つものでなければならぬ。殊に、教育に於ける個性尊重は、たゞあるがまゝの個性を、それ自身として承認するだけではなくして、之れを一層向上せしめ、發展せしめんとする意志を含むものである。而して、此の意志は、自ら己れの個性を向上せしめ、發展せしめんとする努力を有することなき者に、決して生じ得べきものではない。人の個性を尊重し教育し得るものは、みづから我が個性を尊重し教育するものでなくてはならない。

幼稚園教育に於ては、幼児に美の趣味を與ふべしとか、知性の正確さを與ふべしとかいふ。しかも、保姆その人にして、美の深き趣味なく、知性の正確なくして、何の處よりか、此の教育が可能にならう。之れ等は一例である。吾人は斯くの如く考へ來つて、幼稚園の教育効果の

一切を擧げて——少くも其の責任の一切を擧げて保母その人に歸せざるを得ざるに至る。必ずしも極端の言ではないと信ずる。

但し、斯くの如き言をなすを以て、保母諸君を責むるに急なるもの、苛酷なるものと誤解せられてはならない。吾人は、幼稚園教育の困難さに就て、その實情を最よく知悉せるものとして、寧ろ諸君の事業と苦心とに無限の諒解を惜まないものである。しかも、吾人が今日此の論をなすものは、幼稚園の教育効力の最中心點を明かにせんとせるに他ならない。而して、敢て言ひ得ることは、すべての幼稚園は、その保母が、銘々に、如何に常に此の中心點を凝視せるかによつて、その教育的價値が定めらるゝといふことである。

ところで此の評價は、設備の評價や、方法の評價と違つて外からはよく分らないことである。又假りに分るものであつた處で、かくの如き處まで深入して批判することは其の人の前でも——沉んや其の人以外の人の前でも——餘りに無禮なことになる。故に此の批判は、自分みづから以外、何人も、觸れては呉れないであらう。かくて、保母その人といふ問題は、どこ迄行つても、保母自身の問題である。あなたの問題を當然あなたに擔はせる。これが、あなたの幼稚

園を、我國の幼稚園を、意義あらしむる第一の出發點である。

あゝ何たる平凡な、そして云ふべく苦しい言葉であらう。

何を以て導かんとするや

貴重なる幼児は諸君に托せられて居る。其の幼児を身にもかへ難く愛重して居る親達は、諸君に對する全幅の信頼を以て其の子を携へ來り托したのである。國家は其の幼児の教育者として、諸君を承認し、又諸君に期待して居るのである。而して、幼児は其の全精神を諸君の前に傾倒して、其の教導に従はふとして居る。諸君が充分此重任を自覺し、日々其の全力を致しつゝあるは何人も疑はない。それはよく、諸君が保育に熱心なるによつて證明せられて居る。諸君口を開けば保育法の困難なるを云ふ。困難を感じるは、熱心なるの結果である。諸君は機會を得る毎に保育法の研究を怠らない。研究につとむるは熱心なるの結果である。又、保育法研究の爲に、進んで種々なる基礎知識の研鑽にまで及ぶ。益々其の熱心なる所以である。しかし、諸君は斯くの如く研究せられ、熟達せられても、方法のみを以ては幼児を導くことは出来ない。何故に導かざるべからざるかは明かである。如何なる方法によつて導くべきかも明かである。然らば果して何を以て導かんとするや。之れは屢々凌されて居る問題である。

導くべき目標——それが自己の微力にて到底導き到り達し得ないことが多いとするも、兎に角く、目標だけは立つて居なければならぬ。而して教育の目標は、教育の各時期に従つて、程度にも亦性質にも各相違あるものではあるけれども、其の一つ／＼の一里塚を辿りつくして到達せんとする究極の目標は、即ち人生の目的それ自身でなければならぬ。而して、之れあるによつて各目標の方向も定められるのである。以て見れば、我等が幼児を導かんとする方向は、——幼児教育の範囲内では何れの點まで進み得るにせよ。——恐らく極めて少し許りしか進み得ないにせよ。——いふまでもなく、人生の目的それ自身によつて指定せられなければならない。

○
若し我々が人生の目的を、既に完全に捕へ得て居るならば、それによつて確に幼児を導くことが出来る。恐らくは之が理想の教育者といふものであらう。しかし、之れは凡ての人に望む

べく餘り六かしいことである。又若し、此の條件に合しなければ幼児教育者たり得ないとならば、果して幾人か其の任に留まるに値しやう。そこで吾々は、もう一段低い處で寛恕せられなければならぬ。それは何であるか。我々自分が既に身に捕へて居るものは居ないが、それを明かに理解し、眞實切實にこれを自己の目標として居るものを有して居ることである。

換言すれば、自分も今現に其目標の方へ自らを導きつゝある身ではあるが、兎に角く、其の目標だけは分つて居ることである。蓋し之れは、教育者として寛恕され得る最極限であらう。即ち、之れだけのことのない者は、教育者とは云はれないのであらう。自分にも分らない方向に、他を導いて行くことは到底出来ないからである。

我等は我が有せる此の方向を以て——せめてはこの方向だけを以てなり、幼児を導いてゆくの外はない。而して、我等、果して如何によく此の方向を意識し、眞によく方向として居るか。換言すれば、如何に眞實に我が方向として確に有して居るか。

保育法の研究は益々進まなければならない。保育の経験は益々熟練しなければならない。し

かも同時に、——寧ろ先きに——以て幼児を導くべきものをわれに有しなければならない。

斯くの如きことは、教育全體の問題で、特に幼児教育に限つた問題では勿論ない。しかも、幼児を相手とする教育なるが故に、軽く考へられたり閑却せられたりしてよい理由は、何處にも無いのである。而して我國現今の保育界に此の方面の意識の一層強めらるゝ必要あることを思はざるを得ない。

幼児教育の第一義

一

幼児教育の第一義は幼児生活の価値を知ることである。之れは幼児教育に限つたことではない。すべての教育は、其の被教育者の価値を知らなければならぬが、幼弱なる幼児は愛護せらるゝことはあつても其価値を無視せられ易いから、幼児教育に於て特に此事をいふ必要がある。

二

茲に幼児教育者の天才者がありとすれば、その人は幼児生活の価値を感じ得る様な性質に生れて居る人である。

茲に幼児教育の眞の意味の大家があるとすれば、その人は誰れよりも正當に又切實に幼児生活の価値を知つて居る人である。或る人が始めて幼児教育に従事して、次第に此の教育の眞の理解が出来て來たと言ひ得るならば、それは其の人が幼児生活の価値を會得し得る様になつた

時である。

三

幼児教育に關する凡ての問題は、理論的にも實際的にも、つまり此の第一義から派生するものである。幼児教育者の熱心も、研究も、巧妙も、熟達も、畢竟するに幼児生活の価値を知ることによつて生るゝことである。此の第一義を缺ける幼児教育の熱心も、研究も、巧妙も、熟達も、他の意味に於ては知らず、幼児教育の本義そのものからは極めて意義の稀薄なるものである。

四

吾人は幼児生活そのものゝ価値に無理解にして幼児教育の必要を説く議論、幼児生活そのものゝ価値を知らずして教育法の巧妙を誇る熟達、幼児生活そのものゝ価値を知ることが學ばざる保母教師等に遭遇する時、斯くの如き幼児教育が果して何をなし得るものなりやに就て疑ひなきを得ないのである。

吾々は幼児を尊重する人でなければならぬ

吾々は幼児を愛する人でなければならぬ。吾々は幼児の爲を思ふ人でなければならぬ。しかも、それだけでは足らぬ。吾々は幼児を尊重する人でなければならぬ。幼児を尊重するといふことには、いろ／＼の意味を含む。第一、幼児を一個の人格として尊重することである。

此の子が成人したら、如何にえらいものになるかも知れない。故に、今は小さい子供だからとて、これを輕侮してはならぬとは、人のよく言ふ處である。又、之れは大切の家のおとまりである。大切なる第二の國民である。故に心して尊重しなければならぬとも、よく云はれることである。之れ等の考は孰れも正しい。こゝろいふ意味からでも眞に幼児を尊重するならば、それは結構なことである。しかし、こゝろいふ考へ方の他に純な一個の人格として、小さくとも一個の人であるといふ尊重をも感じなければならぬ。吾々の被教育者であるには相違ない。しかし、それは吾々との教育の作用上の關係に於て被教育者の位置に置かれて居るので、其の人格

としての絶對の尊敬は、被教育者なるが故に教育者たる吾々と一毫の上下あるものではない。吾々は幼き被教育者として取扱ふことにのみ馴れて、一個の人格として尊重することを忘れてはならない。抑も教育の最後の目的は、被教育者の人格的尊敬を擴大し、完成するにある。果して然らば、先づ人格として尊重することなしに、何の教育が出来やうぞ。徒に、軽く淺く、幼兒を被教育者としてのみ遇して其の人格を尊重してやらないならば、之れ實に人の子を賊するものといふべく、又人の道として最大の罪惡である。

○
人格としてのこの尊敬は、大人と雖も幼兒と雖も變りはない。しかし、其の人格の内容的價値は幼兒に於てはまだ小さい。是に於て、吾々は、幼兒を人格として尊重しつつも、具體的に、實價的に、之れを小さきものとしか見られない。之れは勿論一通り無理のないことである。また、それが必ずしも悪いことではない。しかし、吾々は或る一事に注意を向ける時、具體的にも、實價的にも、幼兒の生活を尊重せざるを得なくなる。その一事とは何か。發達といふことである。幼兒の自ら有して居る其の偉大なる發達の力である。

幼児の現在は未發達者である。しかし、非常なる發達力を有するものである。彼れの本質は、其の未發達なる幼弱状態それ自身ではなくして、旺盛なる發達それ自身にある。吾々は、此の點に於て幼児を見る時、たゞ驚嘆し、尊崇することを知らぬのみである。元より、この發達力は各幼児によつて大小の差のあることもある。しかし、如何に小なるものと雖も目ありて見得るものには、驚かるゝの他はないのである。而して、此の發達なるものは、幼児各自が有する處ではあるが、それは寧ろ自然それ自身が有する處のものである。それが幼児にあらはれて居るのである。是に於て、吾々が幼児の發達に驚嘆することは、即ち自然の大に驚嘆することである。此の意味に於て幼児を尊重することは、即ち自然を尊重することである。反對に此の意味に於て幼児を尊重することを知らないものは、自然を尊重することを知らないものである。愚といはざるを得ない。しかも亦、自然の理法としては、「發達」を理解して、一人々々の幼児に於て此の尊重を感じ得ないならば、これ亦實に空なることゝ云はざるを得ない。

○
幼児を尊重するものにして始めて其の尊重すべき幼児を教育する自分の事業を尊重すること

が出来る。かくて、吾々が幼児を尊重することを知らない時に、吾々は幼児を輕侮すると共に、吾々自身を輕侮することになる。

子供から學べよ

一

幼児教育に多くの基礎的知識を必要とすることは、いふまでもない。しかし子供の心性を知るといふも、子供を如何に取扱ふべきかの方法を知るといふも、本や講義からのみ學び得ることではない。もとはと言へば、いふまでもなく子供から學ぶことである。

「子供から學べ」といふことは、フリーベルが幼時教育者に與へた最大なる格言の一つである。のみならず、フリーベル自身が其の實を體證して居るのである。蓋しフリーベルの彼の教育的創見は、素より彼の大いなる天才によることであるには相違ないが、一つには彼れがよく子供に學んだ結果であるといへる。幼稚園教育の第一原理たる、「自己活動」の原理論は、フリーベルの頭から織り出されたものでなく、天からくだり、地から湧き上つたものでもなく、又古典から漁り得たものでも勿論ない。たゞよく子供から學んだのである。自己活動の第一原理に基いて、其の教育方法として用ひられた遊戯でも手技でも、乃至色々の教育玩具でも、いづ

れも皆子供から教へられ、子供自身の生活から思ひついたものである。此の意味に於て、フリーベルの師はシェリングでもなくベスタロツチでもなく、實に子供であるといふべきである。

フリーベルのみではない。教育上の偉大なる創見は、すべて、子供から學んだものゝみである。若しそれが、子供以外のものから出た知識理論であるときには、大抵失敗であることが多い。即ち少しく奇に過ぎた言ひ方をするようではあるが、子供は先づ教育者に教へて、それで自分を教育させるのであるといつてよい。

此頃多くの人の注意と敬服の的となつて居るモンテツソリーの教育意見及びその考案なるものは、人々は如何にもモンテツソリーの創見として感心して居る。成る程それにも相違ない。しかしモンテツソリーの偉大なる處は、其の羅馬大學に於ける學問よりも、セガン其他の研究よりも、よく子供に學び、子供の教ふる通りを忠實に實行した處にある。

二

吾人の許へ來て、如何にせば子供及び其の教育方法が充分理解せらるべきやと問ふ人が屢々

ある。而して、たゞ吾人から参考書の數種と、吾人の意見とを聞き取つて、満足しようとする人が屢々ある。それが教育上の純門外漢であるか、始めて教育に従事し始めたといふ人ならば別に不思議もないが、幼稚園教育に従事すること既に數年、長い月日の經驗を履んで來た人に、それが多いのであるから驚く。吾人はさういふ人に對して言ひたい。あなたは、本よりも吾人よりも立派なる先生（子供）を常に澤山有して居らるるにあらすやと、それは皮肉でも何でもなし。

幼稚園教育法に活潑な進歩が少なく、適切なる新考案の出づることの少いのは、實際家が多くは講義及び書籍等の所謂傳承的知識のみよらるゝからである。言ひ換ゆれば、直接に兒童より學ぶことによつて得る直傳的知識によられないからである。傳承知識は假令精確であつても、固定的であり靜的である。それから新しい着眼、新しい試みが湧き出て來るような動的な處が缺け易い。理論は立つ。しかし活用は少ない。

我國に、實際直接によく子供から學ぶ教育者の多く出ない中は、我國の幼稚園教育は何時迄も此の無生氣と不活動とを脱し得ない。其反對に一人でもよくこの態度をとることの出來る人

があつたら、兒童は其の無限なる寶庫の秘鍵をその人に托して、其の人を用ひて、我國を用ひて、世界の幼稚園教育に大いなる活氣と知識とを惜む所なく豊かに與へるであらう。

幼稚園教育の積極性

消極的教育といふ語がある。自然派の教育論者によつて屢々用ゐられる。其の意味は、兒童は自己の自然の發達性を有する。教育はその天賦の發達を存分に發揮させるのが第一の任務である。故に教育は兒童の自然の發達性を尊重して、敢て之を妨げ、冒すことなき様、慎重なる態度を執らなければならない。徒に與へんとし、濫に教へんとするは、此の意義に逆らふものである。極言すれば、自然に對する冒瀆である。少くも餘計の事である。といふのである。尤も、教育一般に亘つて之れ程あからさまに此の考を述べるものは多くはない。先づルソー位のものであらう。しかし、幼兒教育に就ては、此の考へ方が可なり行き亘つて考へられて居る。讀み方によつてはフレイベルの言葉の中に既に此の意味がある。ルソーの影響を強く受けて居る近世の自由遊戯主義保育論などの中には、一層此の考へが多くあらはれて居る。

吾人は、此の種の考へ、即ち、教育の消極的態度の中に、ある大きな眞理の一面が含まれて居ることを見る。殊に教育の實際上此の反對の弊害に對する反動的氣分、乃至或る警戒的意味

に於て、大に此の種の考へ方に尊重の意を感じる。かくて、吾人は、今も、否、何時迄も、深き尊敬と沈潜の心を以てルソーを讀む。しかし、消極的教育はそれだけで教育の完き姿ではな

50

幼稚園と子供の自由な遊び場、幼稚園教育者と心なき子守達。之等の對立の間には、實に深い差別があり、相違がある。それは、幼稚園は、たゞ子供を遊ばせる處でなくして、教育をする處である。幼稚園教育者は、たゞ子供の無害の相手たるに止らずして、教育をする者である。即ち、それが教育であり、教育者である限り、いふまでもなく其の目的に積極性を有するものである。其の効果に積極的効果を期するものである。幼稚園は假令方法に於て或る消極的態度をとるの要ありとするも、教育であること夫れ自身が、積極的なものである。

我國の幼稚園の歴史は、初めに、教へ過ぎる幼稚園であつた。その弊に對して、次に極端な消極的幼稚園が続いた。その中には、無能も混じた。怠惰も混じた。而して、終には、幼稚園教育者自ら自分のして居ることに、何の積極的信念も、意氣も、徹底も有しない様にさへなることもあつた。或るものは云ふ。間違ひのない様に、あたらずさはらず打ち捨て、おきます。

或るものは云ふ。計畫なんぞ立てません。或るものは云ふ。幼稚園は子供に別段何事もする處
じやありません。斯くて、意味の深い、實に深いルソーやフレイベルの考へが、淺薄な無思慮
な、更に時には無責任な放任と混同される。而して、幼稚園教育の存在の意義が、他から疑は
れ又自分にさへも疑はれる。

吾人は、兒童の天賦の自然の發達性を信ずる。之れを尊重し、又之れに信頼する。しかし、
同時に、我が教育を信じなければならぬ。之れを尊重し、之れに信頼しなければならぬ。
そこに、吾人の幼稚園が、存在の意義と職能とを有つ。

幼稚園は、それが幼兒に與へ得べき教育の一歩を行ふものでなければならぬ。幼兒の爲
に必要にして可能なる計畫の一つをだも怠つてはならぬ。その教育は、どこ迄も幼兒の爲に
積極價を有するものでなければならぬ。此の責任と自信とを缺いて、吾人の幼稚園に何の努
力があらう。何の工夫があらう。何の失敗と歡喜とがあらう。何の生命があらう。

但し、幼稚園の積極性が、其の内容と程度とに於て、幼兒教育としての正當なる限度をもつ
ことはいふまでもない。併し、吾人は、此の限度を守ること、幼稚園教育の積極性を失するこ

とを混同してはならない。寧ろ幼稚園の積極性に對する強き信念があつて、而して後、此の
限度の顧慮と研究とが起るのである。而して幼稚園の積極性は、保姆その人の責任感以外から
は出ない。

新たに考へよ

他の教育の進歩少くとも其の活動のめざましさに對して、幼稚園教育の何となく不振にして、おくれたる觀あるは、數へればいろいろの理由も事情もあることであらう。しかし、外からの理由、他に訴ふべき不足の數々を措いて、直ちに之れが第一の主因を突けば、責めは即ち今日の幼稚園教育者その人にある。新に考へるといふことなく其の日其の日を繰返してのみ居る傳襲的幼稚園教育者にある。

春子は子供が好きであつた。學校を出てから、保姆にでもなつて見やうといふことになつた。別に資格免状もいらなかつた。私は何も知らないのですが、と懼る／＼言つたら、暫くたてば雜作もなく出来る、覚えられると言つて呉れた。實際、保姆なんて誰にでも出来ることと豫ねて思つて居た春子はそれで愈々安心した。幼稚園の先生は面白いものであつた。可愛いらしい子供達が先生々とやつて来る。幼児の方からも珍らしい新らしい此の若い先生は、すぐ幼稚園中の人氣者になつた。春子は宛然花園の中に居る様な心持がした。

胡蝶の國に住む様な心持がして、遊んで遊んで疲れはする。併し心に何の苦もなかつた。花園の花には泣くのがあつた。怒るのがあつた。すねるのがあつた。胡蝶がなか／＼惡戯をする。随分と不行儀をする。春子は一寸驚いた。然し若い先生の教育上の自信ほど強いものはない。此の自信の前には總てのことが易々と解決せられた。一々立派に處置せられた。時にはうまく行かないことがあつても、それは幼児の方の罪となつた。其の爲めに春子の自信が傷けられる様なことは決してなかつた。

かくて一年程経た。新しい先生がそう新しい方でもなくなつて来た。大分幼稚園教育の経験が積んだものゝように人からも見られ出した。自分でも亦そう思ひたかつた。處が不思議であつた。甚だ奇妙であつた。花園にも、や、が、か、つて来た。胡蝶の國が夕暗に包まれて来た。自信の提灯が消えかゝつて来た。一々のことが危くなつて来た。小さなことが分らなくなつて来た。昨日まで平氣で歩いて居た處が懽しきで一ぱいになつて来た。その爲に一時は立ちすくむ様な思ひがした。併しそうもして居られなかつた。闇の中で幼児等が先生々と呼んで居る。躊躇して居る自分の背を推すように園長がいろいろの事を命ずる。どうしていゝのか分らなかつ

た。昨日まで面白い處であつた幼稚園は苦しい處に變つて仕舞つた。春子は之れではならぬと思つた。氣をとり直して立ち上つた。そうして先づ第一に自分の苦しさを先輩の同僚に打ちあけた。疑問の條々を擧げて教を乞はうとした。處が誰も満足を與へて呉れるものはなかつた。しかのみならず、先輩同僚の答へが少なからず若い春子を驚かした。即ち若い夏子は快活に笑つて「私そんな六づかしいことは知らないわ」と許り、まるで對手にならない。「それよりか、あなたの組の紅子さん、ほんとうに可愛い、子ね。今日もあの友染を着て來たでしょう。私可愛い、から會集の時あの子ばかり見て居たの」。春子は仕方ないから「そう」と言つて別れた。そして次に秋子さんに質問した。秋子さんはいつもの通りの陰氣な顔をして「あなた大變研究して居らつしやるのねえ、およしなさいよ、私なんかそんなこと考へたこともありません。つまらないんですもの、今日もねえ從順の徳のお話をしてやつたら、大勢あくびをするんですよ。私もねえ今日は氣分が悪くて進まないから、いゝ加減に話して居たんですけれどもねえ。それだつて御話を聞きながらあくびするなんて、いくら子供だつて餘りでしょう。だからねえ七人許り立たしてやりました。幼稚園なんてつくづくいやになつて仕舞つた」。春子は流石

に何とか言はうとした。しかし此の人のヒステリー性は豫て知つて居るから黙つてやめた。春子は誰れに尋ねても仕方がないと思つて、家に歸つて本を読んで見た。先づ學校で習つた教育の教科書を開けて見た。幼稚園は獨逸の國のフレーベルが始めたのだと書いてあつた。恩物といふものを用ふと書いてあつた。そして欄外に自分の鉛筆で毬だの、立體だの恩物の種類が記入してあつた。春子は失望してそのまゝ本箱の中に入れて仕舞つた。とう／＼春子は冬先生に質問をして見た。冬先生のお答へは簡單で明瞭であつた。「考へたつて分るものぢやありませんよ。私のする通りして居れば慣れますよ」。

この後春子の歴史は、時が経つといふ他に何の内容もないから略す。たゞ有り難いことには内容のない「時」が三年と過ぎ五年と過ぎて居る間に、春子はいつの間にか熟練なる保母になつた。上手な保母になつた。而して嘗て面白い處であつた幼稚園、次に苦しい處であつた幼稚園は今の春子には苦しい處でも、別段面白い處でもなくなつて、たゞ呑氣な處になつた。

疑問は解かれたのではない。たゞ其のまゝにいつの間やら忘れられて仕舞つて居たのであ

る。そして遂には始めから疑問の無いことの様になつて仕舞つて居るのである。即ち意味を知らない形式になつて仕舞つて居るのである。自ら意味を知らないことをさへ氣にしない様になつて仕舞つて居るのである。自ら保育方法が器械化せられて仕舞つたのである。之が今日の幼稚園教育不振の主因である。意味を知らず、これを考へない仕事に進歩のあらう筈はない。進歩は兎に角く生命のあらう筈がない。生命のない仕事に眞の成績のあらう筈がない。

此のまゝに形ばかりをどう整へた處で仕方がない。外の事情に基く擴張や、所謂改良や進歩があつた處で仕方がない。要はもう一度考へなほすにある。毎日して居る事を一つ一つに就いて、一つ残らず自分で考へなほして見るにある。何でもないと思つてして居る方法、何の氣も付かずに用ひて居る材料の一々を意味深く考へて見るにある。考へて解決がつくか否かは先づ第二の問題として、何にしろ、先づ考へて見るにある。換言すれば疑を起して見るにある。而して、疑を堅固に持ち續けるにある。これが今日の幼稚園教育刷新の第一着手である。幼稚園教育は簡單なことだと言はれて居る。局外者がそう見做す許りでなく當事者がそう思つて居る。しかし事實果してそうであらうか。いゝ加減に淺く過して置けば何でも簡單であ

る。綿密に深く究むれば何事でも簡單でない。實際、疑へば分らないこと許りである。

考へれば次へ／＼と疑が出る、それを疑ひもせず考へもせず、自分のして居る傳統的、器械的容易さのみ安んじて居るのは、夢に千里を近しと見るの氣樂さである。

疑へ疑へ、考へよ考へよ。そこに今日の幼稚園教育が始めて生きて動き出す。正直に大膽に分らないことは何處までも自分で考へよ。即ち器械化せられた今日の幼稚園教育を、一旦疑つて見よ。そこに始めて生命ある幼稚園教育が生れて来る。即ち今日の幼稚園教育の振作に第一着に重要なものは、解決でなくて疑問である。傳統的幼稚園教育法を、吾れ人共に、あらためて考へなほして見ることにしよう。

斯くてまた暮れゆく

根本考察が足りない。根本考察が足りないから、問題がいつまでも枝葉の處で動いて居る。而して、可なり色々なことが考へられ、試みられ、部分的に究明せられるに拘はらず、究極の決定は何時までも其のまゝに残されて居る。——我國の幼稚園教育界は、こんな風にして一年々過ぎて居るのではあるまいか。時の経過は何程かづゝの進歩を積み上げてゆくには相違ない。しかしその進歩は、餘りに氣まぐれな、無秩序な、斷片的な集積に過ぎないものであつて、そこに何等の系統的組織的進歩といふものを見ない。思へば餘りに非學問的なことである。思ひつきは時には非常に賢明なる眞理の發見者である。しかし又、非常に危険なる誘惑である。思ひつきは偶然の力で吾々をその一點に惹きつける。それだけに、全局の關係を忘れさせ、前後の關係を失はせる。それはそれだ。しかし、それは全體の中のそれだ。據のある基礎の上に位置すべきそれではない。思ひつきは此の明白な事實を没却させる程に吾々の心を部分的に興奮させる。——我國の幼稚園教育界に、またしても此の思ひつきの多いことである。

意味の分らない模倣や雷同や。同じく意味のない反對や批難や。こんなことの繰返へしの中に我國の幼稚園教育界は、餘りに無意味に疲れて居る。風に吹きまはされて、ぐらぐらと、東西南北を廻りつかれて居るのでなければ、たゞ無意味に風に從つて疲れて居る結果は、つまりどつちもくだらないことに倦き／＼して仕舞はざるを得まい。意味のない處に厭倦がある。根のない處に枯死がある。

「分らない！分らない？」我國の幼稚園界は餘りに平氣に、口癖の様に「分らない」を繰りかへして居る。而して、一年たつても、三年たつても、五年たつても、同じ「分らない」に立ち止まつて居る。中には、何が如何に分らないかを知らずに、たゞ「分らない」で居る悲しめる樂天家もある。それで何時になつて分つて來るであらうか。つまりは、「分らない」が、益々平氣になる許りかも知れない。分つて居るといふ。その多數は、「此頃疑ひが無くなつた」人である。或は、小さい枝葉の一局部に安住佇立して、そこに、幼稚園教育問題の全部を懸け、又自分の全部を懸けて居る人であつたりする。之れも一つの悟りの開き方かは知らぬ。しかし幼

稚園教育を根本的に考へて居る人ではない。

吾人は、年の暮毎に、餘りに同じ處をぐる／＼廻りして居る我國幼稚園教育界に、物倦い様な心持ちがする。又餘りに齒がゆい様の心持ちもする。――

敢て問ふ、我國幼稚園教育の問題は、年毎に、どれだけの大きさを加へて來れるや。どれだけの深さを増し來れるや。換言すれば、問題それ自身がどれだけの進展をなし來れるや。殊に此の大正五年に於て。

吾人はたゞ將來の希望だけに力を鼓して居る。

それで現在の物倦さと、齒がゆさを忘れやうとして居る。それで我國幼稚園教育界の、現在の張り合ひなき如き淺さと輕さとを忍んで居る。――

大正五年の暮れゆく今日、我國幼稚園教育に就て吾人の最も正直に感ずる處は斯ういふ感じである。

機嫌のよしあし

毎日のことである。機嫌のよしあしは免れない或は身體の具合にも變りがある。天氣の加減もある。昨日一昨日の疲勞のぬけぬけこともある。家のこと、友のこと、身のことにつけて、何かと屈托も折々はある。始終にこ／＼と上機嫌で居るといふことは我々凡人には中々六づかしい。機嫌の悪い時は事々ものうく、おつくうになる。常には左程にも思はぬことが、うるさくもなればいら／＼と氣にも障る、まして心に心配ごとでもあるといふ時には、人の心配も知らないでと、ついぢれつたい氣にもなる。誰れであつたか讀み人は忘れたが、かういふ歌をどこかで見ることがある。

我が胸のけふの憂ひも知らずして

袖にまつはる子供達かな

お母様にさへ時には斯ういふ感じがあるといふ。姉さんにもあるといふ。二十人三十人と多勢の幼兒をあづかる若い身には、あとでは濟まないと思ひながらも、つい起り易い感じであ

る。保姆諸君とて幼稚園のみに生きて居る人ではない。親もあり弟妹もあり戀もあらう身の、小さい胸につゝみ切れぬ物案じは誰れにもあることである。教職の貴さをよく知ればこそ抑へては居れ、強ひて忘れやうとこそ努めて居れ、秋を知る遊園の立木の蔭にふと憶ひ出で、そつと涙をふく様な事もある。今朝は不思議に折れては折れる青色「チヨーク」に病人の容態が氣にかゝり出す様の事もある。けれども笑まねばならぬのである。聲張りあげて唱はねばならぬのである。右から左から集る幼児に一年三百六十五日同じ機嫌で居なければならぬのである。

こゝろ内にあれば色そとにあらはる、之れは是非ない當然であらう。包める程の思ひならば誰れとて外には漏さぬ筈である。それを包めといふは素より無理と知つての注文である。切ない思ひの努力である。然しその無理も切なさも幼児の爲めといふことを思へば、強ち出来ぬ我まんでもあるまい。否。出来ても出来ぬでも是非しなければならぬ我まんである。つゝむに餘る思ひは、泣くには泣くべき處がある。訴へるには訴へる處がある。何も知ぬ幼児の明るい心に、そのうす暗い一翳をだに投じてはならぬ。昨日に同じ温かさを求めて來る幼児に、一滴の冷さをだに點じてはならぬ。心悲しくば尙更幼児を抱きしめてやれ。心まかせにすぎない言葉

使をしたり味ない佛頂面を見せたりしては、それはもう我まゝといはれなければならぬ。たしなみのない、つゝしみのない氣まゝ氣隨といはなければならぬ。前の歌を目に描いて見て、その美しい趣はどこにあるのであらうか。心には聞えながら、いつもと變らぬにこやかさを見せる切ない心のいちらしさにあるのではないか。己れに克つた強い優しさにあるのではないか。そこに初めて泌々とした詩の味が成るのである。假にもうるさいと袖を拂ふ、すげない素振りの一つだにあつたとしたら、そのうるさいは察しこそすれ、美しい詩はこはれて仕舞ふ。

併し、之れはまだ修養の途中である。もう一段の修養を積んだ人には、此の一々の切なさが無くなるのであるらしい。その場々々に心の闘をして努めて己れに克つ要もなく、それが心の自然になるものらしい。心の内にはどの様の苦勞があつても、足らたび幼稚園の門に入り、耳に幼児の聲を聞けば、そのまゝ活き／＼と心をおこすものらしい。そして如何なる時と雖も、不斷の愉色を顔に堪へて居られるものであるらしい。此の聖に近い常性を得度いのは、切々と心を練る我等の修養の目あてである。今はたゞ其の途中、せめて我まゝからの不機嫌をつゝしみ度い。切角可愛い子供の傍に居て、心で子供を拒ける様のことを警め度い。

途 上

はぐくみ

不意に子供の泣き聲がしたので、読みかけて居た雑誌から目を移して車内を見まはすと、その泣き聲は、むかふの隅に居る若いおかみさんの背の子から起つたのであつた。おかみさんは手を後ろへまはして頻りに揺つて見るけれども、どうも泣きやまない、愈々はげしく泣き出すばかりである。おかみさんはどうも子供を抱きおろして膝の上へかゝへて、いろ／＼あやしでも中々泣きがとまらない。若いおつかさんは殆んどもてあましきつて閉口して居る。

私の一人おいて隣に、まだ若い尼さんが居た。さつきから優しい顔で此のさまを見つめて居たが、つと立つて彼のおかみさんの傍へ行つた。おう／＼と軽くその子どもの頭を撫でながら、袂から小さい菓子を取り出して與へた。此の尼さんは子供に對して特別のやさしい手練をもつて居るのか、子供は直ぐに泣きをやめた。

おかみさんは喜んで子供と二人分の禮をのべた。尼さんはその隣へ腰をおろして、尙ほ子ども

もをあやしなから話し出した。

「私は子ども衆が大すきで、いつでも外へ出ます時には、きつと袂へお菓子をに入れてあるきます。ほんとに子ども衆位いゝものはございませんねえ、私は衣の身で生みの子は御座いませんが、我家には可愛いゝのが三人待つておいでゝす。ぼつちやんなんかは、いゝおつかさんがおありで結構で御座いますかねえ……」

電車はとまつた。丁度乗りかへなければならんで私はそこで降りた。

私の大すきな名畫の一つに、ミレーの描いた「はぐくみ」と題する畫がある。田舎家の裏口に、子供が三人腰をかけて居て、一人の尼さんが匙で何か盛つては食べさせて居る。左の子はもう食べて終つて満足の顔をして居る。中の子は今しも匙を出された處で、小さい口をあけて、丁度母鳥を迎へた巢の中の仔鳥の様な口つきをして居る。一番右の子は、自分の番を待ち兼ねるやうに自分も識らず／＼口をあけて居る。春の日か秋の日か、かゞんで居る尼さんの背を照して、穏やかな平和が畫一面に充ちて居る。

私は其の日歸つて直ぐ此の畫をとり出して見た。あの時の話の様子から見ると、あの尼さんは三人の孤兒をそだて、居るのではあるまいか。若い尼さんと三人の孤兒。私は今でもあの尼さんの處へ此の畫を持つて行つて上げて來たい氣がする。

お父さんの成功

十才ばかりの男の子、お父さんに手をひかれて公園を散歩して居たが、何か前の方に面白いものでもあつたとみえて、つか／＼と三四間さきへ獨りで進んだ。するとお父さんは笑ひながらつと身をかわして、道の傍の櫻の木の蔭へかくれて仕舞つた。子供は氣がついて後をふりかへつて見るとお父さんが居ない。大事なお父さんが居ない。可愛らしい眉のあたりに次第に不安の雲が深くなつて、あちこちと見まはすけれどお父さんが居ない。櫻の木の後ろではお父さんが可笑しさをこらへてコツ／＼と樹の幹をたゞいて聞かせるけれどもまだ分らない。子供はちよ／＼と駆け出しては探すけれど見つからない。不安の雲はそろ／＼と雨になりそうな恐れがある。こんどはお父さんの方でたまらなくなつたと見えて、持つて居たステッキの先きへ中折帽子をのせて、櫻の樹の横へぬつと出した。

之れは上野の博物館の植込で見た快い一幕であるが、發見して喜ぶ子供と、發見されて喜ぶお父さんと、互に快く笑ひながら、前よりも堅く手を握つて暖い春の日の下を靜かにゆく姿を見て、私は一種の長閑な嬉しい感じがした。そして嘗てある處で、一人の子守娘が、之れと全く同じ筋の狂言を演じて、發見させ方の適當な加減を誤つた爲に、とう／＼四才ばかりのお嬢さんを泣き出させて仕舞つた光景を思ひ出して、その一寸した心ゆきの足りない處から起つた悲劇に對して、此の快い明るい喜劇を「お父さんの成功」と題して見た。

子供ずきの博士

夏の汽車に疲れきつて、若いお父さんも眠りこんで居る。子供は獨で窓の外など見て居たが、之れも倦きて腰かけの上へ横になつて眠つて仕舞つた。丁度隣の紳士の革靴の上へ小さい足をのせて、頭は下になつて居る。紳士は笑つて見て居たが、読みかけの新聞を幾枚も折り重ねて、丁度子供用の枕位の高さにして、その子の頭の下へそつと入れてやつた。子供は愈々いゝ心持になつて眠り込んだ。その小さい足をだん／＼踏みのばして無遠慮に紳士の顔の近くへやる。その革靴へ右肘をつけて「エンシエント、グリース」？を讀んで居らるゝ紳士の眼鏡へ、

そのよごれたきたない足の裏が、汽車の動揺につれて、將に觸れやうとさへする。紳士はいやな顔もしないで、時にその子の寝顔を見てはほゝえみながら、鉛筆を持つては熱心に本へ書き入れをして居られる。

私は丁度そのま向ふに居て、ロッキーの「子供の心」を読みかけて居たが、この紳士が誰れといふことも知らずに無遠慮に汚い足を鼻の前につきつけて居る子供と、それを平気で寧ろ愉快そうに讀書して居らるゝ此の紳士との對照が面白くて、沼津から幾驛の間、とう／＼私にロッキーをよませなかつた。

その紳士といふは農學博士法學博士で子供すきの方である。

紙風船(一)

代々木の春。

板扉の上には覆ひかぶさる様に庭内の並木の櫻が咲き盛つて居る。ぶら／＼と其の下へ來ると幅一尺ばかりにあってある扉の裾から大きな紙風船がころ／＼と轉げ出た。それが丁度足もとであつたのでおやつと思つて立ち止ると、同時に扉の中で可愛らしい子供の笑ひ聲が聞えた

「あら、何處へ行つたんでせう」

といふ聲も聞える。空氣草履か何かで二三人芝生の上を馳けてゆくりしい音も聞える。私もなんだか面白くなつて暫く立つたまゝ、赤と黄と青とで張り分けた其の紙風船を見て居た。風船は路傍の草にかゝつて香氣な顔をして居る。

すると急に扉つゞきの向ふから再び高い笑ひ聲と共に「居てよ／＼」といふ可愛らしい聲が聞へた。見ると大きな御門の前に小さな嬢ちゃんの笑みこぼれた顔が三つ並んでこつちを見て居る。

あの時の私の顔もどんなに笑みこぼれて居たらう。櫻も可笑しさに堪えられぬ様にはら／＼と散りかゝる。

紙風船(二)

植物園傍の坂を小さな紙風船がころ／＼と轉がつて居る。坂の上からはお母さんに手をひかれた四歳位の子供が、あら／＼と言つて手をふつて騒いで居る。左腕に風呂敷包みを抱へたお母さんは其の子の手をひきながら追つかけて來るが風船の方が餘程早い。櫻には遅い頃の例

の風の強い日であつた。

坂の下からは先づ葉巻をくわへた老神士が來た。笑ひながらステツキで風船を抑へやうとしたが、風船がころ／＼と抜けてゆくので其のまゝ坂を昇つて仕舞つた。次には女學校の生徒が二人連れで來た。風が強いので二人とも袴の裾を抑へる様にして歩いて居る。風船が丁度二人の間へころけて來たので、小さな聲で「おほ……」と笑つて行き過ぎて仕舞つた。其の次には空車をひいた小僧が來た。此の小僧さんだけは坂の下から風船に目をつけて、無邪氣な笑ひ顔をして坂路を右へ左へ風船を追つかけて居る。それが車をひきながらだから中々六づかしい。風船はまた下へ抜けた。其の次は私の番になつた。そして子供の泣きをとめてやつたあの時の功一級は私のものであつた。

フレイベル傳雜感

一
今月はフレイベル先生誕生の月に當る。楣間の肖像に對して、そこはかとなく、いろ／＼のことを思ふ。

世に興味の最も深きものは、恐らくは偉人の生涯である。素より或る意味に於てすれば、必ずしも世に所謂偉人に限らず。すべての人の生涯が皆意味の淺からぬものであるけれども、その思想、その事業に於て既に吾人の興味を促すもの多大なる偉人の生涯に於ては、その偉大なる思想と事業との醸造場として、そこに汲めども汲めども盡き難き興味がある。蓋し、すべての偉大なる事業と思想とは、その生涯と離し考ふべからざる關係を有するものであつて、たゞ抽象したる一個の思想、抜き書きしたる一冊の事業記録として觀察しては、到底其の眞想を捕捉することは出來ない。思想と事業とは假令ば生涯の布地の上に刺繡せられたる模様にも似たものである。その錦糸絹糸の色彩も地布あつての花模様である。

しかも世には、其の生涯と思想事業との錯綜の密度が比較的粗なる場合も無いではない。前篇の其の傳記と後篇の其の思想とを、別々に取り離し讀むも、その各々を理解するに餘り難からぬものもある。たゞフレイベルに於ては、兩者の錯綜最も緻密なるものがある。是に於て、先づ彼の事業を聞き、彼の思想を學び、後その生涯を研究するに及んで、其の事業と思想とに對する理解の初めて明瞭に且つ切實に徹底するを覺える。此の意味に於てフレイベル傳は、其の師ベスタロツチの傳と相並んで、教育傳記中、恐らく最も多趣多味なるもの、雙璧である。

二

フレイベルがツーリンギヤの森林地方の生れなることが、既に意味深いことである。彼の思想は岩石巍峨たる高山地帯の態を帯ぶるものではない。また天空快潤たゞ明るく打ち開けたる海岸地方の香を帯ぶるものでもない。實に森林的である。大なる森林地方のすべての風物と等しく、深玄にして神秘的なる趣を具へ、且つ清爽の中に多小の湿度を含んで居るのが彼の世界觀人生觀である。従つてその教育説も亦、實際的といふよりも哲學的に、科學的といふよりも詩的である。此兩面はフレイベルの教育説を研究するもの、看過すべからざる點である。

次にフレイベルの「發達」に關する理解と興趣とも亦、森林に生れて森林に生長した彼の幼時の賜である。フレイベルの教育上の新學説も新貢獻も一つにその根底が「發達」の現象に對する彼の領會に基づくことは、苟くも幼稚園教育の本質に就て多小の知識を有するもの、皆熟知せる處である。若しフレイベルは如何なる人であつたかといふ問に對して、最も直截に最適切なる答を與へんとすれば、フレイベルは「發達」の眞意義に最強く憧憬した人であると言つてもよい位である。而してフレイベルの此の「發達」に對する理解が植物發達より導かれたことも人の知る處である。——此の天才が植物の萌芽を見ること稀なる都會兒童でなかつたことは、人類の非常なる幸であつた。

三

フレイベルが生後九ヶ月にして母に逝かれ、四歳までいぢらしい片親兒であつたこと、四歳の時よそから來られた第二の母との親愛が長く續かないで、こんな幼い年頃から淋しい孤獨の生活に慣れざるを得なかつたことは、今此の肖像に對して、追憶するだにも氣の毒なことである。しかも此の事實が亦フレイベルの思想の上に二つの影響を及ぼして居る。

その一つは、幼児期の教育の最大切なること、殊に幼きものに幸なる喜びの侶を與へなければならぬといふことを、己が幼時にひきくらべて殊に切實に泌々とフレイベルに感じさせたことである。此の點からは、彼の自身の不幸が後の幼児の幸福になつたとも言へよう。

その二つは幼時からの孤獨習慣が、其の一生の性となつて、冥想沈思の癖が聊か度を過ぎるまでになつたことである。フレイベルの教育説が甚だ哲學的なることは、前にも述べたが、彼の學説の中の、惜むべき理論詰めの缺點と及び象徴の弊とは、彼れ自らがその自傳の中に告白せる通り、幼時の孤獨癖が大に與つて影響して居るのである。牧師として人の子を教ふるに多忙なりし彼の父は何故もつとその家庭に於て、我が子の侶となつて呉れなかつたか。若しまた變更し得べき運命ならば、彼の生母は何故もつと長く健康で居て呉れなかつたか。將また、彼の第二の母は何故その初めの慈愛を維持してゐて呉れなかつたか、要するに幼きフレイベルが、其の子供さを自らもつと充分に味ひ樂しみ得なかつたことは、彼の爲には勿論、後世の爲に少なからぬ損害であつたのである。

フレイベルは子供を愛し、またよく之を理解して居た。少くも兒童研究の必要と趣味との普

及がまだ今日の如くでなかつた一世紀前に於て、稀有なる兒童の友であつたのである。しかも、子供を子供として教育せよといふ彼れの天才的唱道に拘はらず、時に自ら非兒童的なる矛盾に陥ることのあつた彼の弊は、疾くより淋しき孤兒となつたフレイベルの冥想癖によるものであつた。總ての事に善き意味を發見せんことを希ふ吾々も亦、此の一事にはたゞ遺憾を禁じ難いのである。しかも彼の思想と生涯との錯綜を考究せんとするものには、輕視することの出來ない一資料である。

四

十五歳の時、始めて従事した職業が森林内の林業事務であつたこと、引つゞいて種々に轉じた職業が多く戸外的業務であつたことは、フレイベルの自然詩人的特色を深くするに大關係のあつたことである。

フレイベルは、人間の趣味傾向の最も強く教養せられるべき少年期青年期を通じて、將來教育者となるやうに教えられたことは一度もなかつたのである。彼の學んだことは植物學であつた。鑛物學であつた。土地測量の術であつた。その相手とする處は樹木であつた。鑛石であつ

た。而して土地であつた。彼が教育者になるであらうといふことは運命の外は彼自らさへも思ひ見もせぬ處であつたのである。しかも運命は誰れよりも最も賢き最も遠き處をフレイベルの爲に藏して居たのである。

フレイベルの教育説が、コメニウス以來の教育上の自然派の成熟大成せるものであつて、之れが歐洲教育思潮の當然の流域なりしことは、教育史を讀むもの、皆知る處である。即ち、フレイベルの教育説の根底、輪割兩つながらに著しくあらはれて居る自然派的特色は、自然に従へ、自然を學べ、而して自然を與へよといふ當時の教育思潮の感化の與つて力あることも勿論否むべきでない。しかも運命はフレイベルをして此の教育觀を大成せしむる爲に、一見無益なりしが如き二十三年の準備を與へたのである。

フレイベルの目は自然を見ることに慣らされたのである。其の手は自然を培養することを教へられたのである。幼稚園、幼稚園、實に幼稚園は此の目と此の手で開拓せられたのである。函數學で函數式を解く様に、人の運命の函數式でX價を自由に變じて其のYを見ることが出来るならば、人はフレイベルの生涯の初めの二十三年間をXとして之れを色々に變じて見るがよ

い。Yを幼稚園たらしむる爲に、之れ以上適當なXがあるであらうか。幼兒は草の芽に喩ふべし、教育者は其の培養者に喩ふべし。その教育の場所は之れを園と呼ぶべしといふガルテン(園)主義が、世界の教育中恐らく最よく自然を理解し最深く自然を愛したフレイベルによつて初めて唱導せられたのは、實に謂はれある事實であつたのである。

五

青年フレイベルは、其の生涯の方向に就て甚だしく煩悶した。煩悶煩悶、迷ふに疲れた煩悶者の足は、建築師にでもならうかといふあてどのないあてどを以て、フランクフルトへ到着したのである。

吾人はフレイベル傳を思ふて此の一節に至る毎に人の運命の危きが如くにして定かに、定かなるべきも豫め期し難きを感じざるを得ないのである。蓋し此の時を中心とした前後に於けるフレイベル傳の一節は、曲折多き彼れの生涯中、殊に甚だしく觀客の胸の鼓動をして高からしむる一齣をなすものである。

しかも茲には之を詳説する暇がない。兎に角くフレイベルは建築師とならずして教師となつ

たのである。而して迷へる者は茲に自己の立脚地を見出し得たのである。煩悶者は心の安住を得たのである。「魚は水を得、鳥は空を得た」のである。

而してフランクフルトに於けるフレイベルの生涯の此の一轉化の原因を、一つに當時フレイベルに教師たることを推奨したグルーナの忠告にのみ歸するは、未だその真相を得ないものである。

此の時二十三才のフレイベルは、すべての眞摯なる青年の一度は経験すべき内心の不安をもつて居た。即ちフレイベルの當時の煩悶は、たゞに定職の無いといふ、現實的煩悶ではなくて、如何なる事業が人の一生として眞に努力の價値あることであらうかといふ、内面的煩悶であつたのである。フレイベルの此の不安に對して、林業も土地測量も満足を得なかつたのである。

フランクフルトへ着く前の旅中のことであつた。同行の友人の寫眞帳に、フレイベルは斯ういふ句を書きつけて居る。

「君は人類にバンを與へよ、余は人類に彼等自身を與へんかな」

今や青年フレイベルの心は實業に其の眞満足を得ずして精神的教化の事業に傾きつゝあつたのである。フランクフルトへ着いた後、建築師となるべき就職口を求めて居る間にも屢々次のようなことを思つた。

「自分は建築業として、果して人世に價値ある仕事が出来らうか、自分の一生を人類の教化と向上の爲に使ふことが出来るだらうか」

之れ丈けの事實から見ても、當時のフレイベルの心中は大抵察することが出来る。斯ういふ心を持つて居る魚には教育が水である筈である。斯ういふ心を持つて居る鳥には教育が空氣である筈である。フレイベルは自分の索むる處を自ら識らなかつたのである。しかも自分の索むる處を自ら得たのである。グルーナはたゞ魚に水を與へ鳥に空氣を與へたに過ぎない。

フレイベルが斯くして突然（外見）教育事業に入つたことを人々は偶然の出來事だと云ふ。しかもフレイベルには常に生涯が事業である。二十三才の夏の始め、フランクフルトに始めて芽を出したフレイベルの教育事業は、豫め未知無名の植物として、ツリーリングヤの森の中に必要なる地下成育を遂げて居たのである。

ペスタロッチから受けたフレイベルの思想上の感化に就ては、特に今更言ふに及ばない。又いろ／＼の場所、いろ／＼の事情の下に教育者としての實習を重ねて行つた教師フレイベルの自修發達も更めて説くを要しない。グリースハイム、カイルハウ、ブランケンブルヒ、窮乏、不幸、誤解、迫害、一々迫る要もあるまい。之等は皆前半生の間に緒を作つた思想と事業との繩が段々に太くなりつゝ色々に糾はれたに外ならぬのである。

たゞもう一つ、吾人に考察の興味を促すものは、フレイベルの從軍である。

如何なる意味に考へても此の一年間は消極の一年間であつた。劍が血を求むる此の一年間が幼児の父となるべきフレイベルに何等積極的の効果を與へ得る筈はなかつたのである。しかしフレイベルの生涯は此の無意味に見へる一節に於ても彼の事業の爲に多大の意味を有するものとなつたのである。即ちフレイベルは此の從軍中にランゲタールを得た。パウエルを得た。ミツテンドルフも亦此の時に得たのである。之等の人々がフレイベルの教育事業に如何に重大なる好關係を有するかは人の皆知る處である。殊にミツテンドルフの如きに至つてはフレイベ

ルの事業の半身と言つてもよい位である。フレイベルは戦争に出て勳章を得なかつたが、事業の伴侶を得た。普魯西亞軍に屬したフレイベルはその生涯と事業との錯綜の運命に於ては偉大なる勝利者であつたのである。

併しながら、フレイベルの事業は只其の生涯によりてつくり上げられたのみものでは勿論ない。フレイベルは其の生涯を有する前に、フレイベルとして生れて居たのである。教育上の天才者としてのフレイベルの偉大、および其の波瀾多き生涯、殊にも後半生の障礙多き苦闘を貫き通した自信の人としてのフレイベルの雄偉、之れこそ彼の事業の脊骨であつたのである。

今日に於てフレイベルを見れば、教育史上の大成功者である。しかも其の當時に於て彼を見たものは恐らく誰れも成功者を以て視なかつたであらう。此の不成功の生涯をして、實は眞の成功の生涯であらしめたものは、一つにその天才と自信とである。見よ彼の肖像は其の眉宇の間に之れを證明して居るのである。

リーベンスタインの片山里に、村人から「馬鹿爺さん」と嘲り呼ばれながら子供達と遊んで

居た、天才と自信とを藏する此の大愚こそ、フレイベルが眞に幼児教育上の第一人たることを得た意味深き教訓なのである。而して之れは経験からは得られない心である。たゞ一つに心である。其の生涯の總和を、衷心より幼児のために獻げることの出来た其の心である。

ツィリンギヤに生れたものは澤山ある。少年期青年期を林野の業務に過したものは澤山ある。自然に對して科學的理解及び詩的感興を養ひ得たものも澤山ある。斯くの如くして、フレイベルと同じ生涯の形が必ずしもフレイベルを生むものではない。之れに反して、彼れの全生涯の経過をして全然別途ならしむるも、フレイベルは恐らく矢張りフレイベルであつたであらう。たゞ史上の事實としてのフレイベルの思想と事業は、上述の如くに周到に其の生涯から形づくられて居るのである。

フレイベルと婦人

今日はフレイベル先生の誕生の紀念日に際しまして、先生の裏になり側になり、其の事業を助け其の主義を盛ならしめた婦人達のことを、記憶に呼び起して見度いと思ふのであります。併し日本の婦人に就ては、即ち茲に御集りの方々がそれなのでありますから、こゝでは西洋に於けるさういふ婦人に就てのみ申上げることいたします。

ウオルヘルミナ

フレイベルの事業を知る上に於ては先づ第一に記憶せなければならぬ婦人は、先生の初めの夫人即ちウキルヘルミナであります。先刻の御話にも御座いましたが、フレイベルは極めて不遇な、複雑な、境遇を経た人でありまして、世間の幸といふやうな面白味は殆んど味ふ間もなかつた位の人であります。其の不遇な先生を助け先生を勵まし、そして幼児教育の事業を盛んならしめた人は、即ちこの第一の夫人であります。初め先生が、幼児教育に携はるゝ前にカイルハウといふ處で、若干の子供を預つて教育して居られた時でありました。此のウキルヘルミ

ナに手紙を書いて、どうか自分の處へ来て、私の事業を助けて半生の伴侶となつて呉れないかといふことを申し送りました。處が、ウキルヘルミナは直ぐに承諾をしましたので遂に結婚の運びに至つたのであります。もと／＼先生はウキルヘルミナとは面識の間柄でありまして、先生が伯林の博物館に居た頃學問上の談話から知己になられたのであります。

ウキルヘルミナは伯林に於ける豪家の御嬢様で、どつちかといへば、華やかな生活を送つて居た人でありました。これに反してフレイベルは其の外貌と云ひ生活と云ひ、極めて粗末な、寧ろ變り者と云はるゝ位の人でありましたので、ウキルヘルミナの友人達は其結婚をとめた位でありました。實際今日でこそフレイベルといへば世界の偉人でありますが、當時では一介の貧しい理想家に過ぎないのであります。富豪の御嬢様が、さういふ人の處へ嫁しづくといふことは容易のことではなかつたのであります。然しウキルヘルミナは嘗て博物館で初めてフレイベルに逢つた時から、先生を理解して居りましたので、それ等の障害を排して進んで先生の許に來たのであります。この人が先生の夫人となつたことは、フレイベルの爲に非常に大きな助けになつてゐるので、寧ろ内助以上の助を與へてゐるといふことを忘れてはならない

のです。單に精神上の慰安といふ點ばかりではなく財政の上にも非常に力を添へて居るのであります。夫人が先生の許へ來ました頃は、未だフレイベルの事業は誠に微々たるもので、殊に財政上に於いては極めて困難をして居たので、ウキルヘルミナの持つて來ました財産は盡く其の事業の爲に費されてゐるのであります。

先刻の御話にもフレイベルとベスタロツチとの類似點を擧げて比較された有益なお話がありました。共々其の事業の初めに夫人の財産を使ひへらして仕舞つたといふ點もよく似て居るのであります。妻君の財産を使ひ込むのが教育上の偉人になる法でもありますまいが、此の二人は此の可笑しな點でもよく似て居ます。

殊にウキルヘルミナは、極めてうるはしい感情を持つた方でありましたので、フレイベルは始終其の慰安を受けて居たのであります。

私はウキルヘルミナから先生に送つた手紙を見たことがありますが、實に感情の濃やかな、愛情に満ち／＼た筆で、家庭の有様や、周圍の景色などを叙して、夫の心を慰めた立派な手紙であると思ひました。

然し悲しいことには、この夫人は齡五十八才でなくなつたのであります。丁度この時に、先生はドレスデン巡回講演に行つて居られた留守中であつたのです。夫人の病勢が急に革まつて來ましたので、人々は先生の處へ急報しやうとしたけれども、我が夫は今其の事業の爲めに出張して居られるのである。其の神聖なる事業を私一個のことで少しでも妨害してならぬといふので、これを拒まれました。そして先生が、さういふ不幸があらうとも知らず、歸つて來られました時は、もう、起ち難き重患の人となつて居たのであります。

ルキス

第二に擧げなければならぬ婦人は、フレイベルの第二の夫人、ルキスであります。先生は第一の夫人を失はれ、殆んど病氣にもなられた位に落膽されましたが、併し自分の事業の大なることを考へて、自ら元氣を快復され、十二年の後に此のルキスと第二の結婚をせられたのであります。當時先生は六十九歳ルキスは三十六歳、世に珍らしい晩婚といはれて居ります。ルキスは其の前からフレイベルの主義崇拝者の一人でありまして、一方からいへば先生の弟子であつたのであります。始め此の結婚にはカイルハウの人々は多く餘り賛成でありませんでした。

が、ミツテンドルフは大いに賛成して遂に話が運んだのでした。果して、フレイベルは此の結婚によつて寂しい晩年の慰藉者を得たのみならず、先生の死後其の事業の維持者として最も適任者を得られた譯でありました。即ち先生死後のフレイベル主義教育は主にミツテンドルフと此のルキスとによつて繼承せられたのであります。

ビュローロト夫人

第三に是非記憶せなければならぬ人は、マレンホルツ・フォン・ビュローロト伯爵夫人であります。この婦人もまたフレイベルの事業に極めて大きな力を與へて居るのであります。フレイベルがリーベンスタインに學校を建て、子供と一緒に森で遊んで居ました時に、丁度其時此地に湯治に來て居た伯爵夫人が、先生と相識つたのであります。即ち先生にいろいろと教育上の質問を發したのであります。其の時夫人は先生に對して、今日の吾々の教育程詰らぬものはない、人間の天性を破つた、寧ろ人を害ふものである。貴下もさういふ教育に携はつて居らるゝですかと。フレイベルは、之れに對しいろ／＼自己の理想を説かれましたので、夫人は非常に先生を尊敬する様になり、それからは様々の懇な好誼を與へて居たのであります。殊に

先生の死後、其の事業を英吉利其の他の國々へ傳布せしめたことは、主として夫人の働きと云つてよい位であります。又其の他にもいろ／＼澤山の仕事がこの夫人によつて仕遂げられて居るのであります。プロシアの政府から禁令されてゐたフレイベルの幼稚園主義が、十五年後に至つて、禁を解かれたといふことも、また一つに夫人の力によるのです。又、吾々がフレイベルを研究しますときに、最も大切な資料として見ることの出来る、「フレイベル追想録」も此の夫人の著書であります。序ながら此書を英語に譯されたのも有名なホレイスマン氏の夫人で矢張り婦人の力によつて居ります。

上に述べた人々は皆古い人ではありますが、新しい人の中にも學ぐべき婦人が決して尠くはありません。

ヘンリツテ・シュラーデルと

エロノオア・ヘールウアルト

第四に新しい人で、ヘンリツテ・シュウラーデルと云ふ婦人があります。この人はフレイベル先生の又姪にあたる人です。ベルリンでフレイベル・ベニタロツチ・ハウスを建て、其

の長をして居た人です。昨年になくなりましたがフレイベルの主義に妙なからぬ効果をそへて居る人です。

これと似た人で、エローノア・ヘールウアルトといふ婦人があります。フレイベルに關した著述もあり、殊にマザー、ブレイに就て、有益なものを書いて居ります。惜しいかな昨年十月になくなりました。獨逸のアイゼナツハの人で、十七歳の娘時代に、カイルハウに居らるゝ伯母の處へ行きましたとき、ふと新聞によつてフレイベルの事業を知り、非常に感激をして、カイルハウの保姆傳習所へ入らうと決心しました。先づ願を出しましたが、丁度其の時は欠員がなかつたので許されず、再び願つても矢張り許されませんでしたけれども、婦人はどうして最初の希望おさへ難くして、四度までも願を出したのであります。斯くして漸く、婦人の爲めに居室を譲る人があつた爲めに其の傳習所へ入ることが出来たのであります。その頃のカイルハウの保姆傳習所は思ひ切つた教育をして居ましたもので、朝早く起きて、遠い道を歩いてくるとか、バタを付けないパンや砂糖の入らないコーヒーを用ゐるとかいふやうな質素なものであります。バタの付かないパンでも中々たべにくいものですが、まして砂糖の入らな

いコーヒーはずの分脈やなものであらうと思はれますのに、良家に人となつた婦人は、これにも尙打ち勝つて、其の研究を了へ、終になくなるゝまで幼児教育の世界的大立者とされて居た婦人であります。フレーベルの書簡や、遺物を集めて小さなフレーベル博物館を建てたのもこの婦人の力であります。

ブロー女史を憶ふにつけて

ブロー女史が先々月の末長逝せられたと云ふ悲しい報知は、私にいろ／＼のことを思はせた。私はブロー女史とは面識も手紙の上の交際もないと其の著書を通じて知つて居るだけである。正直に云へば、生前の女史に對しては、亞米利加に於ける純正フレーベル主義派の代表者として、主として批評的に見て居たのであつた。數年前のフレーベル會夏期講習會の時にも、私の立場とは多少反對の側に居る人の一人として女史の名を擧げたに過ぎなかつた。しかし、今や此の熱心なる幼児教育界の耆宿を失へるに當つて、私はたゞ學問的に批判的にのみ此の人を見て居るにたへなくなつた。そして従來漠然と私の心の中に漂つて居た女史に對する敬重の情が、今更の様に感ぜられて來た。私は、我が幼児教育の爲に、どんな少しの熱心でも持つて呉れる人に對して、感謝とか尊敬とかいふ情を持つ。況んや此の偉大なる斯界の貢獻者に對して、如何に多くの敬意を表すべきかを知らないのである。

殊に私の何となく感ずる處では、或は此の人が所謂純正フレイベル主義高唱者の最終の第一人者ではあるまいかななども思はれるのである。勿論、どこに隠れたる偉大な研究者が居るか分らない。又此の後とても、續々研究者は出るであらう。しかし、種々なる幼児教育論の表に立つて一方に雄として、此の派の所論を信念的に且つ學問的に高潮するの力と深みと博さとを有すること女史の如きは今の時勢が多く生みそうにもない。私は所謂純正フレイベル主義者の固執の中に賛成の表し得ない點をも持つのであるが、また濫にフレイベルの主義を無視して其の深い大きい貴重さを知らない徒輩にも與し得ないのである。此の意味に於て、私は、幼児教育の研究者として、どこまでもフレイベルの研究者である。而して眞の理解と眞の批判との態度を以て、私のフレイベル研究に、最も有益な伴侶となつて呉れたものは、少くも其の一つはブロー女史の著書であつたのである。若し面晤する機会があつたならば、此の人にこそ随分思ひ切つた手答へのある議論を闘はし得ると思つたのであつた。そしてフレイベル研究に益する所も多からうと思つて居たのであつた。私の狭い見聞では、幼稚園教育に關する研究書は、たゞ傳統的な註譯風なものか、然らずんば獨斷的な勝手放題のものか多い。結論や主張は兎に

角く、問題の取扱法が研究的に、即ち基礎の上に立つ批判を以てして居るものは極めて少ない。従つて人をして傾聴せしむるに足るものが極めて少ない。ブロー女史の態度は、此點に於て恐らく最も立派なるものであらう。殊に「幼稚園教育論叢」(Educational Issues in the Kinder garden)に於て、此の態度が美事に成功せられて居る。そして、批判的取扱ひをして居ながら、しかも、フレイベルの中心思想に向つて、常に深みのある、熱のある理解の態度を持せられて居る處に、私達はいろ／＼の事を學ぶのである。フレイベルは、其の最よき使徒を襲つたことを天にあつて惜しんで居るであらう。

二

ブロー女史の著書は、全體の調子が學究的である。「母への手紙」(Letters to the mother)の様な目的が極く通俗的なものに於ても、たゞ實用的といふよりは理論的である。主としてフレイベルの「母と子の遊戯」の解釋を説いた「象徵教育」(Symbolic Education)に於ては問題が問題だけに一層理論的になつてゐる。前述の「幼稚園教育論叢」は殊にそうである。又亞米利加の幼稚園協會から出版して居る幼稚園研究の報告「幼稚園」(The Kindergarten,

の中のブロー女史受持の報告でも他の委員の報告に比して、著しく理論的である。而して、元來が哲學的な要素の多いフレイベルの思想を理論的に解釋するとなれば、自然に哲學的な調子のもことになる。そこで、多少難解な傾向を生ずる。殊に幼児教育の問題と云へば、頭からたわいない事、浅いこと、軽いことに考へて居る人達には、恐ろしく六かしいものに思はれる。一體フレイベルの著書がさうである。何も特別難解な書物といふでなく（分り易い書物ではない）此位の難解さの本はいくらもあるのであるが、問題が幼児教育のことといふので、讀者が豫め氣樂な心持で読みかける爲に、まごつくこと甚しいのである。そして、もつと「大問題」ならば六かしいのも已むを得ないが、高が幼児教育の問題でこんな六かしいことは云はなくてもよからう、といった風な感を持つのである。併し、幼児教育の問題は、所謂「子供の事」だからとて、そんなたわいない事、浅いこと、軽いことではない。ブロー女史が、常に非常な大きな見地から幼児教育のことを考へて居ることは、そのこと自身大に教へられることである。ブロー女史を懷ふて此點に至る時に、私の心の中に、我國幼稚園教育界の現状が反對聯合の

法制を以て、あり／＼と浮んで來るのである。すなはち、我國の幼稚園界の現状は、ブロー女史が幼稚園に對する態度とは、甚だ反對なる態度をあらはして居る。直言すれば、我國現在の幼稚園界は、幼児教育といふことを考へるのに、極めて浅く軽く淡い。換言すれば根底となり根據となる哲學がない。之れは我國の教育界全體を通じてのことかも知れないが、幼稚園教育に於て殊にそうである。子供を愛して居るに相違ない。保育の必要は分つて居ないではない。保育の方法については研究せられて居る。殊に日々のことには最熱心である。しかし、それだけでは足りない。

私は我幼稚園教育界に、的確な人生觀を持ち、遠大な人生の理想を持ち、又自らこういふことを充分研究して居る人々が、決して少くないと思ふ。しかし、中には随分こういふことに香氣な人もありはすまいか。素よりもは程度問題であるから、其の程度は種々であるに相違ないが、こんなことは、幼児教育者としては、（幼児教育者なるが故に）どうでもよいことゝ香氣に構へて居る人はありはすまいか。私はよく聞くことがある。私達は子供の遊び相手なのですからと。之れは假令謙遜の言辭としても、自ら愚にし過ぎた云ひ方である。又聞くことがあ

る。幼児相手ですから理屈も何ありません。氣楽なものです。これは通人的なさげた物の云ひ方かもしれないが、聞くものには誤解され易い。若し實際自らそんな軽い心持ちで居るのならば、それは幼児教育を侮るものと云つてよい。兎に角くに、プロイ女史の幼稚園觀などを一方に置いて見ると、我國幼稚園界の此の現状が對比的に深く感じられて來るのである。プロイ女史を懷ふにつけて私の今最も著しく感じて居ることは此のことである。

三

幼稚園教育は其の對象から云つても、仕事の形式から云つても、教育の中の小さい部分である。しかし、此の小さい部分を正しく理解する爲には教育全體の大きい根本的意義から考へられなければ分るものではない。又教育の根本的意義を考へるには人生そのもの、考へ方から考へられなければ分るものではない。而して人生そのもの、考へ方には、時代々々のいろ／＼な思潮や學問が大きな影響を及ぼして來る。すなはち、我々の幼稚園教育の研究は當然茲まで溯るのである。プロイ女史は「幼稚園教育論叢」の序に、最近三十年間に於いて、幼稚園より大學に至る總ての教育過程は、其の宇宙觀、心理學說、社會生活によつて大に影響せられて居

る。此の著の第一の目的は其の影響が幼稚園の上に及ぼせる結果を考究して見度いのであると云つて居る。如何に其の考察の仕方の大きいかを見るべきである。そして總ての問題が、皆それ／＼の哲學的基礎の上に論究せられて居る。或は理想主義を説き、自然主義を評し、プラグマチズムを論じて居る。殊に同書の最後の章の「三種の世界觀」の如きは、普通の淺見者流には幼稚園教育論中の一章とは思ひもかけぬ様に見えるやうな位である。少くも多少なり哲學上の基礎知識がなくては一寸分り難い。普通の教育書や教育論が、たゞ實際的に、たゞ方法的にのみ教育の問題を取扱つて居るのとは大に趣を異にする。私は今こゝにプロイ女史の所論の内容を一々紹介しようとはしない。しかし、こゝいふ風に大きい見地から幼稚園の問題を考へること、或は寧ろ、幼稚園教育の問題を充分正しく理解し得るために、其の實際問題、方法問題の他に、根本問題を始終研究せらるゝことを、我國の幼児教育界に切に促し度いと思ふのである。

小さい井戸でも、それが眞に盡きない井戸であるためには、地下の眞源に達しなければならぬ。而して井戸そのものは小さなものでも、其の連つて居る處は大きな地下の水脈である。

此の水脈を知ることなくして、井戸を穿つことは出来ない。幼稚園も其の通りである、一寸のぞいただけでは小さな浅いものである。しかし、眞源たる水脈はどこ迄深いもの、どこまで深いものか分らない。而して、其の水脈を離れた井戸は涸れ井戸である。

但し、私はプロ女史の研究態度を賞揚することによつて、我國の幼稚園の考へ方も内容的に其の通りでなければならぬといふのではない。如何なる基礎の上に我國の幼稚園を建設するかといふことは、我々が自ら考へなければならぬ。決して他人の説に其のまゝに従ふことはない。しかし、其の態度は、プロ女史の執つて居る態度の様に、どこ迄も人生高遠の大局から幼稚園を考察してゆくのでなくてはならないといふのである。之れプロ女史の長逝の報を聞くと共に、女史を懐かにつけて切に感じたことである。

フレイベルの日に

——フレイベル巡禮の思ひ出を辿りて——

今日はフレイベルの誕生日に當つて居ります。フレイベルといふよりもむしろ只、先生と云つて親しく呼びかけ度い様な氣がしますが、先生は幼稚園といふ名を始めた方で、云はゞ幼稚園の先祖です。

今日の新しい幼稚園は、方法に於て必ずしもフレイベルに結びついて居ない所から、此の頃の幼稚園関係者には、ともするとフレイベルを研究しない人が多い様ですが、併し幼児教育の根本精神に於ては、フレイベルに永久不滅の偉い所があると思ひます。今日の學問からもフレイベルを理解し、研究し、味つて見る價値は充分にあると思ひます。

私の旅行中の實感をもととして少しくフレイベルの生涯を憶つて見ませう。

フレイベルの生れたところは、チーリンギヤの森のオーベルワイスパツハといふ小村です。私は馬車を雇つて行つたのですが、丁度木曾の舊街道を通つてゐる様な氣のする處でした。

その村の廣場に、フレイベルの生れた家があります。現に牧師さんが住んでゐます。フレイベルのお父さんも牧師でした。

幼年時代のフレイベルを憶つて見ると、内氣な陰氣なむつりとした性質の子供の様でした。極く幼少の時にお母さんに別れましたが、この事がフレイベルの性質をかくあらしめた主なる原因の一つでもあると思ひます。後年の自叙傳に「お母さん（繼母）が、あなたと呼びかける程に丁寧にして呉れたのが、大變氣苦しかつた」といふ様な事が書いてありますが、こうゆう事の氣になる性質の子供だつたのです。兄弟は大勢ありますが、お父さんは外出勝ちでしたので、家庭的な楽しみは殆ど得られませんでした。よく垣根の様なところで遊んで居た様ですが、こうして居る中に二つのものがフレイベルの中に生長しました。一つは人間を離れた自然の面白味——枝がさし、葉が芽ぐみ、蕾がほころびるといふ様なことのこゝろを味ひました。このころの子供の様に自然美といふのではなく、又直觀といつた風の理科的のものでもなく、自然界に行はれて居る神祕といふ様なもの——それがフレイベルの全生涯を貫いてゐる——の感じを得たのであります。他の一つは、冥想的な性質です。家庭が明るければ、どうしても陽氣

になつますが、家庭が今云つた様に淋しかつたので冥想的になつたのでせう。後年になつてのフレイベルも何となしに深い深い冥想に耽るといふ方の人でした。

青年時代までは、精神的方面にはあまり關係の無い園藝とか農業とか土木林業と云つた方面の教育を受け、その方面の職業にも就きました。即ち教育者にならうなどは、てんで考へて居りませんでした。それが或る機會によつて、實に思ひがけず教育に興味を持つて來たのです。そこで、當時教育界の尊崇を一身に集めて居たベスタロッツの處に行き教を乞ひました。それからは専心教育者として種々の境遇を経ましたが、教育者としてのフレイベルの最も落ちついたところはカイルハウでありました。カイルハウは、後にフレイベルが初めて幼稚園を設立したプランケンブルヒから山一つ越えた山中の小村で、こゝへ學校を建て、ベスタロッツ流の教育事業を始めたのであります。今でも尙この學校が残つてゐて、この建物の外は少しの農家があるだけの土地です。此處で教育者としてのフレイベルが内的にも外的にも成熟しました。即ちこゝで色々の思索を経た後、フレイベルの胸には、フレイベル独自の教育といふものが熟して來たのです。ベスタロッツからは出てゐますが、フレイベル一流の教育説といふものが生